

八丈方言の非短母音の比較*

高山 林太郎

キーワード：日本語 八丈方言 比較方法 長母音 二重母音

要旨

筆者の修士論文を修正して本稿とした。本稿の目的は、日本語の八丈方言の非短母音（長母音・二重母音）を、各地区方言間で比較して、八丈祖語における非短母音の祖体系を再構し、更に古文献『八丈実記』などの状態とも比較して、通時的変化を描くことである。上代東国方言に由来する八丈方言は、上代中央方言に由来する標準語などと、単純に同じ出発点であったとは言えず、また標準語などの違った変化と、単純に同じような変化を辿ったとは言えないが、一旦はそのように仮定した上で、通時的変化の議論を実施してみることは、決して無益ではない。最終的に非短母音は、それほど古くない、1800年前後から各地区方言へと分岐し、多様化したと分かる。

1. はじめに

本稿の目的は、日本語の八丈方言の非短母音（長母音・二重母音）を各地区方言間で比較し、八丈祖語における非短母音の祖体系を再構し、更に江戸時代末期の古文献の状態とも比較して、通時的変化を描くことである。本稿で扱う通時的変化は主に2点あり、非短母音の音変化と、サ行イ音便（Vsi > Vi）である。前者は4～8節で扱い、後者は9節で扱う。10節は結論および筆者の調査に基づくデータに関するまとめ、続いて末尾の資料である。論を展開する上では原則として既存資料・先行研究のデータを用い、不足する場合に限り筆者が自ら調査・録音したデータを用いた。本稿の論全体の検証のために集められたそれらのデータは、2008年夏、2009年秋、2010年の3段階の調査に基づき、2008～2009年の分を文字化資料として末尾に収載する。なお、大賀郷・宇津木・鳥打地区では調査できなかった。

八丈方言には短母音のみならず長母音・二重母音が存在する。二重母音は標準語に比べて短く発音され、2つの母音のあいだの切れ目というものは全く感じ取れない。長母音も標準語に比べて短く発音されるため、慣れないと短母音に聞こえる場合がある¹。短母音はともかく、長母音・二重母音は八丈方言が話される地域の各地区方言ごとに多彩な現れ方をする。

* 筆者による調査にご協力下さった方言話者の皆様に、厚く御礼申し上げます。その芳名を右に記します（調査時期の順に）：2008年夏の調査において、末吉より、沖山恒子氏（1910生）。中之郷より、福田栄子氏（1939生）。榎立より伊勢崎陽子氏（1925生）、菊池浄氏（1933生）。青ヶ島より、広江八千代氏（1916生）、菊池義行氏（1923生）。2009年秋の調査において、末吉より、沖山尚昭氏（1927生）、服部直子氏（1931生）。青ヶ島より、菊池義行氏（1923生）。中之郷より、菊池貞行氏（1949生）、福田栄子氏（1939生）、榎立より佐藤スミ子氏（1921生）、菊池浄氏（1933生）、菊池企世氏（1933生）。三根より喜田孝氏（1945生）。2009年12月に修士論文を提出した。2010年の調査では主として左記に挙げた話者の皆様にお世話になった。

¹ 助詞「へ」に対応した「方向」を表す「イー格」が重音節の直後に膠着する場合の三根の音形 /iR/ (e.g. kjuRsjuR'iR 九州へ) は金田章宏（2001）では長母音だが、例えば大島一郎編（1987: 17）には三根の音形として [kju:ʃu:i] と短母音で記されていた。なお、筆者は榎立での調査では短い /i/ を観察した。

2. 八丈方言が話される地域の地理歴史など

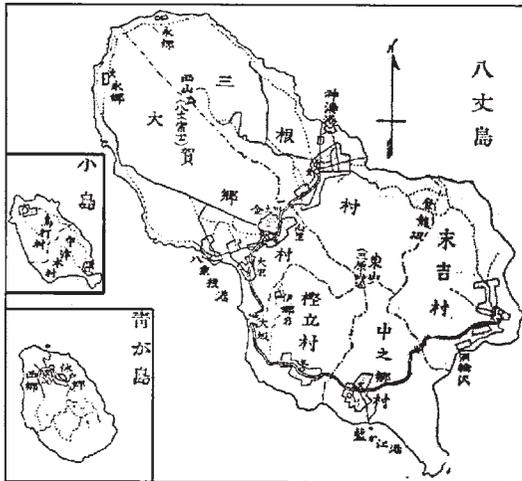


図 1. 国語研（1950）の地図の引用・加工

八丈方言が話される地区が存在する島は、八丈島（はちじょうじま）、八丈小島（はちじょうこじま）、青ヶ島（あおがしま）である。これらは東京都の伊豆諸島に属する。伊豆諸島の有人島は北から順に大島（おおしま）、利島（としま）、新島（にいじま）、式根島（しきねじま）、神津島（こうづしま）、三宅島（みやけじま）、御蔵島（みくらじま）、八丈島、青ヶ島であり、御蔵島から約 75km 南南東に八丈島がある。大島から御蔵島までの島で話される方言は北部伊豆諸島方言と呼ばれ、八丈方言とは区別される（平山輝夫編（1965）参照）。

八丈島の中部を坂下（さかした）、南部を坂上（さかうえ）、北部を永郷（えいごう）と言う。永郷は伝統的な地区ではないので考察の対象外とする。坂下には三根（みつね）・大賀郷（おおかごう）という地区が、坂上には末吉（すえよし）・中之郷（なかのごう）・榎立（かしたて）という地区が存在する。地名の通り、坂下から急な峠を登った先に坂上がある。坂下・坂上間は古くは三根・末吉間の登龍峠²で主に往来していたが、1907 年以降は大賀郷・榎立間の大坂（おおさか）トンネルで主に往来するようになった³。当初は素掘りのトンネルだったが、1968 年以降は近代的な自動車道のトンネルとなっている⁴。

八丈島から約 7.5km 西にある八丈小島にはかつて宇津木（うつぎ）・鳥打（とりうち）という地区があったが、住民が八丈島に移住した 1969 年以降無人島である。八丈島から約 65km 南にある青ヶ島は一地区である。1785 年に島の火山が噴火した際には住民が大賀郷の八重根港（やえねこう）に避難し 1824 年に還住（かんじゅう）したという歴史があり、八重根港と青ヶ島の三宝港を結ぶ連絡船「還住丸」は故事から名づけられた。

なお、以上の地名は公式に地図に記載されている標準語の地名とその読み方を原則として記しているが、各地区では独自の呼び方をすることがあり、公式の標準語地名と大して違わない場合もあれば、かなり異なっている場合もある。

八丈方言は上代東国方言に由来するとされる。上代とは 794 年以前の文献に基づく最古文獻時代で、中央方言と東国方言が例証されるが、東国方言の記載は相対的に数が少ない。

² 「登龍峠」のほか「登龍・登龍道・登龍坂」ともいう。現在公式には「登龍峠」だが、古くからの住民は「登龍」とだけ言うことが多い。読み方は、坂下では「のぼりょう」、坂上では「のぼりゅう」が優勢である。

³ 1907 年以前も大坂の峠を往来することは不可能ではなかったという。登龍峠より急峻な道であった。

⁴ 現在では登龍峠も近代的な自動車道になっているが、蛇行が多くて地図上の見た目より移動距離が長くなるうえ、土砂崩れなどで頻繁に通行止めになるため、三根から末吉へ行く場合でも大坂トンネルを利用することが多い。八丈島で地名に必ず「坂」が付くのは「大坂、坂下、坂上」の 3 つだけであるらしく、鶴窓帰山（1848）『八丈の寝覚草』には既に「大阪、阪下、阪上」の文字が確認できる。

3. 音素表記の説明

音節目録を表1に示す。八丈方言の8つの地区方言の中では三根と中之郷の体系が詳しく調査されている。三根は金田章宏(2002)に基づき、中之郷は平山編(1965)における馬瀬良雄の記述に基づくが、単なる引用でなく記述や語例などを吟味し再整理したものである。

表1. 三根と中之郷の音節目録

三根 (調査開始年: 1989)										中之郷 (調査年: 1958)						
/C ₁ θV ₁ /					/C ₁ lV ₁ /					/C ₁ θV ₁ /					/C ₁ lV ₁ /	
'i	'e	'a	'o	'u	'je	'ja	'jo	'ju	'i	'e	'a	'o	'u	'ja	'jo	'ju
hi	he	ha	ho	hu		hja	hjo	hju	hi	he	ha	ho	hu	hja	hjo	hju
ki	ke	ka	ko	ku		kja	kjo	kju	ki	ke	ka	ko	ku	kja	kjo	kju
gi	ge	ga	go	gu		gja	gjo	gju	gi	ge	ga	go	gu	gja	gjo	gju
si	se	sa	so	su	sje	sja	sjo	sju	si	se	sa	so	su	sja	sjo	sju
ci	ce	ca	co	cu	cje	cja	cjo	cju	ci		ca	co	cu	cja	cjo	cju
zi	ze	za	zo	zu	zje	zja	zjo	zju	zi	ze	za	zo	zu	zja	zjo	zju
	te	ta	to						(ti)	te	ta	to		(tja)		
	de	da	do						(di)	de	da	do		(dja)		
ni	ne	na	no	nu	nje	nja	njo	nju	ni	ne	na	no	nu	nja	njo	nju
ri	re	ra	ro	ru		rja	rjo	rju	ri	re	ra	ro	ru	rja	rjo	rju
pi	pe	pa	po	pu		pja	pjo		pi	pe	pa	po	pu	pja	pjo	pju
bi	be	ba	bo	bu		bja	bjo		bi	be	ba	bo	bu	bja	bjo	bju
mi	me	ma	mo	mu		mja	mjo		mi	me	ma	mo	mu	mja	mjo	
(wi)	we	wa	wo			wja	wjo			we	wa			(wja)		

/C₁/=' , h, k, g, s, c, z, t, d, n, r, p, b, m, w/, /S/=θ, j/, /V₁/='i, e, a, o, u/, /C₂/='Q, N/, 三根は/V₂/='R, i, u/, 中之郷は/V₂/='R, a/ (※V₂の詳細は表13・表17参照)と書けば、音節構造は原則/C₁SV₁/, /C₁SV₁C₂/, /C₁SV₁V₂/の3種類となる⁵。/'は音節の切れ目を表し[?]が聞こえることもある(但し中之郷では/'e/[je], /'o/[wo]が紛れ込み相補分布する)。/Q, N, R/は順に促音、撥音、「直前の母音の延長」を表す音素。/θ/は/S/の位置に何も存在しないことを表す。金田(2002)のデータから三根の[wi]は[i]と相補分布して/'i/に纏められる⁶。馬瀬の記述によれば中之郷の/ti, di, dja, tja, wja/は青・中年層でのみ見られる。ア行とヤ行のエは中央方言の歴史(奈良・京都を中心とした歴史)では/'e/[je]に合流しているが⁷、中之郷にも/'e/[je]が現れ、三根では新たに/'e/'jeの対立が生じている⁸。ア行のオとワ行のヲは中央方言の歴史では/'o/[wo]に合流しているが、中之郷では/'o/[wo]に合流したあと語頭短母音だけ/'o/[o]に変化したと見られる。他方で三根では、語頭短母音の一部で/'o/[o]に変化し切らなかったため(e.g. wowowa 追ほわ“追うよ”), 一時的に/'o/[wo]の対立が生じていると見られる。

⁵ 但し、「中之郷. goaN [gwan] ~しよう・~の様に」は/C₁SV₁V₂C₂/となる。筆者の2010年の調査では更に、[noejo motteko, nov:jo novgan] (縄を持って来い、縄輪を綯おうよ)の/oaR/[ue:]のような母音が見られた。

⁶ 語頭/'i/[i]のみ、語中軽音節直後/'i/[wi], /'iR/[wi:]、語中重音節直後/'i/[i], /'iR/[i:]となる。e.g. 三根. 'iko 休眠中の蚕, [awitakja] 会ひたけわ “会いたいよ”, [awi:] 会ひへ “会いに”, 'oR'i “呼びかけ”, 'osei'iR 教へへ “教えに”。語例は金田(2001: 19, 439, 440, 442, 446)より引いた。

⁷ 音声を表す括弧の斜体は、実際に観察されたのではなく、何らかの形で推測された音声であることを表す。

⁸ */'ai/ > /'cR/, */'jai/ > /'jeR/ という変化により、対立は/eR/の直前でのみ発生している。

4. 一次的な長母音・二重母音から二次的なものを区別する

金田 (2001: 25) は長母音・二重母音について「八丈方言全体の音韻を論ずるばあいは一次的なものだけか、せいぜいこれに a:と ai をくわえた範囲が妥当で、そのほかの二次的なものは個々の地区に言及するさいに考慮すればよいだろう」と述べる。同書 pp.15-28 の主張を再検討・整理して表 2・表 3 に纏めた。(I), (II) が「一次的」なもので(III), (IV) が「二次的」なものになる。これらは 2 層に分かれる対応グループの新・旧を「二次的・一次的」と呼んでいる。ここでは金田 (2001) の議論を引用・発展させて「二次的」なものの対応関係について検討し、八丈祖語における母音の祖体系を再構する上では「二次的」なもの(新)は役に立たないことを示す。逆に「一次的」なもの(旧)が役に立つことについては後述する。

表 2. 三根方言の「二次的」な長母音・二重母音の体系と由来

	(α) 長母音・二重母音						(β) 長母音・二重母音への変化が起こる前の様々な状態					
(I)	ei	iR	eR	oR	ou	uR	(※この枠の内容は省略し、表 3 に詳述する。)					
(II)												
(III)	oi	ui	ai	aR			ui	ai				
(IV)							ore	ure	ari, are	ara		

三根の/oi/, /ui/について金田 (2001: 24) より引用する。

oi 指示代名詞, およびそれから派生した単語の r が脱落したものや人名などにかぎられる。一般に坂上では r の脱落がおこりにくく、この代名詞に関しても例外ではないのだが、代名詞派生の接続詞 *soide*, *hoika*: などごくかぎられた単語では坂上でも脱落形がふつうにきかれる。三根の一般的な規則にしたがえば、oi は ei に変化するはずだが、r 脱落のあとではそのような変化はおこらない。

・ oi<oe<ore koi<kore これ soi<sore それ doi<dore どれ

ui 共通語(漢語等)の ui に対応するが、語彙がごくかぎられている。また、r の脱落によるものが 1 例ある。坂上では同様に r の脱落はおこりにくく、共通語のない方以外は人名ぐらいにしかあらわれない。これも三根の一般的な規則にしたがえば ui は i: に変化するはずだが、r の脱落のあとではそのような変化はおこらない。

・ ui suiziNsama 水神さま suibi むだ遣い(語原不明) muika むいか(六日)

・ ui<ure ui あれ(1 例のみ)

/oi/について異論はない。確かに、坂下と坂上の方言が分かれてから坂下で r 脱落が進んだと考えられ、母音の祖体系には再構できない「二次的」な二重母音である。/ui/については、r の脱落で説明できる例は/oi/と同様に理解できる。筆者の調査によれば、/suiziN/は坂上[suiʒin]や青ヶ島[suyʒin]が確認された。/suibi/ (衰微; 大盤振る舞いによる窮乏)は三根にのみ確認され、普通は/buQcjarigane/ (捨て金; 無駄遣い) と言う。/muika/は坂上[muiqa]や青ヶ島[muyqa]が確認された。従って坂下と坂上の対応例は 2 例に留まり、うち 1 例は固有名に近いため利用しにくい。もう 1 例は数詞であり語根が維持されて、本来起こるべき/ui/>/iR/という変化が

特別に妨げられたとも解釈できる。/muika/の1例から八丈方言の非短母音の祖体系に*/ui/を再構することは可能であるが、1例しかない。

ところで/ui/に関連して金田(2001:24)は「三根の一般的な規則にしたがえばuiはi:iに変化するはず」と述べている。更に「tenegei 手拭い」に関して金田(2001:404)(注15)は、

(注15) 馬瀬1965や大島1975, 大島編1987ではui>eiを規則的な変化とみなして, この例や「/ce'itaci/ (ついたち)」をあげるが, 動詞がnogouwaなのでtenegeiは*tenogoi>*tenegeiをへてこのようにこのように変化したもので, 「ついたち」も筆者が確認したのはui>i:iの規則どおり, ci:taciである。大島編1987のあげる/ze'ibuN/ (随分), /heQte'isama/ (へつつい様) についてはたしかにzeibu, heqceisamaなので, この2例は例外的にuiに対応しているとみるべきだろう。対応の例外的なこれらの単語は, その伝来の時期とこの方言に規則的におこった母音変化の時期との関係が問題になるだろう。

と述べている。筆者の調査では青ヶ島で[feitaŋi]が確認された。他の調査者の情報と照らし合わせると金田が三根で確認した「ci:taci」が三根の固有形であるとは考えにくく, 特に「馬瀬1965」⁹の/ceitaci/[tseitaŋi]は, 馬瀬(1961)でIPAを駆使する馬瀬良雄の記述であり信頼できる。また, 標準語の/ui, u'e/と対応している/ei/の例は他にもあり¹⁰, 対応例は/s, c, z/のあとに/ei/が来ている場合に限られる。標準語の/iR, i'e/と対応している/ei/の例や¹¹, それに逆らって/s, c, z/のあとで標準語の/iR/と対応している/iR/の例もある¹²。通時的な音変化について議論する為には更に助詞「へ」に由来する「イ一格」や助詞「を」に由来する「ヨ格」なども考えあわせる必要があるが, 少なくとも/s, c, z/のあとで対応規則が特殊なものになっているという事はこれだけの情報から判断できる。この点は後に再論する。

三根の/ai/について金田(2001:23)より引用する。

ai 一部の共通語(漢語)のaiに対応する。また, rの脱落によるものがある。漢語や二人称代名詞, 感動詞の例は坂上地区にもみられるが, 坂上では一般にrの脱落がおこりにくいので, nomarigenara, warewarewareなどがおおくきかれる。

- ・ ai sadaigecu 再来月 taike 大家 saNkai 3回 daisukidara 大好きだ
- ・ ai<ari hutai ふたり nomaigena:<*nomarigena:<*nomiarigenara 飲んだようだ
- ・ ai<ae omai おまえ (夫が妻に, など)
- ・ ai<are ai 私 dai だれ nomaidou<*nomaredomo 飲んだけれども daidou<daredou だけど
aijaijai まあ! waiwaiwai まあ!

⁹ 平山編(1965:182)を指す。なぜなら馬瀬は1958年の調査で三根・榎立・中之郷・宇津木を担当しているということが馬瀬(1961)の冒頭に記されており, 平山編(1965)は同じ調査に基づいている。

¹⁰ e.g. 三根. seisi 末吉, seimono 吸物, ceitaci 朔日, cei 杖, 'ucucei 一昨日, kateiru カツエル“飢える”, heQceisama へつつい様“竈”, zeibuN 随分. 大賀郷. seRdoR 水道. 地区不明. zoRseR 雑炊. 中之郷. seRrjoR 推量(※疑義あり)。語例は国語研(1950)巻末辞典, 馬瀬(1961), 大島編(1987:13), 浅沼(1999:126)より。

¹¹ e.g. 三根. sikei 数居, 'oseiru 教える, neiru 煮える, heiru-me ヒヒル“蛾”-メ“動物名マーカー”, heiki 鼠虱, hei 稗, mciru 見える。語例は金田(2001:22, 444), 大島編(1987:13)から引いた。上代中央方言で蛾をヒヒルと言い, その後*fi'iruという形になっていたと推測される。

¹² e.g. 三根. siR 椎, ciRto ちいと, mociR 餅, ziR 爺。語例は金田(2001:440, 442, 448)から引いた。上代中央方言で餅をモチヒと言い, その後*moti'iという形になっていたと推測される。

三根では母音連続 a-i や a-e は規則的に e: に変化し、漢語でも de:ko ダイコン, saNme: 3 枚のようになるが、r の脱落によって生じた ai からはそのような変化がおこらない。r の脱落で説明できる例は、/oi, ui/ における r 脱落の例と同様に理解できる。「'omai お前」については、これは本来 /'omeR/ で現れるはずのものである。ところで実は「'omeR 御前」という語も存在する。浅沼良次 (1999: 62) は、

オメー ome: [名詞] [あなた] 八丈島ではオメーはあなたとおなじで尊敬語。共通語のオマエは同輩以下の者に対する、ぞんざいな言い方として用いられる。外来者が島人にオメーと言われると侮辱されたものと取るのも止むをえないことである。

と記す。金田が挙げた /'omai/ はぞんざいな言い方である /'oma'e/ が変化したものと考えられ、借用語に由来するようだ。その他の /ai/ の例は漢語ばかりで、漢語であっても /eR/ で現れる場合はあるから、これらも時代の下る借用語に由来する可能性が高い。

三根の /aR/ について金田 (2001: 19-20) より引用する。

a:/aa a:/aa は r の脱落によるものが主で、あとはいくつかの語彙にかぎられる。感動詞の例は短母音であられることもあるので、長母音であることが義務的とはいいきれない。

また、r の脱落は坂上の中之郷でも接続詞 hoika: (それから) やコピュラ ~da: (~だ) などにはみられるが、坂上では一般に r の脱落がおこりにくいので、nomaraba, koqkara, wara【注; hara】などがふつうである。三根では r の脱落しない語形がより古いと意識されている。

後述するように、三根では母音連続 a-a は規則的に o: に変化し、これがほかの地区との対応関係に【注; の】なかにあるが、この r の脱落による a:/aa は o: に変化することはない。三根 o: や中之郷 oa が a: に対応する末吉をのぞけば、この a: のあらわれにくさは八丈方言のひとつの特徴といえるだろう。

- ・ a: <aa < ara noma: ba 飲んだら koqka: ここから ha: < hara < harja < haja もう
- ・ a: sa: ziaja サージ綾 (綾織の模様的一种) pa: maja パーマ屋 ba: まあ! ja: えっ? (対等以下に聞きかえす)

r の脱落で説明できる例については、/oi, ui, ai/ における r 脱落の例と同様に理解できる。その他の例は外来語や間投詞であり非短母音の祖体系の再構には使えない。

以上の議論を簡潔にまとめると、上述の表 2 の(Ⅲ), (Ⅳ)のようになる。「(β) 長母音・二重母音への変化が起こる前の様々な状態」として(Ⅲ)では漢字音などの /ui, ai/ を挙げ、(Ⅳ)では一部地区で r 脱落を起こすことになる /ure, are, ari, ore, ara/ を挙げた。(Ⅳ)は坂上では r 脱落を起こさない場合が多いので、八丈祖語の非短母音の祖体系を再構する上では役に立たない。(Ⅲ)はほとんどが借用語であると見られ、唯一固有語と見られる /muika/ から * /ui/ を八丈祖語の非短母音の祖体系に再構することはできるが、1 例しかない。/ui, ai, oi, aR/ が「二次的」であるというのは、祖体系の再構の観点からはこのような理由による。

5. 一次的な長母音・二重母音の由来と対応

ここでは金田 (2001) の議論を引用・発展させて「一次的」な長母音・二重母音の由来と

対応について検討し、母音の祖体系を再構する上で「一次的」なものが役に立つことを示す。表3は表2の上半分を切り出し、表2で省略した内容を補ったものであり、「一次的」なものの由来を子音脱落の有無により(II)と(I)にグループ分けしている。表2(β)(III),(IV)には共時的に例証されるものしか無かったが、表3(β)(II)では現代の共時態の中で例証不可能なものも挙がり、(I)では現代からは例証不可能なものしか挙げていない¹³。表3(β)に示す音は以下で個別に議論する。「#」は複合語内部境界を表す。なお本節では通時の変化に関して辻褃の合う解釈を述べることがあるが、それ自体の証明は目的とせず、語例を対応関係ごとに表3(β)の形で整理することを目的としたものである。また、各地区方言間の対応については次節で論じることとし、ここでは三根方言について述べる。

表3. 三根方言の「一次的」な長母音・二重母音の体系と由来

	(α) 長母音・二重母音					(β) 長母音・二重母音への変化が起こる前の様々な状態						
(I)	ei	iR	eR	oR	ou	uR	*ei, *oi	*ii	*ai	*o#’a, *a#’a	*ou, *au	*uu
							*ii, *ui	*ui		*owa, *awa, *a’o	*o’o, *a’o	*u’o
(II)							*eki, osi	usi	asi, *ase *are	ako *aro		*usu

三根の/uR/について金田(2001: 21)より引用する。

u: 三根 u:は中之郷 u:, 末吉 u:, 青ヶ島 u:に対応する。これは共通語(漢語)の u:に対応するものである。また uo, uu からの変化である。これも, hacu:のように結合部分でも融合する。

- ・ u: siNkeicu:神経痛 cju:jo 注意を hu:cuki ようす(フウツキ)
- ・ u:<uo<uwo ju:湯を(ヨ格) kacu:カツオ nu:wa 縫う。
- ・ u:<uo<uho hacu:<*hacuho 初物(初穂) u:do あれほど
- ・ u:<uu<usu su:rowa/hicqu:rowa 飲む(スル)。

さいごの例で, usu>u:を s の脱落による母音連続 uu とする解釈もあるが, s が脱落しないことがおおい坂上中之郷でも hicqu:rowa になるので長母音とみとめることにする。

標準語の/uho/に対応する語例は, 上代東国方言の段階からはハ行転呼音により*upo>*uwo と変化したと解釈され¹⁴, 更にア行のオとワ行のヲの合流により*uwo>*u’o/uwo/と変化したと解釈され, 更に’o/wj/の狭母音化により*u’o>*u’u と変化して漢字音や s 脱落後の*usu も含む*u’u に合流したと解釈され, 更に*u’u>*uu /uR/となって現代に至ると解釈される。このような解釈に基づいて表3(β)(I)には*uu, *u’o/uwo/が, (II)には*usu が分類されている。以上は中央方言とほぼ同様の過去の状態から中央方言とほぼ同様の変化を辿ったとすればの話で(同源同流解釈と呼んでおく), 独自の源から独自の変化をした可能性は否定できない。

三根の/ou/について金田(2001: 23-24)より引用する。

ou 三根 ou は中之郷 o: ([u:]~[o:]), 末吉 o:, 青ヶ島 au に対応する。

¹³ 『八丈実記』から例証されるものもあるが, 結論先取りになるので表3では「*」を付した。

¹⁴ 上代語のハ行子音を便宜的に/p/と書くが, [p, φ, b, β] などから特定の音価を選好した用字ではない。

共通語（漢語など）の *o:* に対応する。また *owo*, *oho* からの変化である。【中略】

- *ou hou:* (～の) ほうへ *oucja* おじいさん (翁) *zjoute* 料理して
- *ou<owo kou* 子(ヲ格) *omouwa* おもう。 *huNdousi* 禰 *totou<*totowo* お父さん
*houde<*howomite* (自分で口に) 含んで
- *ou<owo<omo nomedou<*nomedowo<*nomedomo* 飲むけれど, 飲んでも
- *ou<owo<owa kousowa* 壊す。(1例のみ)
- *ou<owo<awo utouwa* うたう。 *cukouwa* つかう。 *joura* じつと, おとなしく
- *ou<owo<awo<amo nomunouwa<*nomunowowa<*nomunamowa* 飲むだろう。
- *ou<oho koudo<*kohodo* これほど *soudo* それほど *doudo* どれほど

同源同流解釈を述べる。ハ行転呼音は */uR/* の場合と同様である。マ行子音の一部は八丈方言ではハ行転呼音と同様の現象を起こしたと解釈される。三根の */ou/* は、中央方言の文献に例証される漢字音 */ou, au/* が対応するほか、和語では主に中央方言の **owo* に対応し、**awo* の一部¹⁵ にも対応する。これらがア行のオとワ行のヲの合流によりそれぞれ **o'o/owo/*, **a'o/awo/* となり、更に *'o/wo/* の狭母音化によりそれぞれ **o'u*, **a'u* となり、どこかの時点で八丈方言における漢字音 **ou*, **au* と合流し、最終的に現代の */ou/* になったと解釈される¹⁶。このような解釈に基づいて表 3 (β) (I) に **ou*, **o'o/owo/*, **au*, **a'o/awo/* が分類されている。(II) には語例が無い。

三根の */oR/* について金田 (2001: 20-21) より引用する。

o: 三根 *o:* は中之郷 *oa*, 末吉 *a:*, 青ヶ島 *o:* に対応する。中之郷や榎立ではもとの音連続が *w* をふくむばあい *owa* に近くあらわれることがあるが、「*howajo* 母を」のように格助辞 *jo* が膠着し、「*woa* 輪を」のように融合しない (**hawoa* にならない) ことから、長い母音であることがわかる。

三根 *o:* は共通語 *o:* には対応せず、*oa*, *ao* などからの変化で、例の *ho:go:tei* や *oto:ne* などのように結合部分でも融合をおこすのが基本的である。

- *o:<oa sjo:rime* シロアリ *oto:ne<*otoane* 兄弟姉妹
- *o:<oa<owa omo:zu* 思わず *saso:zu* 誘わず
- *o:<oa<oha sjo:tome* キジバト (シロハト)
- *o:<ao<aro nomo:* 飲んだ (連体) *nomodo:<*nomodaro* 飲むのである (連体)
- *o:<ao<ako siNno:dara* (三根) *<siNnakodara* (中之郷) しないんだ。(動詞否定形のみ)

つぎの *awo* や *awa* のばあいは、うしろの母音 *o* や *a* の脱落と同時に半母音が母音化した、*au* からの変化とみてよいだろう。

- *o:<au<awo wo:* 輪を (ヲ格) *jo:<*jawo<*iwawo* 岩 *kako:<*kakawo* 奥さん

¹⁵ e.g. 三根. *'joura* やをら, *nou* なほ, *'utouwa* 歌ほわ“歌うよ”(など音形 **CVCa'owa* の動詞), *'ougasima* 青ヶ島 (cf. 青ヶ島. *'augasima*; 末吉. *'oRgasima*)。この対応グループには、普通名詞の語例は存在しない。

¹⁶ 「*kousowa* 壊す」について金田は **kowasowa* という原形を想定するが、上代中央方言では */kopotu/* という形が例証され、標準語の */ko'wasu/* の元になる中央方言の形は室町時代末期以降しか例証されない、新しい形であると考えられる。八丈方言が室町時代以降に成立したのでない限り */kopotu/* と比較すべきであり、*/kousowa/* はここで示した解釈に対する例外にはならない。これは現代の標準語との単純な比較が困難な語例となる。

- ・ o:<au<awo<amo ho:go:tei<*hawaga motoe 母のもとへ
- ・ o:<au<awa o:粟 ho:母 ho:ki ほうき ko:kowa かわく。so:rowa さわる。
- ・ o:<au<awa<ama jo:mo<*jo:Nmo<*jawaNmo<*jamamomo ヤマモモ

以上は変化まえの音連続に o や唇音 w がふくまれており、音環境によって生じた変化であるといつてよい。こうした、awa など o: に変化するという o: への指向性の強さと、a: をふくむ単語の極端な少なさが類推をひきおこし、つぎの例のように唇音のない aa という結合をも o: に変化させている。この現象は中之郷や青ヶ島でも同様にみられる。【中略】

- ・ hado:si はだし maso:sei<*masa-asei マサにいさん kumo:sei クマにいさん

同源同流解釈を述べる。ハ行転呼音やマ行子音における同様の現象は /uR, ou/ の場合と同様である。/oR/ の元になる音連続は *awo, *awa, *owa の 3 つが基本であると解釈される。但し中央方言の *awo の一部が三根の /ou/ に対応する点は既に述べた。*aro や中之郷に例証される /ako/ は子音脱落後に *awo またはその次の段階の *a'o[awo]/ に合流したと解釈され、*a#'a, *o#'a は『八丈実記』の段階でそれぞれ *awa, *owa の変化の流れに参加していたと見られる。金田が提案する *a#'a>*aa>/oR/ という変化は正しそうだ¹⁷。

金田が「つぎの awo や awa のばあいは、うしろの母音 o や a の脱落と同時に半母音が母音化した、au からの変化とみてよいだろう」と述べる点には異論がある。『八丈実記』を見る限り *awa は /aa/ に変化している。また仮に *a'o[awo]/ が *au を経由すると考えると、(*cuka'owa) < *cukauwa > /cukouwa/ (脚注 15 参照) という変化が完了してから (*nomaroka) < *noma'oka > *nomauka (> nomoRka) などと変化しなければ、両者が混ざり、現代の事実と反する。なお『八丈実記』には /ou, oo/ が同時に見られる。つまり *a'o[awo]/ が /oo/ に至るまでに *au を経由したと無理に考えることはできなくはないが、経由しないと考えるほうが経済的である。

なお [awo, awa, owa] という音連続を保ったまま現代に至る語例もあり¹⁸、義務的な変化ではなかったようだ。『八丈実記』を見ると、1855 年頃には *a'o[awo]/ > /oo/, *awa > /aa/, *owa > /oa/ と 3 種の非短母音になっていた¹⁹。以上の解釈に基づいて表 3 (β) (I) には *o#'a, *a#'a, *owa, *awa, *a'o[awo]/ が、(II) には子音脱落を経由する *aro, /ako/ が分類されている。

三根の /eR/ について金田 (2001: 19) より引用する。

- e: 三根 e: は、中之郷 ia ([ia] ~ [ja:]), 末吉 e:, 青ヶ島 e: に対応する。

共通語の e: には対応せず、漢語をふくむ ai, ae からの変化である。ke:rowa などを ae>ai>e: としたのは、ウタことばなどに kairo (帰る) などがあることによる。動詞での s の脱落は坂上ではおこりにくい、アシタバは中之郷でも ja(:)taba である。【中略】

- ・ e:<ai de:neN 来年 te:ge:ni いい加減に he:rowa 入る ke:gou トコブシの貝殻

¹⁷ 例えば『八丈実記』の「maamini/ (早く)」という語は、現代の三根では /moRmiN/ で現れる。

¹⁸ e.g. 三根. kawaserowa 買はせろわ “買わせるよ”, 'aworerowa 扇れろわ “扇ぐよ”。語例は金田 (2001: 440) より引いた。ところで八丈方言では動詞・形容詞の連体形はそれぞれ「'aro mono 有る物 “有る物”」「'awoke 'umi 青け海 “青き海”」のようになり、活用語尾の母音の音色が標準語・上代中央方言とは異なり、上代東国方言と一致している。終助詞「wa わ “よ”」に対しては連体形で接続し、現代共時態では「'arowa 有るわ」「'awokja 青けわ」となっている。

¹⁹ 『八丈実記』にカタカナ表記されたいわゆる「約 300 余の島語」とその音韻解釈については後述する。

- ・ e:<ai<asi e:taba アシタバ hane:te 話して kakiite:te 書きいたして
- ・ e:<ai<ae jame:ヤマへ (イー格) ke:rowa 帰る he:rowa 張る (ハヘル)
- ・ e:<ai<aju e:mowa 歩く ke:粥
- ・ e:<ae<awe<ame nomune:dou<*nomunawedowo<*nomunamedomo 飲むだろうけれど
- ・ e:<ae<ase nome:te<nomasete 飲ませて (使役動詞のみ)
- ・ e:<ae<are nomaNne:ja<*nomiarunareja 飲んだところ (活用語尾の ne:<nare のみ)

同源同流解釈を述べる。ハ行転呼音やマ行子音における同様の現象は/uR, ou, oR/の場合と同様である。/eR/の元になる音連続は*a^hiが基本であると解釈される。中央方言の*a^hwe, *a^he/aje/に対応する語例は、先ずワ行のエがア行のエに合流して*a^hwe>*a^he/aje/となり、'e/je/の狭母音化により*a^he/aje/>*a^hi>*aiとなると解釈される。中央方言の*ajuに対応する語例はju^hiの合流により*a^hju>*a^hi>*aiとなると解釈される。*ase, *areは子音脱落后に*a^he/aje/に合流し、/asi/は子音脱落后にすぐに/ai/に合流すると解釈される。/'asita, 'aita/は江戸時代の文献から例証され、サ行イ音便の証拠となる(※後述する)。「動詞でのsの脱落は坂上ではおこりにくく、坂上にはサ行イ音便を起こさない形も多く例証される。このような解釈に基づいて表3(β)(I)には*a^hiが、(II)には子音脱落により*a^he/aje/や/ai/となる*a^hse, *a^hre, /asi/が分類されている。三根の/iR/について金田(2001:17-19)より引用する。

i: 三根 i:は中之郷 i:, 末吉 i:, 青ヶ島 i:に対応する。ui, iiなどからの変化である。【中略】

- ・ i:<ii<ihi ni:ki 2 匹 si:ki 4 匹 sici:ki 7 匹 haki:ki 8 匹
- ・ i:<ii<ie seisi:末吉へ (イー格) nomi:飲みへ (動詞目的形=イー格相当)

はじめの例を長母音としたのは、【中略】ほかでも「go:ki 5 匹」や「ku:ki 9 匹」のように不規則ながら長母音化していることによる。つぎの、へ格・方向格にあたるイー格の例が格助辞 e のままでなく、e:i の変化後に短母音おわりの名詞についたとする理由は、もし i-e (seisi-e, nomi-e) であるなら、後述する変化の規則から ie>ei (osiete>oseite 教えて, など) とならなければならないからである。【中略】

- ・ i:<ui<uwi suki:naga:掬いながら huri:naga:ふるえながら (huru:wa<*huruwowa ふるえる。フルイナガラに対応)
- ・ i:<ui<uki ci:taci ついたち (1 例のみ)
- ・ i:<ui<usi hi:te 伏して mi:te 燃やして (musowa 燃やす。) (動詞のみ)
- ・ i:<ui<ue uki:あそこ (uku) へ (イー格)

動詞中止形などにおける s の脱落は、上の例にかぎらず坂上地区では一般におこらないか、おこりにくい。【中略】以上の変化とは別に、長い母音のあとの単独の i が規則的に長母音化する傾向がある。【中略】

- ・ i:<i ko:i:川へ (イー格) oseii:教えへ (動詞目的形) doui:te:te<*doutasite どういたしまして (結合)
- ・ i:<i<si toui:te<tousite 通して odoui:te<odousite (枝を) 折って mo:i:te 回して

まずは金田が挙げた語例を検討する。最初の例は形態素として「Rki~匹」が分析され複合語

内部境界を跨いでいるため単純語内部の長母音とは見なせず、通時論では扱いにくい。

「イー格」の例は、助詞「へ」が**i*に変化してから直前の母音と融合したという解釈に異論はない。しかし「ie>ei」という解釈には異論がある。p.22に「ie>eiのように逆転したものと推測される」とあるが、「逆転」は起こりやすい変化とは考えられない。ところで脚注11で示した例の中には**ii>ei*という変化を起こしたと見られる例がある (e.g. heiki 最眞)。既に/eR/について述べた'e/je/の狭母音化という現象を適用し**i'e>*i'ii*と変化させて**ii*に合流させておけば、/ei/への変化を統一的に説明できる。「イー格」では**ii>ei*という変化が起こらないが、これは「イー格」という文法的な条件の下で語根が維持されて変化が妨げられたと解釈される。また、「ci:taci」の例が挙げられているが脚注10で挙げた類例や金田以前の研究者の観察などから/ceitaci/が三根の固有形であったと考えられる。

同源同流解釈を述べる。ハ行転呼音は/uR, ou, oR, eR/の場合と同様である。サ行イ音便は/eR/の場合と同様で、/usi/>*u'ii>*uiと変化したと考えられ、坂上に/usi/が例証される。中央方言の*uweに対応する語例は、先ずワ行のエがア行のエに合流して*uwe>*u'e/uje/>となり、'e/je/の狭母音化により*u'e/uje/>*u'ii>*uiとなると解釈される。共時的な原形の末尾音節が/Cu/でも/Ci/でも*eが付いて「イー格」になれば/CiR/で現れることから「イー格」に関する限り*ui>iR/, *ii>iR/と変化したと考えられるが、「イー格」と無関係の音連続では事情が異なることは脚注10, 11, 12の語例と金田の挙げた語例から分かり、/s, c, z/のあとの*uiは「イー格」でなければ/ei/に変化し(脚注10)、/s, c, z/のあとの*iiは「イー格」でなくとも/ei/に変化せず/iR/になり(脚注12)、/s, c, z/のあとでない*uiは「イー格」でなくとも/iR/になり、/s, c, z/のあとでない*iiは「イー格」でなければ/ei/に変化する(脚注11)²⁰。この辺りの複雑な対応関係については/ei/について説明したあとで再論する。

「長い母音のあとの単独のiが規則的に長母音化する傾向」については重音節直後という条件で**e>*i'ii>iR/*と変化したと解釈されるが、この長母音は祖体系の再構には使えない。

このような解釈に基づいて表3(β)(I)には*ii, *uiが、(II)には子音脱落により*uiとなる/usi/が分類されている。

三根の/ei/について金田(2001: 21-22, 26)より引用する。

ei 三根eiは中之郷e: ([r:]~[é:]), 末吉i:, 青ヶ島eiに対応する。末吉i:と中之郷e:についてはあとでまたふれるが、中之郷の狭い母音については、比較的新しい漢語においても[ki:satsu]警察などのように規則的にあらわれる。【「あとでまたふれる」とあるp.26の該当部分をここに引用する;中之郷の/e:/については、音声的にはほとんど中之郷/i:/と区別できないが、tやnなどの先立つ子音に口蓋化をおこさないばあいがある点で、/i:/と区別される。ほかの多くの子音では区別することが困難であるが、すこしあらたまつた発音で[e:]にちかく発音されることがあるのに対して、/i:/であらわされる具体的な音声は[e:]あるいはこれにちかい音

²⁰ なお、/s, c, z/のあとという条件は「ヨ格」にも及んでいる。三根では「mesjo 飯を」「hanasjo 話を」となるところを、平山(1958)によれば青ヶ島では/mesir/となり、金田(2001: 39)によれば末吉と青ヶ島では/hanasir/となるという。この特殊な音形は次のように通時的に解釈される：**si'o>*si'u>*siju>*si'i>*sii>siR/*。/s, c, z/のあとでない場合はこう変化したと解釈される：**Ci'o>*Cijo>Cjo/*。

声にはならないことから、中之郷ではまだ音韻として/e:/と/i:/を区別する根拠がある。しかし、これらの子音も、完全に口蓋化した両隣の櫛立、末吉と同様に口蓋化する傾向にあるので、/e:/もやがて/i:/に合流する可能性が高い。】

共通語（漢語など）の e: に対応する。また、eo, oi などからの変化である。【中略】また、三根 e: が ai などからの変化であって共通語 e: に対応しないことや、漢語の古い ei が保存されていることから類推が生じ、もともと e: だった「ねえさん」も ei に変化している。

- ・ ei teineidara ていねいだ seineNdaN 青年団
 - ・ ei<ei<eki deito:zja 来たよね。(dekurowa 来る。中之郷[di:toa3a])
 - ・ ei<ee kagei 陰へ（イー格） nei 寝へ（動詞目的形） neisaN ねえさん
 - ・ ei<eo<ewo tei 手を（ヨ格） anei ねえさん*(注 13) asej にいさん
 - ・ ei<eo<ewo<emo nomja:tei<*nomja:tewo<*nomiaritemo 飲んでも
 - ・ ei<oi horeinaga:<*horoingara ひろいながら tenegei<*tenogoi 手ぬぐい*(注 15)
 - ・ ei<oi<ohi tei<*tohi<*hitohi 1 日 ucutei おととい
 - ・ ei<oi<osi (坂下のみ) heiciga 干したっけなあ。 weite<wosite 脱穀(粃すり)して
 - ・ ei<oi<oe hotokorei ふところへ（イー格） kakegei かけ肥し meite 燃えて
- つぎの例も、ei のナワバリの広さから類推によって ie>ei のように逆転したものと推測される。

- ・ meirowa みえる。 oseite 教えて neicja 煮えては

先ずは金田が挙げた語例を検討する。「もともと e: だった「ねえさん」も ei に変化している」とあるが、金田 (2001: 376) 「三根. teiburiR テーブルへ」の類例と見なせる。また p.404 の (注 13) では /totou, kakoR, anei, asej/ を対比して /*toto'o, kaka'o, ane'o, ase'o/ を内的再構しているが「上代東国方言. serö (万葉集 3375, 4413 番の歌より ; /ö/ はオ列乙類)」と比較し r 脱落を想定しなければ /*'o/ は再構されない。「手ぬぐい」は既に (注 15) を引用した。「ie>ei のように逆転」という解釈に対しては既に述べたように /*i'e>*i'i>*ii>ei/ という別解釈を用いている。

同源同流解釈を述べる。ハ行転呼音やマ行子音における同様の現象は /uR, ou, oR, eR, iR/ の場合と同様である。サ行イ音便は /eR, iR/ の場合と同様で、/osi/>*o'i>*oi と変化したと考えられ、坂上に /osi/ が例証される。/ei/ の元になる音連続は *ei, *oi が基本であると解釈され、/s, c, z/ のあとの *ui は「イー格」でなければ /ei/ に変化し (脚注 10)、/s, c, z/ のあとでない *ii は「イー格」でなければ /ei/ に変化する (脚注 11)。中央方言の *ewe, *owe, *o'e/oje/ に対応する語例は、先ずワ行のエがア行のエに合流して *Vwe>*V'e/Vje/ となり、'e/je/ の狭母音化により *V'e/Vje/ >*V'i>*Vi となると解釈される (V=e, o)。中央方言の *ewo に対応する語例は、'o/wo/ の狭母音化により *ewo>*e'o/ewo/>*e'u と変化し、口蓋化と ju/i の合流により *e'u>*eju>*e'i>*ei と変化したと解釈される。

/s, c, z/ の条件に関わる三根方言と標準語との対応について表 4 にまとめる。表 4 で「由来」とあるのは同源同流解釈に従った場合の架空の古い音形だが、標準語や上代語の個々の語形とのあいだの「対応」関係が分かりやすいよう便宜的に解釈した「由来」に過ぎない。

表 4. 三根方言の/iR/, /ei/にまたがる標準語・上代語との複雑な対応関係

由来	結果	頭子音の条件	形態論の条件	語例の参照先
*oi	>ei	無条件	無条件	金田 (2001: 21-22)
*ui	>ei	/s, c, z/	非イ一格	脚注 10
*ui	>ui	/s, c, z/	イ一格	中之郷(2009). /'izui/[izüi] ²¹
*ui	>iR	/s, c, z/ 以外	イ一格	金田 (2001: 17-19)
		/s, c, z/ 以外	非イ一格	金田 (2001: 17-19)
*ii	>iR	/s, c, z/	非イ一格	脚注 12, 脚注 20
		/s, c, z/	イ一格	金田 (2001: 17-19)
*ii	>iR	/s, c, z/ 以外	イ一格	金田 (2001: 17-19)
*ii	>ei	/s, c, z/ 以外	非イ一格	脚注 11
*ei	>ei	無条件	無条件	金田 (2001: 21-22)

三根の/ei/が例外的な対応を示している例はまだある(大島編(1987: 13)参照)。「kei 今日」「kinei 昨日」がそれである。標準語では/kjoR, kinoR/だが北部伊豆諸島方言では/kjoR, kinjoR/となり八丈島・青ヶ島でも/kinjoR/は頻繁に聞かれる。上代中央方言では「ケフ, キノフ」だが院政後期(1125-1150頃)の資料以降は「キネフ」という表記も現れる。資料解釈に問題のある「昨日」は置いておいて、「今日」のほうで通時的変化を解釈すると「北部伊豆諸島, *kepu>*ke'u>*keju>*kjou/kjoR/」に対して「三根, *kepu>*ke'u>*keju>*ke'i>/kei/」となる。これらは表4とも違った独自の対応グループを形成していると考えられる。

このような解釈に基づいて表3の(I)には*ei, *oi, *ii, *uiが、(II)には子音脱落により*ei, *oiとなる*eki, /osi/が分類されている。以上のように、「一次的」な長母音・二重母音は八丈方言の内部で規則的な対応を示すだけでなく、標準語・上代語など外部の方言とも規則的な対応を示し、その対応を生じる原因となった通時的な音変化についても辻褃の合うように解釈できる。解釈である以上、中央方言とは異なる音形から中央方言とは異なる音変化が起こった可能性は否定できないが、個々の語例が属するグループと対応規則について整理する為の道具として、「同源同流解釈」を利用した。八丈祖語における非短母音の祖体系を再構する上で「二次的」なものが役に立たないことは既に述べたが、「一次的」なものでも借用語に由来する可能性のあるものは利用できず、子音脱落以前の形が坂上に例証されるものも利用できず、新しい長母音であり嘗ては短母音であったと推測されるものも長母音化の時期が判然としなため利用できない。前節と本節によって、次節で取り扱う対象を限定した。

6. 各地区方言間の比較(長母音・二重母音)

前節および前々節では金田(2001: 15-28)の議論を引用・発展させて、現代の三根方言の共時態に存在する非短母音を擁する語彙の中から、各地区方言間ばかりでなく標準語・上代語とも規則的な対応を示すような語例を選び出すと同時に、通時的な音変化に関して辻褃の合う解釈を述べた。ここではそれらの語例に的を絞った上で各地区方言の非短母音の体系どうしを比較して祖体系を再構する。三根以外の地区の具体的な語形については後述する。

²¹ 「地区名(2008 or 2009 or 2010)」とあるのは、筆者自身の調査によるデータであることを表す。

祖体系を再構する上で決め手となるのは現存する最古の共時態を表すデータだけであり、それ以降の新しい状態を表すデータはあまり役に立たない。しかし新しい状態を表すデータが持つ価値を正しく判断する上では、最古の状態と共にそれらを併記することには意味があり、また最古のデータに不足点があれば補うことができる。ここで最古の状態とは国語研（1950）に記載される全8地区のデータ（1949年調査）である²²。それ以前の状態については後述する。次の網羅的な調査は1958年に行われ、平山（1958）、馬瀬（1961）、平山編（1965:169-209）に反映しているが、鳥打・大賀郷・末吉の状態は不明である²³。不足を補うべく、八丈小島の状態については大島（1986）のデータ（1985年調査）で補足し、八丈島・青ヶ島の状態については金田（2001）のデータ（1989年調査開始）で補足する。以上について、本稿における音素表記に改めつつ具体的音声に言及のあるものはそれを併記して以下の表に示す。

表 5. 青ヶ島の長母音・二重母音の体系と対応²⁴

青ヶ島(1949)		au[ou]	oR[o:]	[e:]		eR[e:]	国語研（1950:198-201）
青ヶ島(1958)	uR[u:]	au[ou]	oR[o:]	ei[ei]	iR[i:]	eR[e:]	平山編（1965:185-189）
青ヶ島(1989-)	uR	au	oR	ei	iR	eR	金田（2001:15-28）

表 6. 八丈小島の鳥打の長母音・二重母音の体系と対応²⁵

鳥打(1949)		oR[o:]	oR[o:]	eR[e:]		eR[e:]	国語研（1950:196-198）
鳥打(1985)	uR	oR[o:]	oR[o:]	eR[e:]	iR	eR[e:]	大島（1986）

表 7. 八丈小島の宇津木の長母音・二重母音の体系と対応²⁶

宇津木(1949)	uR[u:]	au[ɤu]	oR[o:]	ai[ei]		eR[e:]	国語研（1950:191-196）
宇津木(1958)		au[ɔ̄ō] >ou[ɔ̄ō]	oR[ɔ̄:]	ai[aī] >ei[eī]		eR[ɛ:]	馬瀬（1961）
宇津木(1985)	uR	ou[ɔ̄:]	oR[o:]	ei[ɛ:]	iR	eR[e:]	大島（1986）

²² 国立国語研究所（国語研）（1950）は pp.218-413 が辞典として有用であり、pp.129-201 では全8地区の音韻対応や音声を網羅的に調査するが、三根等における対立 ou/oR, ei/eR に関して対立の存在および由来の違いを把握しきれず、そのため事実の記載までが混乱しており注意を要する。平山編（1965）に示された音韻の対立・対応に関する調査事実とその後の研究による調査事実とはほぼ矛盾しない。

²³ 1958年夏の調査では平山・大島が大賀郷・末吉・青ヶ島を、加藤・馬瀬が三根・榎立・中之郷・宇津木を担当したということが馬瀬（1961）の冒頭に述べられている。しかしながら平山編（1965:169-209）では大賀郷・末吉に関する言及が無い。鳥打に関しては調査自体が存在しなかったように見受けられる。

²⁴ 青ヶ島は3段階のデータが得られる。データが無い場合は空欄になっている（以下同様）。/ei/に対応する青ヶ島(1949)の記述はただの長母音[e:]であるが、誤りと見なして取り消し線を引いた。

²⁵ 鳥打は2段階のデータが得られる。対立の無い母音グループについても他の方言との比較の為に全て記した。鳥打(1985)のデータに与えた解釈については宇津木(1985)のデータに関する脚注を参照。

²⁶ 宇津木は3段階のデータが得られる。宇津木(1958)で「>」を挟んで併記された音韻・音声は、変化前が老年層であり変化後が中年層以下である。祖体系の再構には老年層だけでよい。宇津木(1985)では/ou/と/ei/を認めた。その根拠は大島（1986:3）の次の記述である：「(2) 長母音[e:] [o:] の[e] [o] はそれぞれ基本母音、あるいはそれより狭く実現する。【改行】 [e~ɛ] [o~ɔ̄] 【改行】 [koko:]（ここへ） [hɛ:rume]（蛾） [jɔ̄:i]（用意）」。狭く実現する母音の例として挙げられたものは三根/ei, ou/に対応するものになっている。この記述は p.3 「2. 音韻上の特色」の(2)として記されているが、特に鳥打と宇津木を区別して記述してはいない。そのため鳥打の特徴を指している可能性もあるが、国語研（1950）の段階で鳥打における問題の母音の対立は存在しないはずであり、国語研（1950）や馬瀬（1961）では宇津木に問題の母音の対立を認めている。従って大島（1986）におけるこの記述は宇津木の特徴を捉えたものと推測される。

表 8. 八丈島の坂下の大賀郷の長母音・二重母音の体系と対応²⁷

大賀郷(1949)	uR[u:]	au[əu] >oR[o:]	oR[o:]	ai[ɛi] >eR[e:]	iR[i:]	eR[e:]	国語研 (1950: 195), 国語研 (1950: 129-134)
-----------	--------	-------------------	--------	-------------------	--------	--------	---

表 9. 八丈島の坂下の三根の長母音・二重母音の体系と対応²⁸

三根(1949)	uR[u:]	ou[ou] >ou[ɔ:]	ou[ɔ:] >eR[e:]	ei[ɛi] >ei[ɛ:]	iR[i:]	ei[ɛi] >eR[e:]	国語研 (1950: 129-134)
三根(1958)		ou[ɔ:] >ou[ɔ:]	oR[ɔ:]	ei[ɛi] >ei[ɛ:]		eR[ɛ:]	馬瀬 (1961)
三根(1989-)	uR	ou	oR	ei	iR	eR	金田 (2001: 15-28)

以上が青ヶ島・八丈小島・八丈島坂下の体系である。これらは互いによく似ており、以下で示す八丈島坂上の体系とは相違が大きい。

表 10. 八丈島の坂上の檜立の長母音・二重母音の体系と対応²⁹

檜立(1949)	uR[u:]	oR[o:]	oa[ɔɐ]	eR[ɛ:]	iR[i:]	jaR[ja:]	国語研 (1950: 129-134)
檜立(1958)		oR[o:]	oa[ɔɐ]	ie[ie] >eR[e:]		jaR[ja:]	馬瀬 (1961)
檜立(1989-)	uR	oR	oa	iR	iR	ia	金田 (2001: 15-28)

表 11. 八丈島の坂上の中之郷の長母音・二重母音の体系と対応³⁰

中之郷(1949)		oR[o:]	oa[ɔɐ]	eR[ɛ:]	iR[i:]	jaR[ja:]	国語研 (1950: 129-134)
中之郷(1958)	uR[u:]	oR[o:]	oa[ɔɐ]	eR[e:] >iR[i:]	iR[i:]	ea[ea]	馬瀬 (1961)
中之郷(1989-)	uR	oR	oa	eR[i:~ɛ:]	iR	ia[ia~ja:]	金田 (2001: 15-28)

²⁷ 大賀郷は1段階のデータが得られる。「>」を挟んで併記された音韻・音声は、変化前が1個人であり変化後がその他である。国語研 (1950: 195) 「なお、O の金土川【注：大賀郷のかなどがわ】という部落には [tʃu:gakusei, tʃu:ga'keu] とする老婆がいた」という記述が/au, ai/の根拠である。金田 (2001: 28) 「現在の大賀郷地区が三根の/ei/と/e:/, /ou/と/o:/の区別をうしなおうとする過程にあるとみられること」という記述からは、国語研 (1950) で既に一般にはその対立が失われたように書かれているのは誤りで、実は/ou[ɔ:]、ei[ɛ:]のようにやや広めの母音が、或いは逆にやや狭めの母音が、聞かれるのかもしれない。但し国語研 (1950: 195) によれば老年層に/au, ai/が観察されているので祖体系の再構に問題はない。

²⁸ 三根は3段階のデータが得られる。三根(1949)のuRは国語研 (1950: 129-134) からは見つからなかったので p.145 「ju:taɕi」を根拠とした。国語研 (1950: 129-134) では/oR, eR/が現れるべき語例のうちの幾つかについて/ou, ei/が記されているが誤りと思われ、馬瀬 (1961) が既に指摘している。そこで取り消し線を引いた。三根(1958)で「>」を挟んで併記された音韻・音声は、変化前が中年層以上であり変化後が青年層である。三根(1989-)の/ou, ei/は音声の明記こそ無いが金田 (2001: 15-28) は音声が音素表記から著しく異なる場合には音声を併記しているため意図としては/ou, ei/であると思われる。一方で三根(1958)の青年層では問題の母音の対立は既に失われている。しかし三根(1989-)の被調査者は主として1916年生れの男性であり、1958年当時で既に中年層である。

²⁹ 檜立は3段階のデータが得られる。檜立(1949)のuRは国語研 (1950: 129-134) からは見つからなかったので p.146 「ju:gata」を根拠とした。檜立(1949)の[ɛ:]は当時の老年層の発音を捉えていない可能性がある。檜立(1958)の/ie[ie]について馬瀬 (1961) は「人により[e:]が聞かれる。しかし中之郷方言のような[e:]>[i:]の傾向は青年層にも見られない」と記す。檜立(1949)の[ɛ:]はこの「人により」聞かれる発音かもしれない、檜立(1958)では「>」を挟んで/ie, eR/を併記した。檜立(1989)の/ia/の音声について金田 (2001) に言及は無いが p.19 「中之郷 ia [ia] ~[ja:]」という記述から同様の音声を意図していると推測される。/ia/と/jaR/の2つの音韻解釈に決定的な優劣は無くどちらを用いてもよい。本稿では/jaR/と解釈しておく。

³⁰ 中之郷は3段階のデータが得られる。中之郷(1949)のuRは国語研 (1950) から探し出せなかった。中之郷(1958)の/eR/について馬瀬 (1961) には「中之郷方言のような[e:]>[i:]の傾向」とあるので「>」を挟んで/eR, iR/を併記したが、文脈から/iR/は青年層のものと推測される。中之郷(1958)の/ea/と中之郷(1949)の/jaR/を比べると、[ca]>[ja:]という変化は容易だが逆は困難であり、/ea/のほうが古いと考えられる。中之郷(1989-)の/eR/の音声については前節で金田 (2001: 26) より詳しい説明を既に引用している。

表 12. 八丈島の坂上の末吉の長母音・二重母音の体系と対応³¹

末吉(1949)	uR[u:]	oR[o:]	aR[a:]	iR[i:]	iR[i:]	eR[e:]	国語研 (1950: 129-134)
末吉(1989-)	uR	oR	aR	iR	iR	eR	金田 (2001: 15-28)

以上から 1949 年の各地区方言における（可能なら老年層の）体系の「あるべき姿」を表 13 に示す (pHJ, pSK, pSU 等は後述)。「あるべき姿」とは、1958, 1985, 1989 年のデータにより国語研 (1950) のデータの不充分な点は補い、誤りは正した上で示される 1949 年の体系である。事実のみに基づくデータと区別する為に西暦に「*」を付して「青ヶ島(1949*)」などと記す。

表 13. 八丈方言の長母音・二重母音の体系と対応 (1)

	uu 群	au 群	oa 群	ei 群	ii 群	ai 群	V ₁	V ₂
pHJ	*uu	*au	*oa	*ei	*ii	*ai	*/a, i, u, e, o/	*/a, i, u/
青ヶ島(1949*)	uR[u:]	au[ɔu]	oR[o:]	ei[ɛi]	iR[i:]	eR[e:]	/a, i, u, e, o/	/i, u, R/
pSK	*uR	*au	*oR	*ai	*iR	*eR	*/a, i, u, e, o/	*/i, u, R/
鳥打(1949*)	uR	oR[o:]	oR[o:]	eR[e:]	iR	eR[e:]	/i, u, e, o/	/R/
宇津木(1949*)	uR[u:]	au[ɔɔ]	oR[ɔ:]	ai[ai]	iR	eR[ɛ:]	/a, i, u, e, o/	/i, u, R/
大賀郷(1949)	uR[u:]	au[ɛu]	oR[o:]	ai[ɛi]	iR[i:]	eR[e:]	/a, i, u, e, o/	/i, u, R/
三根(1949*)	uR[u:]	ou[ɔɔ]	oR[ɔ:]	ei[ɛi]	iR[i:]	eR[ɛ:]	/i, u, e, o/	/i, u, R/
pSU	*uR	*oR	*oa	*ie or *ei	*iR	*ea or *ai	*/i, u, o/+α	*/a, R/+β
檜立(1949*)	uR[u:]	oR[o:]	oa[œ]	ie[ie]	iR[i:]	jaR[ja:]	/a, i, u, o/	/a, e, R/
中之郷(1949*)	uR[u:]	oR[o:]	oa[œ]	eR[e:]	iR[i:]	ea[ea]	/i, u, e, o/	/a, R/
末吉(1949)	uR[u:]	oR[o:]	aR[a:]	iR[i:]	iR[i:]	eR[e:]	/a, i, u, e, o/	/R/

まずは八丈小島の鳥打と宇津木の体系を比較する。[ɔɔ]>[o:], [ai]>[e:]という変化は容易だが逆は困難であり両者のあいだで*/au, ai/が再構される。

次に坂下の大賀郷と三根の体系を比較する。国語研 (1950: 195) によれば大賀郷で[ɛu, ɛi]と発音する話者は金土川在住の老婆 1 名しか確認されず、他は[o:, e:]であったという。八丈小島の場合と同じ理屈によって大賀郷の中で古いのは[ɛu, ɛi]であると考えられる。大賀郷の[ɛu, ɛi]と三根の[ɔɔ, ɛi]とどちらが古いだろうか。二重母音を構成する 2 つの母音のあいだで同化が起こったと考えれば[ɛu, ɛi]のほうが古い、異化が起こったと考えれば[ɔɔ, ɛi]のほうが古い。どちらが起こったか分からないので坂下の体系だけを見ても決められない。八丈小島に*/au, ai/が再構されることと考え合わせれば坂下と八丈小島に共通の祖体系に*/au, ai/を再構するべきではないかと判断することになる。この祖体系のことを「坂下・小島祖語」(i.e. proto-Sakashita-Kojima, pSK と略す) の祖体系と呼ぶことにする。

次に pSK の祖体系と青ヶ島の体系を比較する。青ヶ島の[ɛi]と pSK の*/ai/とどちらが古いかは、三根と大賀郷で比較した時と同じ理屈によって決定できない。従ってこれらのあいだの類似性は認めつつも、とりあえず共通の祖体系を再構することはしないでおく。

次に坂上の檜立・中之郷・末吉の体系を比較する。檜立・中之郷の[œ]と末吉の[a:]を比べると、[œ]>[a:]という変化は容易だが逆は困難であり両者のあいだで*/oa/が再構される。檜立

³¹ 末吉は 2 段階のデータが得られる。末吉(1949)のuRは国語研 (1950: 129-134) からは見つからなかったのが p.195 「tʃu:gakuse:」を根拠とした。

の[ie]と中之郷の[e:]と末吉の[i:]を比べる。末吉では三根における ei/iR の対立を失って/iR/に合流しているが、檜立と中之郷ではその対立は保たれており、末吉の[i:]は最も新しい音声であると考えられる。[ie]>[e:]という変化は容易だが逆は困難だから少なくとも[e:]が最も古いということは考えられない。しかし*[ei]>[ie], *[ei]>[e:]という可能性もあり、中之郷が*[ie]という音声を經由したかどうか分からない。そこで*/ie/ or */ei/が再構されることになる。檜立の[ja:]と中之郷の[ea]と末吉の[e:]を比べる。[e:]から[ja:]に変化したり[ea]に変化したりすることは困難なので、末吉の[e:]が最も古い音声とは考えられない。[ea]>[ja:]という変化は容易だが逆は困難であり、[e:]と[ja:]のあいだでは互いに直ちには変化できないと考えられるので、少なくとも檜立の[ja:]が最も古い音声とは考えられない。しかし*[ai]>[ja:], *[ai]>[ea], *[ai]>[e:]という可能性もあり、檜立が*[ea]という音声を經由したかどうか分からず、一足飛びで*[ai]>[ja:]と変化したかもしれない。そこで*/ea/ or */ai/が再構されることになる。坂上に共通の祖体系のことを「坂上祖語」(i.e. proto-Sakaue, pSU と略す)の祖体系と呼ぶことにする。

次に pSK と pSU を再構することの妥当性を検討する。坂上において/oa/または/aR/は一定の語例に出現するが、同じ語例に対して坂下・八丈小島・青ヶ島では一斉に/oR/が出現する。また、坂上において/oR/は一定の語例に出現するが、同じ語例に対して坂下・八丈小島・青ヶ島では5分の4の割合で/au, ou/が出現する。坂上と坂下・八丈小島・青ヶ島とでは/oR/が出現する語例が食い違っており、そのことが坂上内部の類似性、坂下・八丈小島・青ヶ島内部の類似性を高めている。このような体系の類似性によって坂上の体系と坂下・八丈小島・青ヶ島の体系とは区別され、pSK と pSU が別々に再構されることになる(表 13)³²。

最後に「八丈祖語」(i.e. proto-Hachijo, pHJ と略す)の非短母音の祖体系を再構する(表 13)。
*au>*oR という変化は容易だが逆は困難であり pHJ に*au が再構される。*oa>*oR という変化は容易だが逆は困難なので pHJ に*oa が再構される。*ie>ei や*ie>*ai という変化は困難であり pHJ に*ie は再構されない。同化が起こっていれば*ai が、異化ならば*ei が再構されるがどちらか分からないので pHJ には*ei or *ai が再構される。*eR>*ea や*eR>*ai という変化は困難であり pHJ に*eR は再構されない。*ai>*eR という変化は容易だが八丈方言の内部では*ea>*eR という変化は困難であり³³、pHJ には*ai が再構される。すると*ei or *ai のうち*ai は対立が維

³² このような区別の原因を地理的要因に求めることが可能であり、説明を試みたい。八丈祖語の話者の集団が最初に住み着いたのは3つの島のうちでも最大である八丈島ではないかと想像される。八丈島の中でも最初に居住されたのは海へのアクセスが容易であり広くて低い平野のある坂下ではないかと想像される。やがて坂下から一部の集団が八丈小島・青ヶ島・坂上へと移住したと想像される。八丈小島は八丈島に近いので交流が比較的多かったと想像されるが、青ヶ島は遠いため直ちに坂下・八丈小島と共通の祖語を再構するのは躊躇われる。坂下から坂上に向かうには三根・末吉間の「登龍(のぼりよう・のぼりゅう)」という急な峠を越える必要があり、大変な苦勞を伴ったと考えられる。更に末吉から中之郷に進むには険路に行く必要があった。中之郷から檜立に進むのは比較的容易であった。大賀郷・檜立間の「大坂(おおさか)」は非常に険しく、「登龍」のほうが越えやすかったため「大坂トンネル」が出来るまで物資の流れは「大賀郷八重根港→三根→末吉→中之郷→檜立」ようになっていたという。このように陸続きとはいえ坂上は坂下に対して隔絶しており、徒歩による登り降りの苦勞を考えると船で行く八丈小島とどちらが往復しやすかったか一概には言えない。この往來の困難さが坂上において独自の音変化が起こる基盤となっていたと考えられる。

³³ 何故*ea という二重母音を pHJ に再構することが出来ないのかについて説明する。*ea という二重母音の再構には通時的な音変化を解釈する上で大きな問題がある。例えば「三根. 'awokja “青いよ”; 'awoke 'umi “青い海”; 'ikowa “行くよ”; 'iko toki “行く時”」(※作例)のような語例を対比することによって「三根. *'awokewa

持できないため可能性が否定される。従って表 13 のようになる³⁴。

ところで、そもそも非短母音というものは短母音の存在を前提としており、短母音の祖体系を再構した上で初めて非短母音の祖体系が意味を持つことになる。表 13 の pHJ の長母音・二重母音を構成する母音音素は $*V_1=*/a, i, u, e, o/$ 、 $*V_2=*/a, i, u/$ となっている。従って $*V_1=*/a, i, u, e, o/$ の 5 つの短母音を再構する必要がある。表 1 で示される三根と中之郷の体系でも同じ 5 母音だが、体系でなく語例に基づいて比較する必要がある。それを次節で行う。

7. 各地区方言間の比較（短母音）

本節では八丈方言の全 8 地区の方言のあいだで短母音の比較を行う。そのことが可能となるデータは恐らく唯一、国語研（1950: 191-196）「Ⅱ. 属島の言語の二三の音韻的特徴について（1）宇津木の言語」だけであり、その要所を以下に引用する。引用部分の中に頻繁に見られた明らかな誤植（引用元参照）は引用者が訂正したが多いので明記しない。

§ 5. 音韻的特徴 宇津木語の音韻的特徴として特に注目されるのは、次のようなものである。比較のため各村における代表的な対応形をあげることにする。大賀郷、三根、樫立、中之郷、末吉、鳥打、宇津木、青ヶ島をそれぞれ、O, M, K, N, S, T, U, A で示す。【中略】

§ 6. OMKNSTA [-r-]/U [-j-], [-0-] 宇津木の[-j-]は強い摩擦音である。以下、比較のために、大賀郷の形だけを[]のなかに示した。

- 1) OMKNSTA [-ara]/U [-aja], [-a:] 例。sa: (さら[器])、ha:~haja (腹)、kaika: (きょうから)、ika: (行った) [O. ikara], a:a: (いたことがある) [O. ararara]
- 2) OMKNSTA [-ora]/U [-oja] 例。to:ja (俵)
- 3) OMKNSTA [-ura]/U [-uja] 例。tsuja (面)
- 4) OMKNSTA [-era]/U [-eja] 例。heja (しゃもじ) [hera]
- 5) OMKNSTA [-ori-]/U [-öi-] 例。nja'töime (鶏)
- 6) OMKNSTA [-eri-]/U [-zi-] 例。h3:i:je (入りなさい) [O. he:rijare]
- 7) OMKNSTA [-ari-]/U [-vi-] 例。sa'pei (さっぱり)、od3vi:je (いらっしやい) [O. od3arijare], hai (針)、wakeinnaka (分かりません) [wakarinnaka], ageijae (あがりなさい)

青けわ“青いよ”という音形が内的再構され、「三根. 'urja “あれは”; 'ure “あれ”; keiwa “今日は”; kei “今日”」（金田 2001: 91, 440-441, 444）のような語例を対比することによって「三根. *'urewa “あれは”」という音形が内的再構される。つまり*Cewa>/Cja/という音変化の存在が内的再構によって示される。同様に「三根. *'omiwa “あなたは”」（金田 2001: 70, 441）などが内的再構され*Ciwa>/Cja/という音変化の存在が示される。これらの語例における拗音化は全ての八丈方言に共通している。また現に中之郷(1989-)の体系では中之郷(1958)の体系から/ea>/jaR/と変化しており、現代でも有効な音変化の傾向である。筆者の調査(2008)では「中之郷. kihacizjoR ~ kjaRcizjoR 黄八丈（絹織物の名称）」という 2 種類の音形とそのあいだの音声とがほぼ同時に同一人物から観察された。従ってもし*ea が pHJ に再構されるならば坂下だけでなく青ヶ島・八丈小島・坂下の中でも/jaR/またはこれに類する音形で現れる地区方言が多数派であって然るべきなのに、実際には/eR/しか現れない。これは何故ならば*ea という音形が再構されないからである、と考えられる。

³⁴ 表 13 を見ると pHJ において*/R/は*/uR, iR/にしか現れない。つまり*/uR, iR/と書かずに*/uu, ii/と書けば $*V_2=*/a, i, u/$ の 3 つだけを $*V_2$ に認めれば済むが、もし*/R/を認めれば $*V_2=*/a, i, u, R/$ の 4 つを $*V_2$ に認めることになる。経済性の観点から表 13 では $*V_2$ の祖体系の解釈に*/R/を認めなかった。また、表 13 で「uu 群」などとあるのは長母音・二重母音の対応グループであり、語例を所属させるグループでもある。

[O. agarijare], na'tei wa'tei (泣いたり笑ったり), anmæi (あんまり)

- 8) OMKNSTA [-aru-]/U [-eu-] 例. teu (たる[みそなどを入れる]), mæuba: (死んだ。) [O. marubara], weukja (悪い) [O. warukja]
- 9) OMKNSTA [-are-]/U [-æe-], [-aje-] 例. daje (だれ), odzæe (いらっしやい), ajeto (わたくしと) [O. areto, aito], he:ijæe (入りなさい), odzæijæe (いらっしやい)
- 1 0) OMKNSTA [-ire-]/U [-ie-] 例. okieba (起きれば)
- 1 1) OMKNSTA [-ure-]/U [-ue-] 例. kabue ([かさを]させ)
- 1 2) OMKNSTA [-iro-]/U [-ijo-] 例. ijo (色), hijo'teu (拾ってくれ), okijo toki (起きるとき) [O. okiro toki], okijogon (起きよう) [O. okirogon], mijo (見ろ) [O. miro], omoſjokja (おもしろい) [O. omoſirokja]
- 1 3) OMKNSTA [-ero-]/U [-ejo] 例. agejo (あげろ) [O. agero]
- 1 4) OMKNSTA [-oro-]/U [-ojo], [-o:] 例. to:wa (取ります) [O. torowa], bo: (ぼろ), mujo:jo mono (もらった物) [O. *muro:ro mono]
- 1 5) OMKNSTA [-uro-]/U [-ujo] 例. mujo:jo mono (もらった物), kujoka (来るか)

【中略】

§ 1 0. OSTA [e:]/KN [ê:]/M [ei]/[vi] 【注；この対応規則の誤りは前節で正した。】

例. keiwa (今日は) [O. ke:wa], teinæi (ていねい) [O. te:ne:], kanteidekake (勘で書け) [O. kante:], tfu:gakusei (中学生) [S. tfu:gakuse:], sensei (先生) [O. sense:], jei (家へ) [O. je:], kinæi (きのう) [O. kine:], kagei (影を) [O. kage:], me: (目を) [O. me:], tei (手を) [O. te:], dakinna'æija (できなかったということだ) [O. -æ:ja], kogæirowa (寒いよ) [O. koge:rowa], kogæite (寒くて) [O. koge:te]

【中略】

§ 1 1. OST [o:]/M [ou]/KN [oæ]/U [æu]/A [ou] 【注；この対応規則の誤りは前節で正した。】

例. ga'keu (学校), d3idzeusama~d3idzæufama (地藏さま), d3æubu (丈夫), benkæju (勉強), ææusoku~ææufoku (ろうそく), teukæju (東京), honææuni (本当に), ææusama (おじいさん、王様), bæu (棒), sæufju: (しょうちゅう), ikunææuwæju (たぶん行くだらう) [O. ikuno:wæjo:], akakææu (赤いけれども) [O. akakææo:], tsu'te i'tæu (つれていってくれ) [O. i'to:], kææte jowa (来いというじゃないか) [O. ko:te jowa]

以上の箇所では子音の脱落前後の対応や長母音・二重母音の対応を全8地区の対応関係に基づいて例示している。具体的な表記としては「O, M, K, N, S, T, U, A」の全てのアルファベットが並んでおり、他の箇所の例示で一部のアルファベットしか並んでいないのとは対照的である。上記の語彙を「国語研(1950)全地区対応語彙」と呼ぶことにする。これによって例証される母音を数えて下表に整理する。何らかの理由、例えば語例の重複などで数えることが適当でないと判断した母音については数に入れなかった。

表 14. 「国語研（1950）全地区対応語彙」の母音の数（1）³⁵

	a	i	u	e	o	uu 群	au 群	oa 群	ei 群	ii 群	ai 群
§ 6	49	17	7	10	22		1	2	1		1
§ 10	9	2	1	4	3	1			13		
§ 11	9	2	4	4	3	1	16				
計	67	21	12	18	28	2	17	2	14	0	1

また、表 14 のように全母音に注目しなくても、「§ 6」の複数の/V₁C₁V₁/、即ち/ara, ura, era, ori, ari, aru, are, ire, ure, iro, ero, oro, uro/を持つ語例、例えば 1 個ずつ「皿、面、籠、鳥、針、樽、吾、起きれば、被れ、色、上げろ、ぼろ、来ろか」の 14 項目に限っても短母音を比較して対応が確められる。/V₁C₁V₁/の最初の/V₁/に/a, i, u, e, o/が来る数は順に 4, 2, 3, 2, 2 回であり、次の/V₁/に来る数は順に 3, 2, 1, 3, 4 回であって、計 7, 4, 4, 5, 6 回出現している。

実際の調査では、宇津木・鳥打・青ヶ島出身者については、大賀郷在住者は大間知らが、中之郷在住者は柴田らが、末吉在住者は島崎らが、八丈島の 5 か村について実施した調査方法と同じものを用いて調査したのではないかと推測される³⁶。「国語研（1950）全地区対応語彙」の中でも、戸別調査の 32 項目（国語研 1950: 17-18）に含まれるものが「俵、先生、蠟燭、丁寧、寒いよ、死んだ、赤いけれど」であり、方言調査（語いについて）の 50 語（国語研 1950: 28）に含まれるものが「ぼろ、起きる」であり、残りは方言調査（音韻・文法について）によって得られたものであろうが、実際に全 8 地区について対応語例を調査したはずである。仮に確実に調査したことが分かる「俵、先生、蠟燭、丁寧、寒いよ、死んだ、赤いけれど、ぼろ、起きる」の 9 語に限定しても表 15 のようになる。例によって数えることが適当でないとして判断した母音については数に入れなかった。

³⁵ 表 14 の中では ii 群に語例が 1 つも無いので補足する。大島（1986）を見ると「鳥打. ciRto ちいと, 'uciR 家へ, 'aQciR あっちへ, 'koQciR こっちへ, mociR 餅, 'ucukiR 宇津木へ, 「宇津木. ciRto ちいと, 'umiR 海へ, toriR 取りへ, kiR 木へ, curiR 釣りへ, ciRejake 小ちゃけ」などがカタカナによる音韻表記で確認される。

³⁶ 国語研（1950）p.iii 「この報告書にまとめたもののほかにもいくつかの副次的な成果があり、特に、わたしたちが現地において集めた語いが辞引の形になってまとまっているのであるが、いろいろな事情のために今回は発表をさしひかえることになった」とあり、p.10 「おもに 5 か村の言語の違いを調べるための、少数の特定個人について行った「方言調査」【中略】の際には、特に次のような調査グループを作り、各村へ分散した。【改行】大賀郷・三根グループ 大間知、飯豊、北村【改行】榎立・中之郷グループ 柴田、山之内【改行】末吉グループ 島崎、青木」とあり、pp.27-29 「この調査の後半において、調査者は調査グループをつくって各村に分散し、特定の個人について、それぞれの村固有の言語をやや詳しく調べた。これを、「方言調査」とよぶことにする。【改行】方言調査のおもな目的は、5 か村の言語の違いを調べることであったので、各村の調査項目をあらかじめ一定にした。【改行】ただし、音韻については、戸別調査においてかなり明らかになっていたので、個別的な事実の確認と、ひとつひとつの音声に関する観察以外には特に調査事項の打合せをしなかった。【改行】文法については、特に曲用（名詞、代名詞の語尾変化）と活用とについて調査すべきことを打合せた。【改行】曲用については、11 の 2 音節名詞と約 35 の代名詞とについて、活用は、東條操氏報告【中略】の動詞をふくむ用言【中略】37 種類および九つの助動詞について調べた。【中略】語いについては、おもに戸別調査の際に得られた資料にもとづいて、あらかじめ次の 50 語を選んだ。【中略】文法の、特に活用については、ひとつの活用語について約 20 種類の変化をひとつひとつ質問していったので、約 20 の動詞を全部聞き終るの内には 6 時間以上を要し、調査者にも被調査者にもかなりの忍耐仕事となった」とあり、「(1) 宇津木の言語」内 p.192 「被調査者は、現在八丈島に在住のつぎのふたりである。【改行】菊池正文氏：35～40 才。現在、中之郷の小学校長。【中略】菊池エキ氏：68 才。20 年ほど前に大賀郷に移住、現在に至る。【改行】調査の結果、両氏の言語はまず同一の言語（langue）と認めてさしつかえないようである」とあり、p.196 によれば鳥打出身被調査者は中之郷在住者 2 名・大賀郷在住者 1 名であり、p.199 によれば青ヶ島出身被調査者は末吉在住者 4 名・大賀郷在住者 1 名である。以上のことから推測される。

表 15. 「国語研（1950）全地区対応語彙」の母音の数（2）

	a	i	u	e	o	uu 群	au 群	oa 群	ei 群	ii 群	ai 群
計	7	1	2	2	6	0	2	1	4	0	0

このように、辛うじて $V=/a, i, u, e, o/$ の 5 つの短母音について対応語例を 1 つ以上確保することが出来る。少なくとも 9 項目、可能なら 14 項目、最大で「国語研（1950）全地区対応語彙」について語例を比較して八丈祖語の短母音の祖体系に $*V_1=*/a, i, u, e, o/$ の 5 つの短母音を再構する。以上で前節の補足とする。

8. 『八丈実記』の母音体系

前節までは現代の各地区方言の比較によって八丈祖語の非短母音の祖体系を再構した。国語研（1950）以降の言語学的な調査に基づくデータは豊富であり、8 つの地区方言のあいだで質や量に偏りは見られるものの「体系」を明らかにしうるだけの量があると考えられた。これに対して、八丈島関連の古文獻に見られる八丈方言のデータは必ずしも豊富とは言えず、方言の記録者が必ずしも体系を正しく反映させて記述したとは限らず、記述に用いられる中央方言の正書法が八丈方言の体系を表すのに万全であるとは限らない。それにもかかわらず過去の状態を知る上では非常に貴重なデータとなる。本節では『八丈実記』に記録された「方言」の母音の数を集計し、母音体系を抽象し、後代の体系と比較する。

国語研（1950: 281-286）に『八丈実記』の解説があり、大間知篤三（1951: 279-284）に同解説の改訂版が載る。国語研（1950: 285）「方言資料としては巻 3 に約 300 余の島語が録せられ、天地、時刻、人倫、支体、衣服、飲食、家居、器財、動物、言語の 10 部分に分けて列挙されており、巻 2 にも重複記載されている。身分による言葉の使い分けの例が若干示されていること、動詞にも注意を向けていることなどが特色であり、それ以外にも各巻に方言資料が散見せられ、本書は八丈島研究にとっても最も重要な資料の一つである」とある。大間知（1951: 279-284）より主要部分を引用する：「近藤富藏守眞編著。【中略】著者は【中略】文政九年（一八二六）に二十二歳で遠島申しつけられ、翌十年島に着き、三根村に割當てられた。【中略】明治十三年（一八八〇）赦免されて一度國地へ渡つたが、同十五年に再び島に歸り住み、明治二十年六月に八十三歳の高齡を以て多彩な一生の幕をおろした。【中略】翁は多方面の活動をしながら、何よりも筆を取つて數々の記録を残し、その量は遂に六十九冊に達した。その約半分が東京府に買上げられて、ここに録する八丈實記三十六卷となつたのであるが、その経過は次のごときものであつた。【改行】東京府の官員が渡島して、近藤翁の八丈實記に初めて接したのは明治十一年のことである【中略】安政二年（一八五五）は彼の来島二十八年目であり、それから星霜二十四年は明治十一年にあたるが、その間むなしく捨てて云々といふのは、八丈實記が安政二年までにはほぼ書上げられてみたことを意味するのであらうか。【改行】また同書を書上げて献納した時の喜びが、巻三に誌されてある。【中略】しかるに東京府の處理がすんだのは、遙かに遅れて明治二十年のことであつたといふ事實【中略】

即ち東京府側の処理が終つたのは、翁が死んだ直後である。【中略】翁の筆稿の約半分が東京府の蔵本となり、保存の方法が講ぜられたことは眞に幸であつた。府は買上げの部分を整理して、一應の體裁を整へたのである。【中略】以上に述べたところによつて明らかなやうに、東京府へ提出されたのは翁自身の手になる最初の寫本ともいふべきものであり、原本は島に残されたのである。そして渡された六十九冊のうち、四十冊は再び島へもどされてゐる。【中略】これらの文献の總てが末吉の長戸呂家に納められたのか、それともそれは一部分だけであつたのか、私にはよく判らない。八丈島支廳蔵本の八丈實記は、長戸呂本か東京府本かいづれかの寫しのやうに思はれる。ずっとおくれて別に數組の抄本が、多分東京府本からつくられ、その一組が柳田國男氏の書架にあつて、私が使用したのはこの抄本であり、卷數はすべてこれによつてゐるのである。従つて『八丈実記』の「約 300 余の島語」は八丈方言であり、更に三根方言である蓋然性が高い。調査年を本稿では便宜的に 1855 年と書くが、後述するように執筆開始の 1847 年にまで遡りうる。

本稿が使用する『八丈実記』は八丈実記刊行会（編）が 1964-1976 年に刊行した活字本全 7 卷であり、これを単に「活字本」と呼ぶことにする。八丈島支庁蔵本の翻刻が吉町義雄（1951: 142-150）に載るので原本の體裁を知るためこれも参照したが、活字本は各種の本により校正しているため活字本の記載に従つた。活字本より文献の性質に関する主要部分を引用する；1 卷「はじめに」より「本書の原本は、現在東京都の「都重宝」（全三十六卷）に指定され、都政史料館に保管されている。その三分の二ほどの内容は、昭和のはじめ、渋沢家において四部の写本（藤木氏筆）を作成し柳田文庫、折口文庫、渋沢家に保管されている。写されなかつた部分にも流人帳の大部分や筆写不能とみられる個所などで重要な内容が多く含まれている。しかし、渋沢家で作成した藤木氏の前業がなかつたならば、活字による本書の刊行は一層難事であつたと思われる。【改行】このたび、都政史料館の好意により原本を完全撮影し（フィルム駒数四、二〇〇）、さらに都教育庁と八丈島長戸路家の好意による「八丈実記控」（都本の三分ノ一ほど）を参考にして、活字本として全貌を伝えることができるのはわれわれの大きな喜びである。「近藤富蔵のこと」より「近藤富蔵は文化二年（一八〇五）五月三日、重蔵の長子として生まれた。紅葉山奉行を勤め、数々の著述を遺した重蔵も子女の教育にはおろそかであつたやうで、富蔵が四書素読を終えたのは十五歳の時である。父子の間には何か円滑なものが欠けていたやうで、十八歳から二十一歳になるまで、富蔵は家を出て越後高田の仏光寺で修行をしている。こゝで得た浄土真宗の影響は彼の生涯に深く根をおろした。【改行】やがて父のもとへ帰つた富蔵は、今の目黒駅近くの父の建てた別宅に住み、そこで流島の原因となる殺傷事件を起こしたのである。【中略】富蔵は終身流刑囚として二十三歳の四月二十六日、永代橋を出帆して八丈島に向かった。【中略】島では間もなく結婚し、一男、二女をもうけた。弘化三年（一八四六）長男に先立たれたが、その翌年、教えて四十二歳の頃からこの「八丈実記」の筆がとられはじめた。そして安政二年、五十一歳の時、「二十八卷成功を得たり」と記している。その後手を加えて、五十六歳の時一応の「修飾」をおわつた。その翌年、長戸路、奥山の兩人から進められて、さらに諸旧家の蔵書を探索して「公に八丈

実記七十二巻草稿」が成った。これには現存の内容がほとんど含まれていたと思われる」。『凡例』より「本活字本の原稿作成に当っては、渋沢家において作成した写本を写真撮影したものでそのまま使用できるものは使用し、他は一切東京都都政史料館の原本を写真撮影したのから筆写した。校正の参考には長戸路家蔵の「八丈実記」を撮影したものその他を使用した。【中略】第五編（都本十八）本巻は特に細字、くずし字、書き込みが多い」とある。1巻第五編「居宅 風俗 方言 年中行事」「方言（言語）」pp.324-330が問題の部分であり（※6巻pp.269-271に異文あり）、吉町（1951: 142-150）に載る「八丈方言」（p.143によれば約250語句）と同じものの校訂版であると見られ、国語研（1950: 285）「約300余の島語」と同じものを指す。7巻p.328「補遺について【改行】東京都公文書館（旧名都政史料館）蔵の八丈実記原本は重要文化財の指定を受けたのを機に大々的に補修された。それによって、従来綴込みでかくれていた部分が見えるようになり、新たな資料も発見された。ここにはそれらの増補すべき文と活字版作成時の逸文および判読を訂正すべき個所を巻・頁・行の順に収録した」とあるが、1巻pp.324-330に関する補遺は7巻p.330に僅かに存するのみであった。本稿では活字本1巻pp.324-330「方言（言語）」を「八丈実記方言集」と呼ぶことにする。これは何故ならば『八丈実記』には古文獻からの引用部分も含めて至る所に方言が散見されるため「八丈実記方言」とは呼べず、『園翁交語』の方言集（＝「八丈島語」）なども活字本には収録されているため「方言集」とも呼べないからである。

「八丈実記方言集」の語形の多くは片仮名で書かれている。例えば冒頭部分には「日モ月モ 天道様、天ヲ テンネイ、地ヲ ミヂヤ」とある。「天道様」の音韻は/teNtousama/であると想像されるが音韻資料にはならない。「ミヂヤ」は正書法における拗音の表記法を根拠として/mizja/と解釈される（※zja/dja等の対立はないと解釈するが本稿の目的は母音であるため問題にならない）。このように語彙の片仮名表記からは音韻解釈が導かれる。以下では先ず意味・片仮名・音韻解釈を併記しつつ列挙し、本稿における「八丈実記方言集」の解釈を示す。音韻資料にならない箇所については完全に省略するか、想像される音韻表記に丸括弧を付した。特殊な解釈をしたり解釈に迷った場合はその理由・根拠を横に記した。特殊な解釈を施した上での音韻表記には「*」を付したが、「特殊な解釈に基づく」という意味である。

八丈実記方言集（1855年の八丈方言の音韻資料として）³⁷

天地

天：テンネイ/teNnei/, 地：ミヂヤ/mizja/, 東の風：イナサコチ/inasakoci/・ヒラナラヒ/hiranarai/, 巽の風：サナガシ/sanagasi/, 南の風：ミナミ/minami/, 坤の風：ナガシ/naqasi/, 西の風：マニシ/manisi/, 申西の風：ナツニシ/nacunisi/, 酉戌の風：フユニシ/hu'junisi/, 乾の風：カワムラナラヒ/kawamuranarai/, 北の風：一ツナラヒ/(hito)cunarai/, 艮の風：オワタナラヒ/owatanarai/.

時刻

³⁷ 『八丈実記』活字本1巻pp.324-330, 6巻pp.269-271, 吉町（1951: 142-150）を総合したもの。

朝：トンメテ/toNmete/, 昼十時：コマヒル/komahiru/, 昼：ヒヤウラ時/hjoura(doki)・日ノマンナカ/(hi)nomaNnaka/, 昼二時：ダイサン/daisaN/, 昼四時：ダイサンサガリ/daisaNsagari/, 夕暮：ヤヨウシヤ*/'jai'jousima/ (cf. 三根(2009). 'jeR'jou, 鶴窓帰山 (1848)『八丈の寝覚草』より「やゆふしま」, 吉町 (1951: 138)『園翁交語』「八丈島語」より「やいゆふ」)・ユウケ時/'juuke(doki)/(cf. 三根(1989-). 'jouke), 夜十時：子ドキ/medoki/.

人倫

父：トゝサマ/totosama/・テゝ/tete/, 母：カコフ*/kakoo/ (cf. 三根(1989-). kakoR)・ハア/haa/ (cf. 三根(1989-). hoR), 祖父：オフヂ/'ouzi/, 祖母：バサマ/basama/, 親類：ヲヤコ/'o'jako/, 兄：アセイ/'asei/, ~様：~アセイ/'asei/, 弟：ゼイ/zei/, 姉：アネイ/'anei/・インネ/'iNne/, 妹：チフダイ/kjoudai/・ヲトウト/'otouto/ (cf. 吉町 (1951: 145)「ケフダイ又オトウト」), 伯父：ヂ/zi/, 伯母：バ/ba/, 従弟：イトコ/'itoko/, 姪：メイヨウシ/mei'jousi/, 妻：ゴセ/gose/, 夫：ダンナ/daNna/・クトウ/kutou/, 忍女：メカケ/mekake/, 妻と妾と：トワリ/towari/, 大家の妻の敬称：大カタドノ(/'ou)katadono/・アネイドノ/'aneidono/・ヨメドノ/'jomedono/, 大家の娘の敬称：トノ/tono/, 下男：トリビツカン/toribiQkaN/ (※本文中説明書に「一人被官」とあり, 「ツ」は促音), 又従弟：フタハライトコ/hutahara'itoko/ (※/aha, awa/のいずれか不明), 老人：コンゴ/koNgo/, 牛飼：トノリ/tonori/, 二男：ジヤウ/zjou/ (※6 巻 p.270 「ジヨウ」), 三男：サボウ/sabou/, 四男：シヤウ/sjou/ (※6 巻 p.270 「シヨウ」), 五男：ゴロウ/gorou/, 六男：ロクロウ/rokurou/, 七男：シツチャウ/siQcjou/ (※6 巻 p.270 「シチチャウ」), 八男：ハツチャウ/haQcjou/, 九男：クツチャウ/kuQcjou/, 子供の卑称：ハラハタ/harawata/ (cf. 三根. haroRtagiR)・ゴゾウ/gozou/ (cf. 吉町 (1951: 146)「コゾウ」), 子供の尊称：我子サマ/(wagako)sama/・トノサマ/tonosama/・ハウシノ玉サマ/housino (tama)sama/, 人間の蔑称：ミシヤキ/misjaki/・テツチ/teQci/, 馬鹿：ドンゴ/doNgo/, 父無し子：ヤンゴ/'jaNgo/, 当歳の小児：カタコ/katako/, 淫乱：百ペン/(hjaQ)peN/, 長女：ニヨコ/njoko/, 二女：ナカ/naka/, 三女：テゴ/tego/, 家子：チゴ/cigo/, 四女：クス/kusu/, 五女：ジヒロウ/ziirou/, 六女：クウルウ/kuuruu/, 幼女：アツパ/'aQpa/, 若い女：メナラベ/menarabe/・ヨケコ/'jokeko/, 双子：タンゴ/taNgo/, 妊婦：ハラメ/harame/, 男の渾名：ヘイグリ次郎/heiguri(zjou)・ヒツチン三郎/hiQciN(sabou)・ハツチャ六郎/haQcja(rokurou)/, 女の源氏名：ボウス/bousu/・フド/hudo/・トウス/tousu/・タカリ/takari/・フツラ/hucura/・アイチャ/'aicja/・ネツコムシ/nekomusi/・ソウムツラ/soumucura/・マゝカヅラ/mamakazura/・ネジガネ/nezigane/, 流人：ヅニン/zuniN/, 中之郷における流人：クンヌ/kuNnu/, 釣合わない夫婦：テウチンニツリガネ/cjouciNnicurigane/, (6 巻 p.270 によれば更に; 幼児が老女を呼ぶとき; ネツコバ/nekoba/, 二女：ナカバ/nakaba/).

支躰

頭：ツムリ/cumuri/, 鬢：ミチキ/miciki/, 眉間：ナツキ/nacuki/, 背：ヘダカ/hedaka/, 膝：ツグメ/cugume/, 足：ハギ/hagi/, 踵：ケイブシ/keibusi/, 口：ハゲタ/hageta/, 臍：ヘツソコ/heQcogo/ (cf. 吉町 (1951: 147)「ヘツソゴ」), 指：イビ/'ibi/, 掌：タンブ/taNbu/・手ノサラ/(te)nosara/,

歯：ヌカバ/nukaba/, 髪：ツブリノ毛/cuburino(ke)/, 中之郷における髪：カシヤガイ/kasjagai/ (cf. 中央. カシラ), 髭：ハウヘゲ/houhege/, 三ツ口：トンジヤウ/toNzjou/, 女性の陰部の毛：ヘゲ/hege/, 陰水：イジル/iziru/, 鮫肌：シヨケラ/sjoQkera/ (cf. 吉町 (1951: 147) 「シヨッケラ」, この「ッ」は何故か小さい), 女性の陰部の無毛のもの：ハウロク/houroku/, 交合：ヘンコヽヽヽスル/heNkoheNkosuru/・コスル/kosuru/, 情婦になる：カタル/kataru/・ゴセニナル/goseninaru/, 身の毛が立つ：サンバラケ/saNbarake/, 大便：ニツト/niQto/, 小便：ヨツパリ*/joQbari/ (cf. 中之郷(1958).joQbari), 死：マロブ/marobu/, 涙：メナダ/menada/, 女性の陰部：シリ/siri/.

衣服

衣服：ヘビラ/hebira/, 美服：マダラ/madara/・ヨケヘビラ/'jokehebira/, 古着：ホロ/horo/, 帯：ヨビ/'jobi/, 裂：カコフ/kakou/ (cf. 国語研 (1950: 337) 「カコウ」より「中之郷(1930). kakoR」), 下帯：ハダヨビ/hada'jobi/, おくび：ノボリ/nobori/, 襟：クビエリ/kubi'eri/.

飲食

稲：タボ/tabou/・タブ/tabu/, 粥：イヽ/'iR/, 味噌：ダシ/dasi/, 朝飯：アサケ/'asake/, 昼飯：ヒヤウラ/hjoura/, 夕飯：ユフケ/'juRke/ (cf. 三根(1989-). 'jouke), 苳：ホウスアヒ/bouzu'abi/ (cf. p.384)・サツトアビ/saQto'abi/, 桑の実：アノミ*/kanomi/ (cf. 三根(1989-). ka 桑), 花：カネイ/kanei/, (吉町 (1951: 148) によれば更に ; 肉醬：シウデ/sjuude/・オマワリ/'omawari/), (6 卷 p.270 によれば更に ; 肉醬：シウデ/sjuude/・ヲマカリ/'omakari/).

家居

大家：ボウヤ/bou'ja/・ボウエ/bou'e/, 小家：ヤカタ/'jakata/, 家の背戸：ウナジ/'unazi/, 雪隠：閑所/kaNzjo/ (cf. 吉町 (1951: 148) 「カンジヨ」), 天井：アマ/'ama/, 納戸：チャウダイ/cjoudai/, 流しもと：スガキ/sugaki/, 流し下の穴：ケドウズ/kedouzu/, 桁：ソウ/sou/, 垂木：タルゴ/tarugo/, 屋棟：ツベ/cube/, 石垣：オリ/'ori/, 階子：アマバシ/'amabasi/, 台所：カイコヤ/kaiko'ja/, 門：カド/kado/・イシバシ/'isibasi/, 月経や出産時の別宅：タヤ/ta'ja/, 産屋：コウマヤ/kouma'ja/, 縁の下：タナシタ/tanasita/, 家の隅：オクジ/'okuzi/・ヤプロ/'jaburo/, 家入口：トボヲ/tobo'o/ (cf. 永久保満 (1927: 96) 「とぼう (家の表)」より「檜立(1927). toboR」).

器財

器物：ワンノコ/waNnoko/・オケノコ/okenoko/, 飯椀：ゴキ/goki/・ジヤウギ/zjougi/, 篩：モグルシ/mogurusi/, 膳と椀が揃ったもの：カゴツ/kagocu/, 煎鍋：火ドリナベ/(hi)dorinabe/, 通常の鍋：縄釣ナヘ/(nawacuri)nabe/, 鋏：カ/ka/, 鎌：マガマ/magama/, 薪：モシキ/mosiki/, 柴：ゴミ/gomi/, 徳利：クリ/kuri/, 釣竿：ヤギダケ/'jagidake/, 鯉を釣る物：ハネ/hane/, 釣箱：コシヨケ/kosjoke/, すりこぎ：ハチノミ/hacinomi/.

動物

牝牛：ゾク/zoku/・ゾウメ/zoume/, 牝牛：バメ/bame/, 子牛：ヲシヨコ/’osjoko/ (cf. 吉町 (1951: 148) 「ウシヨコ」), ぶち牛：マダラウシ/madara’usi/, 牛への命令；左へ行くこと：テイ/tei/, 右へ行くこと：ベイ/bei/, 止まること：ベイ/bei/, 追うこと：シイ/sii/, 牛の分類名：コニヤク牛/konjaku(’usi)/・マダラ牛/madara(’usi)/・アメ牛/’ame(’usi)/・セジロ牛/seziro(’usi)/・ヒタイ白/hitai(siro)/・ヘイゴ色/heigo(’iro)/・赤マダラ/(’aka)madara/・アカコニヤク/’akakonjaku/・ヘイゴアメ/heigoame/・星デキ/(hosi)deki/, 猫：カン/kaN/, 鼠：ヨルノ人/’joruno (hito)/・ヨメドノ/’jomedono/・ヨルドリ/’jorudori/, 蜥蜴：ケイビヤウ/keibjou/, 蜻蛉：ヘツソ/heQco/ (cf. 吉町 (1951: 148) 「ヘツソ」), やんま：オニベツソ/’onibeQco/・ボンシ/boNzi/ (cf. 6 巻 p.271 「ボンジ」), 赤蜻蛉：青ヶ島ベツソ/(’ougasima)beQco/, 蝶：ヘイル/heiru/, 蟬：クツカワシ/kucukawasi/, 蜘蛛：クボナ/kubona/・トウジンザル/touziNzaru/, 蜘蛛の巣：テングノアジ/teNgunoazi/, 蟻：ヒアシ/hi’asi/・カタバビヤシ/katababi’jasi/・クヒビヤシ/kuibi’jasi/ (cf. 国語研 (1950: 390) 「三根(1933). ヒヤシメ」), 雀：ツブメ/cuzume/, 鼻：ツク/cuku/, 魚：ヨ/’jo/, 鱈：カトウ/katou/ (cf. 三根(1989-). kacuR, 但し katou も国語研 (1950) 「語い集」に載る古文獻の語例や現代方言に見られる). 鱈：シヨゴ/sjogo/, 蟹：ガリマ/garima/, (6 巻 p.270 によれば更に；小：チヨンコ/cjoNko/, 二三才：コテイ/kotei/, 盛り：ゾウメ, 老牛：ゾク).

言語

暫く：イツトキマチロ/’iQtokimaciro/, 先まで：イデミ/’idemi/ (※「先まで」の語義不詳), 弄るな：イロフナ/’irouna/, 本当(本式)：ホツチキ/hoQciki/, 久しぶり：ヘイテイ/heitei/, どうだか：ドコンテ/dokoNte/ (cf. 吉町 (1951: 149) 及び 6 巻 p.271 「ドコンデ」), 中之郷と榎立におけるそろそろ：トウヤク/tou’jaku/, 焼餅：ジンキ/ziNki/, ゆく：イコハ/’ikowa/ (cf. 6 巻 p.271 「イコワ」), 本心放る：ホジヌケル/hozinukeru/ (cf. 吉町 (1951: 149) 「本心抜ル」), 濡れた：ペイタラ/peitara/, 黙っている：オツタラ/’oQtara/ (※これは命令形の語形ではないはず), 反吐：オタキ/’otaki/, 賢い：カドクナル/kadokunaru/, いかにも：カンダラ/kaNdara/, 喰う：カム/kamu/, 臭う：カマツテカマツテ/kamaQtekamaQte/, くたびれる：ケイダルクッテ/keidarukuQte/ (cf. 吉町 (1951: 149) では「ツ」は大きい), じっとしている：ヨウラアレ/’joura’are/, 腹が減る：ヨワクツテ*/’juwakuQte/ (cf. 三根(1949). ’juwaku), 謂われなく人をなぶる：ヨウナシニ人ヲイロウ/’jounasini(hito)’o’irou/, 美麗：ダイジヒ/daizi’i/, 物をくれ：タモレ/tamore/, 風情の無い顔：ヒヨツソゲ/hjoQcoge/ (cf. 吉町 (1951: 149) 及び 6 巻 p.271 「ヒヨツソゲ」), 大賀郷におけるたんとあがれ：ゾンブンアカレ/zoNbuN’agare/, 三根におけるたんとあがれ：シヤウブアガレ/sjoubu’agare/, 隠す：ナブス/nabusu/, どうだか：ウソヲシテ/’uso’osite/ (cf. 三根(1949). ’oso 嘘), つまらない：ウタテシク/’utatesiku/, あいという返事：オフ/’ou/・ヤア/’jaa/ (cf. 吉町 (1951: 149) 「ヤウ/’jawa」, 6 巻 p.271 「ヤウ」), 傷む：ヤメル/’jameru/, 寝る：ヤドル/’jadoru/, 病：ヤンデ/’jaNde/, 灸をする：ヤヒヲヤク/’jai’o’jaku/ (「焼きを焼く」か), まっすぐ：マンノウ/maNnou/, 死：マロブ/marobu/, 早：マアミ/maami/ (cf. 三根(1989-). moRmiN, 吉町 (1951: 137) 『園翁交

語』「八丈島語」「来於交合微/まあみにこい/早くこひと云事, 走於眞哀味/まあみにわせ/早く行けと云事), 人に対して言う喰え: マイレ/maire/, 失せる: マジレル/mazireru/, 人に物をやる: モウセル/mouseru/, 鳥が舞う: マク/maku/, そうだっけ: マグウニ/maguuni/ (cf. 吉町 (1951: 133) 『園翁交語』「八丈島語」「於眞好/まこふに/まことにと云事なり」及び現代語より*/magooni/もある。6巻 p.271 には「ソウダツケ」の他に「マコトニ」の意味も載る), 高価(高直): ゲジキ/geziki/, 珍しい: ケチイ/keci'i/ (cf. 吉町 (1951: 149) 「チチイ」), 汚い: ブシャウ/busjou/, こちらへ: コボウニ*/kogooni/, 大賀郷における不浄: ゴダラク/godaraku/, 三根における不浄: ジタラ/zidara/ (cf. 吉町 (1951: 149) 「ジダラク/zidaraku/」, 6巻 p.271 「ジダラ」), 騙す: テレン/tereN/, 物言う: デヤク/de'jaku/, 手を付けるな: テイスナ/teisuna/, どうしよう: アダニシタラ/'adanisitaru/・アツタモカツタモ/'aQtamokaQtamo/, 悪い事: アシケコト/'asikekoto/, 急いで: キルンデ/kiruNde/, 近所: メグリ/meguri/, 1,5,9月に島中の神社に詣でること: メグリ/meguri/, 外聞が悪い: ミジメニ/mizimeni/, 低い: ミジヤク/mizjaku/, ざまを見る: シヤアイ/sjaa'i/ (※間投詞と解釈される), 知らない: シヨクナケ/sjokunake/, 知っている: シヨケ□/sjoke(-), 火で焼く: シヤゝゝク/sjasjaku/, 家が焼ける: シヤゝゝケル/sjasjakeru/, そこをのけ: シヤレ/sjare/, 沢山: エラバク/erabaku/, もうちょっと: エラコシ/'erakosi/, 雨に濡れる: ヒンタラ/hiNtaru/・ペイタ/peita/ (※ひとつづきに「ヒンタラペイタ」とあるが別語と解釈する), なんの事だ: ヒヨンゲン/hjoNgeni/, 多く: モフニ/mouni/ (cf. 中央. モロ諸, 吉町 (1951: 150) 「モオニ」), 少し: コシ/kosi/, 静かに: セツコリ/seQkori/, 呪詛返し: スソガヘシ/susoga'esi/ (※これは ai 群に含まれる), 左様: コウダラ/koudara/, そうでない: ヨモヨ/'jomo'jo/, 大賀郷における一地方: サト/sato/, 三根における一地方: サワ/sawa/, 末吉における一地方: コウチ/kouci/, 語源はこれかという飛峯: トンプ/toNbu/, 語源はこれだという土洞: トオラ/to'ora/ (cf. 檜立(2008). toRra(屋内の洞穴)), 騙す: スカス/nukasu/, 面倒: エヅイ/'ezu'i/, 間違う: ハグラカス/hagurakasu/ (cf. 吉町 (1951: 150) に基づけば「約定違い」の意味も。6巻 p.271 では「勘定ノマチガウラ」の意), 片足による歩行: ケツケンジヨウ/keQkeNzjou/, 二度手間: シツクリケイグリ/siQkurikeiguri/, 子供を叱る声: ナレナレ/narenare/, 承知: ウンドナ/'uNdona/, 上位の人が来たか: ヲジヤリヤツタカ/'ozjari'jaQtaka/, 中の上位の人が来たか: ヲジヤツタカ/'ozjaQtaka/, 中の下位の人が来たか: ヲジヤラフカ*/ozjarooka/ (cf. 三根(1989-). nomoRka), 下位の人が来たか: ワヒタカ/waitaka/ (※wasite のサ行イ音便の例), 来い: オジヤレ/'ozjare/, 上位の人がくれる: タモリヤルト/tamori'jaruto/, 中位の人がくれる: タモルト/tamoruto/, 下位の人がくれる: タベ/tabe/, やる: ケルハヨイ/keruwa'jo'i/ (cf. 吉町 (1951: 150) 「ケルワヨイ」, 「ワヨイ」不詳), もつれた: オドラニナル/'odoraninaru/, やらない: ケンナカ/keNnaka/ (cf. 吉町 (1951: 150) によればこの語形もある: 「ケンナフヅ*/keNnoozo/」), 上位の人が帰るのを送って言う: オジヤルト/'ozjaruto/, 中位の人が帰るのを送って言う: ワセ/wase/, 下位の人が帰るのを送って言う: イケヨ/'ike'jo/, くさい: カマル/kamaru/, のちに: トウヤク/tou'jaku/, 悪い: ヘタ/heta/・ニクヒ/niku'i/, いやだ: アンセイ/'aNsei/・ヤヅナ/'jazona/, 上位のものが無い: オジヤリナカ*/'ozjariNnaka/ (※音韻解釈は現代語や「ケンナカ」に準じた), 中位のものがない: ナツキヤナ/naQkjana/, 下位のもの

が無い：ナツケヅ/naQkezo/, ままよ：ザンマイ/zaNmai/, 堪忍しろ：ザンマイ/zaNmai/, 驚く：キモヲツブス/kimo'ocubusu/・ブツソベイタ/buQcobeita/ (※「肝を潰す：ブツソベイタ」と書くところだったが吉町 (1951: 150) によれば「驚く」が意味に当り「キモヲツブス」は方言形に当るのでそちらに従った。ツソ/Qco/としたのは他の「ツソ^o」の例に準じた), そうさ：カンダリヤ/kaNdarja/ (※文法形式不詳), 良かった：ヨカラ/'jokara/, あぐら：アツカエヲカケ/'azuka'e'okake/ (cf. 三根(2009). 'azukeR'jo kake, ai 群に含まれる), 語源はこれか氷さい：ミヅンサリ/mizuNsari/ (※「水さい」は水際? 水菜? 水災?), 物を片付ける：ヒサメル/hisameru/, 落し物を拾って返す時に褒美をくれと言う：名句ヲクレ/(meiku)'okure/, (吉町 (1951: 150) によれば更に; 人が強盛：ガンチヨウ/gaNzjou/, 泣く：ベナル/benaru/).

以下では仮名表記をどのように解釈したのかについて説明していく。まずは濁点・半濁点についてだが、これは必ずしもあるべき場所に出現するとは限らず、記述者が特に必要だと思った時にだけ点が付されるというようなことが多々ある。また、筆写の過程で脱落することも位置がずれることもある。従って付されていないからと言って濁音・半濁音でないとは言いきれず、逆も然りなので、清濁の判定については現代の八丈方言における清濁を参考にしつつ明らかに矛盾していれば注記するという形をとることになる。尤も、本稿では母音を問題としているので子音の清濁の解釈がどうであろうと問題にはならない。次に促音を表す「小文字でないツ」についてだが、これが語中に現れると/cu/か/Q/かを表記だけから確実に判断する方法は無い。標準語や八丈方言の事実を元にして、現に/cu/が現れている箇所は/cu/と解釈し、それ以外は全て/Q/と解釈するのが原則になる。

次に狭義の拗音 (CjV/となり/Ci'jV/とならないもの) と否との区別について説明する。拗音かどうかの判断に困るのは「キヤ、キユ、キヨ」などと書かれる場合で、/kja/なのか/ki'ja/なのかは個別の語例を見て判断するしかない。このようなケースを以下に抽出する。

1. 理由があって狭義の拗音にならないケース

蟻：ヒアシ/hi'asi/・カタバビヤシ/katababi'jasi/・クヒビヤシ/kuibi'jasi/, 上位の人が来たか：ヲジヤリヤツタカ/'ozjari'jaQtaka/, 上位の人がくれる：タモリヤルト/tamori'jaruto/.

先ず「ビヤシ」の例だが、表記上は拗音であってもおかしくない。しかし「ヒア」は2音節と解釈され、現代の八丈方言を見ると/hi'jasi/と3音節で現れることが多い。残りの2つは複合動詞の内部境界を挟んでいて現代語でもこのようになっている。

2. エ_列ウ、イ_列ウと書かれるケース³⁸

妹：チフダイ/kjoudai/ (吉町 (1951: 145) 「ケフダイ」), 釣合わない夫婦：テウチンニツリガネ/cjouciNnicurigane/. (吉町 (1951: 148) によれば更に; 肉醬：シウデ/sjuude/).

³⁸ 「エ_列ウ」などの小さい「列」は省略して書くことがある。「エ列音」とは「エ、ケ、セ、テ、ネ、…」。

エウ・イウという直音表記は漢字音の伝統的仮名遣であり拗音〜ヨウ・〜ユウと等価になる。またウの位置にフが現れることがよくあるがハ行転呼音のため交換可能である。

3. イ列ヤウ, イ列ヨウと書かれるケース

ヒヤウラ時/hjoura(doki)/, 二男: ジヤウ/zjou/, 四男: シヤウ/sjou/, 七男: シツチャウ/siQcjou/, 八男: ハツチャウ/haQcjou/, 九男: クツチャウ/kuQcjou/, 三ツ口: トンジヤウ/toNzjou/, 昼飯: ヒヤウラ/hjoura/, 納戸: チャウダイ/cjoudai/, 飯椀: ジヤウギ/zjougi/, 蜥蜴: ケイビヤウ/keibjou/, 三根におけるたんとあがれ: シヤウブアガレ/sjoubu'agare/, 汚い: ブシヤウ/busjou/, 片足による歩行: ケツケンジヨウ/keQkeNzjou/, (吉町 (1951: 150) によれば更に; 人が強盛: ガンチヨウ/gaNzjou/).

イヤウが 13 例, イヨウが 1 例ある。アウとオウの区別の有無の問題については後述する。漢語でイヤウ・イヨウと書かれていれば確実に拗音である。和語や音変化を経た漢語の場合は個別に見る必要があるが, 構成する形態素の意味などから拗音ではないと判断される場合以外は原則として拗音と見なす。

4. イ列ヤ, イ列ヨと書かれるケース

地: ミヂヤ/mizja/, 夕暮: ヨウシヤ/'jousja/, 人間の蔑称: ミシヤキ/misjaki/, 長女: ニヨコ/njoko/, 男の渾名: ハツチャ六郎/haQcja(rokurou)/, 女の源氏名: アイチャ/'aicja/, 中之郷における髪: カシヤガイ/kasjaqai/, 鮫肌: ショケラ/sjoQkera/, 雪隠: 閑所/kaNzjo/, 釣箱: コシヨケ/kosjoke/, 子牛: ヲシヨコ/'osjoko/, 牛の分類名: コニヤク牛/konjaku('usi)/・アカコニヤク/'akakonjaku/, 鰯: シヨゴ/sjogo/. 風情の無い顔: ヒヨツソゲ/hjoQcoge/, 低い: ミジヤク/mizjaku/, さまを見る: シヤアイ/sjaa'i/, 知らない: シヨクナケ/sjokunake/, 知っている: シヨケ□/sjoke(-)/, 火で焼く: シヤハク/sjasjaku/, 家が焼ける: シヤハケル/sjasjakeru/, そこをのけ: シヤレ/sjare/, なんの事だ: ヒヨンゲニ/hjoNgeni/, 上位の人が来たか: ヲジヤリヤツタカ/'ozjari'jaQtaka/, 中の上位の人が来たか: ヲジヤツタカ/'ozjaQtaka/, 中の下位の人が来たか: ヲジヤラフカ*'ozjarooka/, 来い: オジヤレ/'ozjare/, 上位の人が帰るのを送って言う: オジヤルト/'ozjaruto/, 上位のものが無い: オジヤリナカ*'ozjariNnaka/, 中位のものが無い: ナツキヤナ/naQkiana/, そうさ: カンダリヤ/kaNdarja/.

イヤが 23 例, イヨが 10 例ある。漢語でイヤ・イヨと書かれていれば確実に拗音である。和語や音変化を経た漢語の場合は個別に見ていく必要があるが, 構成する形態素の意味などから拗音ではないと判断される場合以外は原則として拗音と見なす。

以上のような基準によって拗音か直音かを判断するが, 結局のところ, 表記だけから上記で拗音と判断したもの全てが拗音であると言い切ることは出来ない。現代の八丈方言で拗音で現れるものについては 100 年強ほど前の八丈方言でも拗音であったろうという推測の下に上記の

音韻表記が成り立っている。現代語に同じ語が無い場合はとりあえず拗音と見なしている。

次にアウとオウの表記上の区別が音韻の区別を表すのかどうかについて考える。

5. イ列ヤウ, イ列ヨウ以外でア列ウ, オ列ウと書かれるケース

夕暮: ヤヨウシヤ*/'jai'jousima/, 祖父: オフヂ/'ouzi/, 妹: ヲトウト/'otouto/, 姪: メイヨウシ/mei'jousi/, 夫: クトウ/kutou/, 三男: サボウ/sabou/, 五男: ゴロウ/qorou/, 六男: ロクロウ/rokurou/, 子供の卑称: ・ゴゾウ/gozou/, 子供の尊称: ホウシノ玉サマ/housino(tama)sama/, 五女: ジヒロウ/ziirou/, 女の源氏名: ボウス/bousu/・トウス/tousu/・ソウムツラ/soumucura/. 髭: ホウヘゲ/houhege/, 女性の陰部の無毛のもの: ホウロク/houroku/. 裂: カコフ/kakou/ (cf. 中之郷(1931). カコウ/kakoR). 葎: ホウスアヒ/bouzu'abi/, 大家: ボウヤ/bou'ja/・ボウエ/bou'e/, 流し下の穴: ケドズ/kedouzu/, 桁: ソウ/sou/, 産屋: コウマヤ/kouma'ja/, 家入口: トボヲ/tobo'o/ (cf. 永久保 (1927:96) 「とぼう (家の表)」より「樫立(1927). toboR). 牝牛: ゴウメ/zoume/, 蜘蛛: トウジンザル/touziNzaru/, 鱧: カトウ/katou/. 弄るな: イロフナ/'irouna/, 中之郷と樫立におけるそろそろ: トウヤク/tou'jaku/, じっとしている: ヨウラアレ/'joura'are/, 謂われなく人をなぶる: ヨウナシニ人ヲイロウ/'jounasini(hito)'o'irou/, どうだか: ウソヲシテ/'uso'osite/, あいという返事: オフ/'ou/, まっすぐ: マンノウ/maNnou/, 人に物をやる: モウセル/mouseru/, 多く: モフニ/mouni/ (cf. 中央. モロ諸, 吉町 (1951: 150) 「モオニ」), 左様: コウダラ/koudara/, 末吉における一地方: コウチ/kouci/, のちに: トウヤク/tou'jaku/, 驚く: キモヲツ布斯/kimo'ocubusu/, 語源はこれだという土洞: トオラ/to'ora/ (cf. 樫立(2008). toRra (屋内の洞穴)).

以上 au 群の語例である。au 群なので/ou/だけでなく/o'o/も混ざっているがここでの議論とは関係ない。アウと書かれるのは0例で、オウは38例である。ちなみにオヲは5例であるが、助詞「を」は非固有形の可能性もある。「トボヲ」は方言形がオヲと書かれたと判断される。例えば「郎」は元々の漢字音ではラウと書かれるべきだが、これに対応する形態素も一律にオウで書かれている事からは漢字音にアウとオウの区別は無いと考えられる。「じっとしている: ヨウラアレ/'joura'are/」は「源氏物語など. やをら」と対応するから一見は「*やうら」と書かれる音を経由していると考えられ、それが「ヨウラ」と書かれている事からは和語にもアウとオウの区別は無いと考えられる。アとオの区別は存在するわけだから、オウが選好されたのは音声[Cou]に近い音だったからではないか、と一応考えられる。ところがイヤウ・イヨウのデータではイヤウ13例、イヨウ1例であり、ほとんどがイヤウである。例えば「郎」に対応する形態素に注目すると、直音ではオウ、拗音ではイヤウで書かれている。この事からは直音と拗音で相補分布していた可能性と、単なる表記上の癖という可能性が考えられる。イヨウが1例あり、/'jou/と解釈したもの(つまり広義の拗音)が全てヨウと書かれている事から、単なる表記上の癖であると見る。そこで「八丈実記方言集」にau/ouの区別は無く、どれも母音部分は/ou/であると解釈した³⁹。なお実際にはアウという表記もあるが、現代語と比較すると oa 群の語例であ

³⁹ 本件について補足する為に、近藤富蔵の母語や習い覚えた正書法についても言及する。富蔵自身は当時の江

って au 群の語例でないと考えられるため除外した。oa 群について述べる際に言及する。

次に oa 群として認定した音連続について、そう解釈した理由などを述べていく。

6. /a'o/, /awa/, /owa/と解釈されるケース

乾の風：カワムラナラヒ/kawamuranarai/, 艮の風：オワタナラヒ/owatanarai/, 妻と妾と：トワリ/towari/, 又従弟：フタハライトコ/hutahara'itoko/, 子供の卑称：ハラハタ/harawata/ (cf. 三根, haroRtaqiR), (吉町 (1951: 148) によれば更に; 肉醬：オマワリ/omawari/), 蟬：クツカワシ/kucukawasi/, ゆく：イコハ/ikowa/, 三根における一地方：サワ/sawa/, 中の下位の人 came か：ヲジヤラフカ*/ozjarooka/ (cf. 三根(1989-), nomoRka).

ワと表記されれば/wa/と解釈される。ハと表記されてもハ行転呼音の起こる環境についてはワと交換可能である。但し意味の切れ目の明確な複合語内部境界ではハ行転呼音が起こらないことがあり (標準語/asahi/は/asai/とはならない), 上記の「フタハラ」は/hutahara/であった可能性が高いが一応ここに入れた (なお現代語は/hutahara/。「ヲジヤラフカ」について説明すると, 文字通り読めば/au/の例にも見える。しかし現代の三根では/oR/で現れていて, 形態論に基づく内的再構では*/nomaroka/などの*/aro/となるべき箇所であり, oa 群の語例である。*/aro/が r 脱落を起こした直後の状態/a'o/とも解釈できるが, 他の語例を見ると既に/oo/が成立しているようだ。つまり可能性としては/a'o/か/oo/のどちらかであると考えられ, 一応/oo/として数える。

7. /oo/, /aa/, /oa/と解釈されるケース

母：カコフ*/kakoo/ (cf. 三根, kakoR)・ハア/haa/ (cf. 三根, hoR), 牛の分類名：ヘイゴアメ/heiqaome/, 蜘蛛の巣：テングノアジ/teNgunoazi/, あいという返事：ヤア/'jaa/ (cf. 吉町 (1951: 149) 「ヤワ/'jawa/」), 早：マアミ/maami/ (cf. 三根(1989-), moRmiN, 吉町 (1951: 137) 『園翁交語』「八丈島語」「来於交合微/まあみにこい早くこひと云事, 走於眞哀味/まあみにわせ/早く行けと云事」), そうだっけ：マグウニ/maguuni/ (cf. 吉町 (1951: 133) 『園翁交語』「八丈島語」「於眞好/まこふに/まことにと云事なり」及び現代語より*/magooni/もある。6 巻 p.271 には「ソウダツケ」の他に「マコトニ」の意味も載る), こちらへ：コバウニ*/koooni/, ざまを見る：シヤアイ/sjaa'i/ (※間投詞と解釈される)。

「カコフ」は文字通り読めば/ou/の例だが現代三根では/oR/で現れる。「ヲジヤラフカ」と同

戸方言を母語とし, 当時の江戸の正書法を習ったと考えられる。馬淵和夫 (1971: 130-131) によれば『三河物語』を根拠に室町末期の三河方言 (1600 年頃の愛知県東部方言) では「才段長音の[o:]と[o:]との混乱は非常に進んでいて, ことに字音語において著しかったという。これを受けて江戸語・東京語の音韻に関して馬淵 (1971: 141-143) は「才段長音の開合についても【中略】『三河物語』で見たように, もうその区別はほとんどなかったであろう」と述べる。従って例えば富蔵が 1800 年頃の江戸方言を記す時には仮に表記上書き分けたとしても音韻上はアウ・オウの区別は無いことになる。もし富蔵自身にアウ・オウの音韻上の区別が存在するなら上述の相補分布説も軽視できないがそのような区別は存在しないと考えられ, 後述するように現代語と比較して/oo/と解釈されるものさえオウと書いている富蔵に表記に関する厳密な書き分けの意識があったとは考えにくい。

様に解釈されるが、こちらでは/a'o/は表記上考えにくい。筆者の調査によれば「マグウニ」は三根/maguN/, 中之郷/maguN, magunja/に対応し、『園翁交語』『八丈島語』の「まこふに」は三根/magoN/, 末吉/magoN/, 檜立/magoaN, magoa/, 青ヶ島/magoR/に対応する。古くから両形存在したと考えられる。「コバウニ」は「飯豊毅一(1959)より大賀郷(1949). /kogo(R)ni/この様に」と同じ形態素と見られる為/oo/の例と解釈した⁴⁰。ところで金田は「*masa#'asci>masoRsei マサ兄さん」などを根拠に「類推で*a#'a>*aa>oR/と変化した」と主張するが、「八丈実記方言集」や『園翁交語』『八丈島語』に確認される「ハア, ヤア, マアミニ, シヤアイ」からはその主張が正しそうだと分かる。「ハア母」の例からはw脱落 (i.e. *hawa>haa) が起こっていたと解釈され、長母音/aa/が確認される。また二重母音/oa/の例として「ヘイゴアメ, テングノアジ」を挙げたが、まだ/o'a/の可能性もある(また『八丈の寝覚草』に「をとあね」の例がある)。*/awa/*が*/aa/* (e.g. 三根.hadoRsi 裸足)に合流したのと同様に*/owa/*でもw脱落が起こり*/oa/* (e.g. 三根.sjoRrime 白蟻メ)に合流したと推測される。従って「八丈実記方言集」の少し後の状態としては/oo, aa, oa/の3種類の長母音・二重母音がoa群に残存することになると推測される。

次にuu群, ii群として認定したものについて、そう解釈した理由などを述べる。

8. ウ列ウ, イ列イと書かれるケース

夕暮：ユウケ時/'juuke(doki)/, 五女：ジヒロウ/ziirou/, 六女：クウルウ/kuuruu/, 粥：イヽ/'iR/, 夕飯：ユフケ/'juRke/ (cf. 三根(1989-). 'jouke), 牛への命令：追うこと：シイ/sii/, 蟻：クヒビヤシ/kuibi'jasi/, そうだっけ：マグウニ/maguuni/, 落とし物を拾って返す時に褒美をくれと言う：名句ヲクレ/(meiku)'okure/.

ウフ・イヒという表記はハ行転呼音の起こる環境ではウウ・イイと交換可能である。ここにはuu群, ii群の例を纏めたが、「クヒビヤシ」はii群の/ui/の例であり、筆者の調査(2009)では青ヶ島/kuibi'jasi/, 三根/kiRbi'ja(si)を確認した。「名句ヲクレ」はu'o/の例として挙げたが、これは非固有形の可能性が高く、数える際には/uu/に算入する。

次にei群に属する/ei/として認定したものについて、解釈の理由などを述べる。

⁴⁰ 対応を考える上で重要な[g(w)a(:)N, gun] (中之郷)に関する語例を2010年に調査したので以下に記す。

'ikogaN / 'ikogani 'ikoganiR 'ikogaRN 'ikogaRniR (…新世代の発音)

'ikogwaN [不可能音形] 'ikogwaRN 'ikogwaRniR (…旧世代の発音)

(意味：行くよう；母音が伸びる形は、誘われる人数の多さや誘う意志の強さを表す)

sogwaNdoa kotowa siNnaka / siNnakohitodara (そんなことはしないよ／しない人だよ)

siNnoadara (してはダメだよ；*nako-) / siNnakodara (してはダメだよ！；強調)

kogwaNdoa koto (このようなこと) / sogwaNdoa koto (そのようなこと)

kogwaN se (このようにしろ) / sogwaN tatame (このように畳め)

kogwaRni se (このようにしろ) / sogwaRni se (このようにしろ)

'ugwaNdoa hosikatani sodara (あのような干し方にするんだよ) / 'ugwaN sodara (あのようにするんだよ)

dogwaN sodoa (どのようにする？；疑問詞→連体形の係り結び；*sodaro)

dogwaRni sodoa (どのようにする？；疑問詞→連体形の係り結び；*sodaro)

maguN (実際・本当に) / maguni (実際・本当に) / magunja (実際・本当に；軽い否定)

cf. ka'o (顔) / wagamonogoani (我物のように・我物顔に；祖母の代の言葉)

9. エ_別イと書かれるケース

天: テンネイ/teNnei/, 兄: アセイ/’asei/, ~様: ~アセイ/-’asei/, 弟: ゼイ/zei/, 姉: アネイ/’anei/,
 大家の妻の敬称: アネイドノ/’aneidono/, 男の渾名: ヘイグリ次郎/heiduri(zjou)/, 踵: ケイブシ/keibusi/,
 花: カネイ/kanei/, 牛への命令; 左へ行くこと: テイ/tei/, 右へ行くこと: ベイ/bei/,
 止まること: ベイ/bei/, 牛の分類名: ヘイゴ色/heigo(’iro)/・ヘイゴアメ/heidome/, 蜥蜴: ケイ
 ビヤウ/keibjau/, 蝶: ヘイル/heiru/, 久し振り: ヘイテイ/heitei/, 濡れた: ペイタラ/peitara/,
 くたびれる: ケイダルクッテ/keidarukuQte/, 手を付けるな: テイスナ/teisuna/, 雨に濡れる: ペイ
 タ/peita/, 二度手間: シツクリケイグリ/siQkurikeiguri/, いやだ: アンセイ/’aNsei/, 驚く: ブツ
 ソペイタ/buQcobeita/.

全てエイと書かれており/ei/と解釈される。「中央. ヒヒル」に対応する「ヘイル」からは既に一部の*/ii/が/ei/に変化済と分かる。また同時代の『八丈の寝覚草』の「テネゲへ」(手拭)から*/oi/ (金田 2001: 404) が/ei/に変化済と分かる。「手を付けるな: テイスナ」からはヨ格に関する音変化(の解釈)「*Ce’o>*Ce’u>*Ceju>*Ce’i>/Cei/」が完了済と分かる。ヨ格の*/Ci’o/か/Cjo/は資料中には出現しないが「ナツキヤナ/naQkjana/」が例証されるところを見ると和語にも拗音は浸透しており成立済と推測される。ヨ格の/Cu’o, Co’o, Ca’o/は/Cu’o, Co’o/に関する表記を信用すればまだ/o/のままであり、それぞれ/uu, ou, oo/には変化していないように見えるが、「トボヲ/tobo’o/, カコフ*/kakoo/ (<*kaka’o, 再構の根拠は前述)」を見ると「カコフ」のような名詞では音変化後の形が見られることからヨ格も既に/oo/として成立済と推測される。「トボヲ」のような名詞では変化前の形が例証されるため、ヨ格に/ou/が成立していたかどうかは分からないが、文法現象では音変化がいち早く起こっている可能性もあるため、名詞で未変化でもヨ格では変化済かもしれない。ヨ格の/uu/についてはよく分からないが成立していなかった保証は無い。

次に ai 群に属する/ai, a’e/と認定したものについて、解釈の理由などを述べる。

10. ア_別イと書かれるケース

東の風: ヒラナラヒ/hiranarai/, 北の風: 一ツナラヒ/(hito)cunarai/, 乾の風: カワムラナラヒ/kawamuranarai/, 艮の風: オワタナラヒ/owatanarai/. 昼は二時: ダイサン/daisaN/, 昼は四時: ダイサンサガリ/daisaNsagari/, 夕暮: ヤヨウシヤ*/’jai’jousima/, 女の源氏名: アイチャ/’aicja/.
 中之郷における髪: カシヤガイ/kasjagai/, 納戸: チャウダイ/cjoudai/, 台所: カイコヤ/kaiko’ja/,
 牛の分類名: ヒタイ白/hitai(siro)/, 美麗: ダイジヒ/daizi’i/, 灸をする: ヤヒヲヤク/’jai’o’jaku/,
 人に対して言う喰え: マイル/maire/, 呪詛返し: スソガヘシ/susoga’esi/, 下位の人 came たか: ワ
 ヒタカ/waitaka/ (※wasite のサ行イ音便の例), ままよ: ザンマイ/zaNmai/, 堪忍しろ: ザンマ
 イ/zaNmai/, あぐら: アツカエヲカケ/’azuka’e’okake/ (cf. 三根(2009). ’azukeR’jo kake).

アヒと書かれていてもハ行転呼音の起こる環境であるためアイと交換可能である。現代の三根の動詞終止形「wasu」は命令形が「wase」でありこれは「八丈実記方言集」にも「中位の人

が帰るのを送って言う：ワセ/wase/」として例証される。金田（2001:443）「we:te 来まして・行きますして」とあるように往と来のどちらの意味にも使える語で、なおかつ現代三根では「て」の付く連用形に/weRte/が現れる。これに対して「八丈実記方言集」では「下位の人 came か：ワヒタカ/waitaka/」が例証され、/ai/>/eR/という変化が辿れる。同じ動詞の他の活用形からは更に*/wasite/が内的再構され、サ行イ音便の例となる。「ワヒタカ」は中間段階の/ai/が例証できる貴重な例の一つである。また、「呪詛返し：スソガヘシ/susoga'esi/」、「あぐら：アツカエヲカケ /'azuka'e'okake/」を見るとアエ・アへと書かれており、これらは/a'e/と解釈される。金田（2001:164）と筆者の調査(2009)によれば現代三根では/keRsowa/, /'azukeR/であり/eR/に合流している。本稿では/a'e/>*/ai/>/eR/のように*ai/を経由していると解釈する。この*ai/は「八丈実記方言集」で例証される/ai/と同じものであると考えられる。

以上で仮名表記の解釈法を説明した⁴¹。この解釈に基づき「八丈実記方言集」の母音を数えて表 16 に示す（※「八丈実記方言集」で別項目なら同じ語でも全て数えた）。また、活字本 6 巻 pp.269-271 や吉町（1951: 142-150）にのみ存在する語は資料解釈上の問題があるので数えなかった。また、非固有形である可能性の高い形容詞語尾/i/も数えなかった⁴²。表 16 より、短母音/a, i, u, e, o/, 非短母音/uu, ou, oo, aa, oa, ei, ui, ii, ai/の存在する体系であると分かる。現代三根で非短母音で現れる語例の幾つかは、それらに変化する前の音連続(u'o), o'o, (a'o), awa, owa, ui, a'e/が例証される⁴³。これらがそれぞれ順に/uu, ou, oo, aa, oa, ii, ai/にほぼ変化を遂げてしまった段階、「八丈実記方言集(1855)」より少し時代が下るその段階を「ポスト八丈実記方言集」と呼ぶことにする。これらの段階を表 13 に付け足した表 17 を次に記す。

表 16. 「八丈実記方言集」の母音の数⁴⁴

	短母音					uu	au 群		oa 群				ei	ii 群		ai 群	
	a	i	u	e	o		o'o	ou	oo	awa	aa	owa		oa	ui	ii	a'e
天地	18	14	5	1	1				1		1		1				4
時刻	10	4	1	4	4	1		2									3
人倫	55	26	20	18	44	2		21	1	2	1	1	7		1		2
支躰	24	17	19	14	14			3					1				1
衣服	8	8	1	4	8			1									
飲食	11	4	2	2	3	1		2					1		1		
家居	24	9	7	3	8			1	6								2
器財	12	11	4	6	14			1									
動物	27	16	16	11	24			4		1			2	7	1	1	1
言語	127	59	62	53	55	2	4	14	2	1	3	1	9			2	6
計	316	168	137	116	175	6	5	54	3	5	4	3	26	1	3	2	18
和	912					6	59	3	9	5	26	4	21				

⁴¹ なお、「八丈実記方言集」では/Q/以外の子音についても解釈しているが本題でないので説明を省略した。

⁴² 非固有形であっても 1855 年当時から一般に使用されていれば音変化には参加したとも考えられ、現に筆者の調査(2008)でも「檜立 kibinoariR, kibigoariR 気味の悪い・気味が悪い」などが確認されるが、「八丈実記方言集」掲載の語例が本当に当時から使われていたかどうかはよく分からない。

⁴³ 「(u'o), (a'o)」と括弧付きで書いたのは、資料・表記の解釈上の問題があり実在が疑われるため。

⁴⁴ 表 16 では例えば/'azuka'e'okake/だと(a, u, e, o, a'e)=(2, 1, 1, 1, 1)個と数えた。つまり/a'e/は/a'e/についてだけ数えて、/a/, /e/についても重複して数えたりはしなかった。

表 17. 八丈方言の長母音・二重母音の体系と対応 (2)

	uu 群	au 群	oa 群	ei 群	ii 群	ai 群	V ₁	V ₂
八丈実記 方言集 (1855)	uu	o'o, ou	oo, awa, aa, owa, oa	ei	ui, ii	a'e, ai	/a, i, u, e, o/	/a, i, u, o/
ポスト 八丈実記 方言集	*uu	*ou	*oo, *aa, *oa	*ei	*ii	*ai	*/a, i, u, e, o/	*/a, i, u, o/
pHJ	*uu	?*au	?*oa	*ei	*ii	*ai	*/a, i, u, e, o/	*/a, i, u/
青ヶ島(1949*)	uR[ur:]	au[ɔu]	oR[o:]	ei[ei]	iR[i:]	eR[e:]	/a, i, u, e, o/	/i, u, R/
pSK	*uR	*au	*oR	*ai	*iR	*eR	*/a, i, u, e, o/	*/i, u, R/
pSU	*uR	*oR	?*oa	*ie or *ei	*iR	*ea or *ai	*/i, u, o/+α	*/a, R/+β

そもそも pHJ というのは現代の各地区方言を比較していき最も可能性の高い祖体系を再構したものであり、再構の過程では「母音の音色を恣意的に想像する」とか「母音の対立数を恣意的に増やす」というような操作をすることは出来なかった。そこで坂上と坂下・八丈小島・青ヶ島との違いを決定的にしている au 群と oa 群では、「pSK. *au と pSU. *oR のどちらが先かと言えば *au であろう」とか、「末吉の aR は pSU. *oa に由来していると考えるのが妥当であり、pSK. *oR と pSU. *oa のどちらが先かと言えば *oa であろう」などと判断するしかなかった。ところが表 17 の「ポスト八丈実記方言集」を見ると、au 群の母音の音色は *ou だし、oa 群には *oo, aa, oa の 3 種類の母音が存在している。そもそも『八丈実記』が書かれた段階 (1847-1855) では八丈島・八丈小島・青ヶ島の 8ヶ村は既に成立している⁴⁵。その一方で pHJ よりも対立数の多い状態を「ポスト八丈実記方言集」は示しており、この段階ではまだ長母音・二重母音に関して各地区方言のあいだに顕著な違いは見られなかったと推測される⁴⁶。

例証される「八丈実記方言集」に基づいた「ポスト八丈実記方言集」の段階を pHJ の代りに用いると、通時的変化はどのように説明されるだろうか。まず、「ポスト八丈実記方言集. *ou」は直接「pSU. *oR」に変化した可能性が高く、一旦「pHJ. *au」を経由してから「pSU. *oR」になった可能性は低いと考えられる。次に、「ポスト八丈実記方言集. *oo, *aa, *oa」は青ヶ島・八丈小島・坂下では直接 *oo に合流した可能性が高く、一旦「pHJ. *oa」を経由してから /oR/ になった可能性は低いと考えられる。また、「ポスト八丈実記方言集. *oo, *aa, *oa」は末吉では直接 *aa に合流した可能性が高く、一旦「pHJ. *oa」や「pSU. *oa」を経由してから /aR/ になった可能性は低いと考えられる。これらはいくまでも可能性の問題にすぎないが、「pHJ. *au, *oa」と「pSU. *oa」については音色や実在が疑われて然るべきと考える。そこで表 17 ではこ

⁴⁵ 『八丈実記』活字本 1 巻 p.154 「村々惣持山覚 (天保十一庚子大概帳)」に「大賀郷、三根、末吉、中之郷、檜立、宇津木、鳥打」と見え、1840 年にはこれらが成立していたと判る。また既に述べた通り青ヶ島の住民は火山の噴火で 1785 年に大賀郷八重根港に避難し 1824 年に還住しているから、1785 年以前に青ヶ島の方言の原形が成立し、避難生活の 39 年間で大賀郷方言の影響を受けた可能性があるという事がある。

⁴⁶ サ行イ音便を起こさなかった為に特徴的な長母音・二重母音への変化が妨げられた語例が坂上に例証される。サ行イ音便は「八丈実記方言集」の段階では既に起こっているという事が「ワヒタカ」により例証される。サ行イ音便の歴史は古く、これがいつ頃起こったと考えられるかについては後述する。

れらに「?」を付した。ところで「ポスト八丈実記方言集・*ou, *ei」がそれぞれ「pSK. *au, *ai」になったのは所謂「mid vowel lowering」または「異化」であると考えられる。同じ現象が青ヶ島にも起こっていたと考えられるが、それが青ヶ島における「ポスト八丈実記方言集・*ei」にも起こっていたかどうかはよく分からない。

以上によって、前節までで再構した pHJ の確からしさを八丈島の古文献である『八丈実記』に記載された「八丈実記方言集」で検証した。今後は、(小笠原関連文献を含む)他の古文献に見られる八丈方言についても、更に検証に用いていく必要があるだろう。

9. 「アシタバ」のサ行イ音便

前節で「八丈実記方言集」に載る「ワヒタカ」を確認し、その段階では既にサ行イ音便は(少なくともア_前シに関しては)完了していると考えられる点を述べた。しかしこのままでは動詞の形態論に基づく内的再構形である「*wasite」を頼りに通時の変化を考える必要がある⁴⁷。もし可能であれば、文献によって例証されるものを用いて八丈方言におけるサ行イ音便の問題を考えたい。そこで「アシタバ」という単語に注目する⁴⁸。

まずはそもそもアシタバとは何かについて永久保(1927: 88-89)より引用する。

(2) 鹹(あした) 草(ぐさ) (方言ヤアタバ)。 其昔談に、

八丈島は疱瘡の病ひなかりしに、寛政五年の頃よりはやり出して、今は疱瘡することに成りぬとぞ。其の初め、榎立村といふ所の濱邊に流れよりたる桶の中に、手遊びの人形小切の類ありて、濱邊に遊び居たる子供、是を取りて弄びければ、夫れより疱瘡はやりて、小兒大人共に三百人の餘死せりとぞ。又江戸にて八丈草(註、鹹草のこと)と云ひて、疱瘡除也とて植ゑおく人參の様なる葉は、彼の島にては、夫れを食にする物也。根は薩摩芋のごとくに、風味能き物なりとぞ。(原文のまま)

とある。その他、八丈のアシタバ草に関する記録は、太平記、故實叢書、昔日叢書、八丈紀行、海島風土記等にあり、江戸時代の本島に関する文献は、アシタバ草と、女童と、黄八丈の記事であると、言ふも過言でない。此の草は、島に居候した流人達が、食用としたので、廣く世に喧傳されたものである。

アシタバ草は、七島固有の物らしく、南汎録の大島紀行中にも、其の記録がある。

海島志には、「鹹に根を食し、朝に葉を食べるから、アシタバ草と云ふ。」とある。

昔奥羽地方の饑饉年に、草根木皮を食用にした記録があるが、本島でも、甘藷傳來以前には、流人の為人口の過剰を来し、食物の不足した時や、饑饉年には、アシタバ草(三年生)の

⁴⁷ 金田によれば坂上では一般に「て」の付く動詞連体形のサ行イ音便は起こりにくい。金田(2001: 18)「動詞中止形などにおけるsの脱落は、上の例【注;「三根. hiRte 伏して」等を指す】にかぎらず坂上地区では一般におこらないか、おこりにくい。*(注9)」とあり、p.403(注9)「動詞の促音便が撥音であられるなどの現象とともに、クニ(江戸・東京)との窓口になり、関東にあって母音優位の西日本的な江戸語の刺激をうけつづけた坂下地区にくらべて、あまりその影響をうけなかった坂上地区のほうは、子音優位の東日本的な性格を強く保存しているといえる」などと解釈が述べられている。「wasite」が坂上に例証されるかもしれないが、三根の内部に限れば内的再構に頼って「*wasite」を設定するしかない。

⁴⁸ 金田(2001: 19)「動詞でのsの脱落は坂上ではおこりにくい、[「アシタバ」は中之郷でもja(:)tabaである]とある。実は現代の八丈方言において固有形としての「アシタバ」は必ずしも例証されず、いずれも長母音・二重母音への変化を遂げた形である。標準語では「アシタバ」と言い、八丈方言の話者も「アシタバ」という単語を日常的に使うが、それが借用や通俗語源による可能性は、本稿の調査によって初めて否定できる。

根を食べたものである。葉は現在でも野菜として用ひるが、風味の良いものである。大和本草に據れば、根は強壯薬として、滋養に富んだ草である。【中略】昔此程世に知られたアシタ草は、今も山野に生ひ茂つてゐるが、乳牛の良いカイバである。

「鹹」は「塩辛い」の意。現在は粉末や缶ジュースの「明日葉茶」も販売されている。

この「アシタ草」は文献にはどのように現れるだろうか。国語研(1950)巻末の「語い集」から引用し、『八丈実記』(1855)活字本7巻の「総合索引」から辿って引用する。

国語研(1950: 321-322, 404)「語い集」より

アイタ あした草 19 (ひ) 【注;『八丈の寢覚草』(1848), (ひ) = 平仮名書。】

アイタバ あした草の葉 19 (ひ) 【注; 同上】

アシタ 鹹草、八丈嶋ノ民多ク植テ朝夕ノ艱ニ充ツ 37 (アシタ又アイタ) 【注;『海島民俗誌 伊豆諸島篇』(1934)】

アシタグサ 八丈島人の常食にする草、凡そ十人の食に麦三合許りを煮たゝらかし、あした草をしたゝか入れうしぞ又はゑんはいを入れて食う、之をざうすいと云う 8 (あした草) 【注;『巡島日記抄』(1796)】

アシタバ 八丈草という、野生の多年生植物、伊豆諸島に於ける救荒食物として貴重なもの 37 (あした葉) 【注;『海島民俗誌 伊豆諸島篇』(1934)】

ヤアタバ 鹹草 (あしたぐさ) 28 【注; 44】 【注;『趣味の東京府八丈島誌』(1927)】

『八丈実記』活字本7巻「総合索引」より項目・巻数・頁数

アイダ [一タ・鹹草・アシタ] ㊦三七七 ㊧九〇、一三六

鹹草 [アシタ・アイダ・アシタ草・アシタハ] ㊦一一八、三七七、(菊池述)三七七 - 三七九
㊧四六、五〇、五三、六九、八〇、八三、八四、九〇、一三五、一三六 ㊨二
七五、三四五、四二〇

アシタ草 [鹹草] ㊧七二、一二二、一六〇、一六三、一八二、一八三 ㊩四六六

鹹草種蒔 ㊦三六八

あした草の汁 ㊦五八

アシタハ [鹹草] ㊦三七四、三七七、三七八、三七九 ㊩六、七、(新島)八、(三宅島)一
二・一三、(御蔵島)一六・一七、(神津島)一九・二〇、(大島)二四、三五

『八丈実記』活字本1巻より

p.058(原本05巻); 其上をあした草の汁をしほり押へ染上申候。【寛延二年(1749)】

p.374(原本22巻); アシタハ【中略】芋アシタ【中略】アシタ【中略】芋アシタ

p.377(原本22巻); アシタ

p.377(原本22巻); 海島志云、鹹草夕ニ根を食シ、朝ニ葉ヲ食スル故アシタバト云。此草島ノ
方言アシタ、又アイダ。

p.377(原本22巻); 俚語ニアヒダ草ト云

p.377(原本22巻); 鹹草 八丈嶋中之郷 菊池作次郎武利述【改行】八丈嶋有鹹草、和訓朝多葉、
又間草【注; 作次郎は近藤富蔵と同時代人, cf. p.129】

『八丈実記』活字本2巻より

p.006(原本05巻); 此島山物は薯、【中略】あした葉【注; 新島の記事(1774)】

p.007(原本05巻); 女ハ【中略】あした葉【中略】を取【注; 新島の記事(1774)】

p.008(原本05巻); あした葉【中略】を取糧にいたし【注; 新島の記事(1774)】

- p.012(原本 05 卷) ; あした葉【中略】を取【注 ; 三宅島の記事(1774)】
- p.013(原本 05 卷) ; あした葉【中略】を取糧_レいたし【注 ; 三宅島の記事(1774)】
- p.016(原本 05 卷) ; 此島山物は猪ノ下、【中略】あした葉【注 ; 御蔵島の記事(1774)】
- p.017(原本 05 卷) ; あした葉【中略】を取糧_レいたし【注 ; 御蔵島の記事(1774)】
- p.019(原本 05 卷) ; 此島山物は椎の実、【中略】あした葉【注 ; 神津島の記事(1774)】
- p.020(原本 05 卷) ; たゞなへと申無人島【中略】あした葉【注 ; 神津島の記事(1774)】
- p.020(原本 05 卷) ; あした葉【中略】をとり糧_レいたし【注 ; 神津島の記事(1774)】
- p.024(原本 05 卷) ; あした葉【中略】をとり糧_レにいたし【注 ; 大島の記事(1774)】
- p.024(原本 05 卷) ; あした葉【中略】を取糧_レ仕【注 ; 大島の記事(1774)】
- p.035(原本 05 卷) ; あしたハ、麦作仕付候【注 ; 八丈島の記事(1774)】
- p.035(原本 05 卷) ; 又は芋、あした【注 ; 八丈島の記事(1774)】
- p.035(原本 05 卷) ; 芋を植あした蒔付候【注 ; 八丈島の記事(1774)】
- p.035(原本 05 卷) ; 芋あした植付候【注 ; 八丈島の記事(1774)】
- p.046(原本 11 卷) ; 山野ニ自生スル物ハ【中略】鹹草^{あした}【注 ; 南方海島志(1791)より】
- p.072(原本 11 卷) ; 祇苗嶼【中略】叢樹アシタ草ナトアリ島人タバナイト云【注 ; 南方海島志(1791)より】
- p.090(原本 11 卷) ; 鹹草、タニ根ヲ食シ朝ニ葉ヲ食スル故ニアシタバト云、此草島ノ方言アシタ又アイタ【注 ; 収載の南方海島志(1791)より】
- p.122(原本 09 卷) ; 一書云正徳元卯年【中略】アシタ草【中略】
- p.135(原本 09 卷) ; 又此島ノ鹹草^{アヒタ}ハ至テ美味ナリ【注 ; 八丈小島に関して】
- p.135(原本 09 卷) ; 為朝御曹子ノ和歌ニ【改行】我ナクト行末守レ鹹草^{アシタグサ}ハモスル人ノアランカギリハ
- p.135(原本 09 卷) ; 大和本草云、鹹草アシタト云草八丈カ島ノ民多クウヘテ朝夕ノ糧ニ充ツ【注 ; 大和本草(1709)は貝原益軒の編。】
- p.136(原本 09 卷) ; 海島志云、鹹タニ根を食シ朝ニ葉ヲ食スル故アシタバト云、此草島ノ方言アシタ又アイタ
- p.160(原本 08 卷) ; 里芋サツマ芋アシタ草【注 ; 青ヶ島(1783)に関する記事】
- p.163(原本 08 卷) ; 芋、アシタ草【注 ; 青ヶ島(1785)に関する記事】
- p.182(原本 08 卷) ; あした草【中略】芋あした類作付【注 ; 青ヶ島の記事(1836)】
- p.183(原本 08 卷) ; 芋あした【中略】芋あした【中略】粟稗芋あした【中略】芋あした【注 ; 青ヶ島の記事(1836)】

『八丈実記』活字本 3 巻より

- p.466(原本 05 卷) ; 芋アシタ艸御用【注 ; 『八丈嶋年曆 抜書』の 1711 年記事より】

『八丈実記』活字本 6 巻より

- p.275(原本 02 卷) ; 土産【中略】菜蔬 大根 アシタ
- p.345(原本 03 卷) ; 土産【中略】菜蔬 大根 鹹草^{アシタ}

以上である。漢字で「鹹草」とのみ書かれる例は挙げなかった。『大和本草』(1709)に「アシタ」、『八丈嶋年曆 抜書』に「アシタ艸」、『御尋書御請控』(1749)に「あした草」が確認できる(※活字本 1 巻 p.58 の例)。以降継続的に「アシタ(※複合語後部要素に「Ø・草・葉」)

が見られる。『南方海島志』(1791) 引用部に「アイタ・アイダ」、『八丈の寢覚草』(1848)に「アイタ・アイタバ」、『八丈実記』(1855) 活字本1巻 p.377の地の文に「アヒダ草」、同1巻 p.377の菊池作次郎談に「間草(アイタ)」、同2巻 p.135に「鹹(アヒタ)草」が確認できる。これらの事から、(少なくともア_ヲシに関しては) 1791年にはサ行イ音便が完了していたと考えられる。他方で、標準的な形として「アシタ」も併用され続けたようだ。「タ」の清濁の過去はよく分からない。また、サ行イ音便が2009年現在どのように分布しているのかについて、下表にまとめておく。起こりにくいとされる坂上でも起こっているのが分かる。表中で括弧にくくられているのは、予測に反して非音便形が出現した場合を表す。

表 18. 各地区で確認されるサ行イ音便の語例 (2009年調査)

非イ音便形	青ヶ島	三根	末吉	中之郷	檜立
husite 伏して	未確認	hiRte	(husite)	husite	未確認
musite 燃して	miRte	miRte	(musite)	musite	未確認
hosite 干して	heite	heite	(hosite)	hiRte	(hosite)
hanasite 話して	(hanasite)	haneRte	(hanasite)	hanjaRte	
wasite いらっしやって	未確認	weRte	weRte	wjaRte	
nomasete 飲ませて	未確認	nomeRte	(nomasete)	nomjaRte	
'asitaba 明日葉	'eRtaba			'jaRtaba (高年層) 'jataba (中年層)	

10. おわりに一音変化の年代、同源同流解釈、筆者による調査

だいたい国語研(1950)以降に存在する言語学的な研究によって知られる八丈方言(※当時のIPA等による精密または簡略な音声・音素表記)と、言語学と無関係の近代人によって書かれた著述によって知られる八丈方言(※当時の正書法による仮名表記)と、『八丈実記』などの江戸時代の古文献によって知られる八丈方言(※当時の正書法による仮名表記)からの情報をもとに、本稿では江戸時代から近代を経て現代に至るまでに八丈方言の非短母音の体系がどのように変化して来たのかを議論し、表13・表17に示した。

また、坂上と坂下に共通して起こる単語「アシタバ」におけるサ行イ音便が完了していた年代を文献から1791年と特定した。これは江戸時代中期(1720~1820頃)に当たる。「て」の付く動詞連用形「*husite, *hanasite, *hosite, etc」について見ると、坂上では元の音形を保っていることがある一方で三根では「hiRte, haneRte, heite, etc」に変化している。また、「八丈の寢覚草」(1848)と「八丈実記方言集」(1855)では「*oi>/ei/と一部*iiにおける*ii>/ei/」の変化は「テネゲへ」「ヘイル」という語例から見て完了していたが、「/ui>/ii/, /ai>/eR/」はまだ起こっていなかった。これらの事から、「*oi>/ei/と一部*iiにおける*ii>/ei/」の変化はサ行イ音便完了(少なくともア_ヲシに関しては1791年以前の或る時期)から1855年までのあいだに起こったと考えられ、残りの「/ui>/ii/, /ai>/eR/」はそれ以降に起こったと考えられる。

さて、実証的な議論とは別に、対応関係を整理するための思弁的で便宜的な議論(同源同流解釈)も本稿では実施した。それらの議論についても以下にまとめておく。

表 19. 三根方言のヨ格のパラダイムと通時的変化の解釈

通時的な音変化の「同源同流解釈」				現代の共時態			
音節+「を」	'o>'u	口蓋化	その他	ヨ格	はだか格	ヨ格の語例	
軽音節	*Ca'o		>*Coo	>CoR	Ca	noR 名を	
	*Co'o	>*Co'u		>Cou	Co	monou 物を	
	*Cu'o	>*Cu'u		>CuR	Cu	mizuR 水を	
	*Ce'o	>*Ce'u	>*Ceju	>*Cei	>Cei	Ce	sakei 酒を
	*Ci'o	>*Ci'u	>*Ciju	>*Cii	>Cjo	Ci (C=s, c, z)	mesjo 飯を
	*Ci'o		>*Cijo	>*Cjo	>Cjo	Ci (C≠s, c, z)	umjo 海を
重音節	*CVi'o		>*CVijo		>-'jo	Cei CiR CeR	rei'jo 例を siR'jo 椎を meR'jo 前を
	*CVu'o		>*CVu'jo	>-'jo	CuR Cou	zjuR'jo 十を hou'jo 方を	
	*CVN'o		>*CVN'jo	>-'jo	CVN	hoN'jo 本を	
	*Coo'o, *Caa'o, *Coa'o		>*Coo'jo	>-'jo	CoR	hoR'jo 母を	

表 19 は三根方言の「ヨ格」のパラダイムを説明している⁴⁹。ヨ格は標準語の助詞「を」に対応する形態で、「はだか格」(=格を持たない状態)が軽音節なら屈折し、重音節なら/'jo/が膠着する。屈折や膠着の仕方は語例の通りである⁵⁰。表の左半分は通時的変化の解釈について述べている(この「解釈」は便宜的なものだが、古文献から分かることはある)。まずは*/o/[wo]/の狭母音化が起き、続いて順行口蓋化が起き、続いて*a'o>*oo という変化や、ju'i の合流や、*Cijo>*Cjo という拗音化や、類推による膠着要素/'jo/の重音節への一般化が起こったと解釈される。表 19 は三根のもので、各地区方言では対応する非短母音がそれぞれの位置に現れる。

表 20 は三根方言の「イー格」のパラダイムを説明している。「はだか格」が軽音節なら屈折し、重音節なら/iR/が膠着する⁵¹。表の左半分は通時的変化が起こる前の状態について「解釈」を述べている(但し古文献から分かることはある)。「イー格」のパラダイムでは*Cu'i も*Cii も/CiR/にだけ変化すると解釈されるが、表 4 のようにイー格以外の語例も交えれば話が複雑になる。表 4 に「解釈」を加えて表 21 となる⁵²(※同表で「=」は無変化を表す)。「/s, c, z/の後」という条件は「前寄りの*u/ü/と中舌の*/i/」から「*ui>*ii, *ii>*ii」と変化したことを意味すると解釈される。この解釈により標準語などとの対応を説明できる。

⁴⁹ 大島編(1987: 9-29)の音韻論は三根・中之郷の状態を掲出しつつ助詞「を」「へ」が名詞に融合した対格・向格(※金田(2001)ではヨ格・イー格)の一覧を示している。但し不十分な点があり、馬瀬(1961)、金田(2001: 39, 47)の例示も参照する必要がある。表 19・表 20 の語例はそれらから引いた。

⁵⁰ 既に述べたことを繰り返す。/C/=s, c, z/の場合に特殊な屈折形となる場合があり、古形と考えられる。三根では「mesjo 飯を」「hanasjo 話を」となるところを、平山(1958)によれば青ヶ島では/mesiR/となり、金田(2001: 39)によれば末吉と青ヶ島では/hanasiR/となるという。これは通時的変化の過程の相違によると解釈される。/C/=s, c, z/の場合に特殊な通時的変化の説明を必要とする語例に、「sjuRde 塩辛(塩茹で)」「sjo 塩」が存在する。これらの原形が「*si'o-塩」であると「仮定」すると、後者は*si'o>*sijo/sjo/と変化したのに対し、前者は、*si'o(de)>*si'u(de)>*siju(de)>/sjuR(de)/と変化したと考えられる。*/o/[wo]/の狭母音化の有無で異なっている。

⁵¹ 既に「5. 一次的な長母音・二重母音の由来と対応」で金田(2001: 18-19)より引用したものを再度引用する: 「長い母音のあとの単独の i が規則的に長母音化する傾向がある。【中略】・i:<i ko:i:川へ(イー格) osei:i:教えへ(動詞目的形) doui:te:te<*douitasite どういたしまして(結合)【改行】・i:<i<si toui:te<tousite 通して odoui:te<odousite(枝を)折って mo:i:te 回して」。重音節の後で長くなるのは、更に重い音節が出現して音節構造のルールが変わることを嫌った為と考えられる。

⁵² 「八丈実記方言集」は「*oi>*ei, *ii>*ci」は完了済で「*ui>*ii」は未完了の段階と考えられる。

表 20. 三根方言のイー格のパラダイムと通時的変化の解釈 (1)

通時的な音変化の「解釈」		現代の共時態		
音節+「へ」		イー格	はだか格	イー格の語例
軽音節	*Ca'i	>CeR	Ca	hameR 浜へ
	*Co'i	>Cei	Co	kadei かどへ
	*Ce'i	>Cei	Ce	misei 店へ
	*Cu'i (C=s, c, z)	>Cui	Cu	中之郷(2009). 'izui[izüi], 'asui[asüi]
	*Cu'i (C≠s, c, z)	>CiR	Cu	ukiR あそこへ
	*Ci'i	>CiR	Ci	umiR 海へ
重音節	*CVi'i	>·iR	Cei, CiR, CeR	satei'iR (日常的な) 畑へ haroRtagiR'iR くそガキ (腑喰?) へ meR'iR 前へ
	*CVu'i	>·iR	CuR, Cou	kjuRsjur'iR 九州へ hou'iR 方へ
	*CVN'i	>·iR	CVN	kiribaN'iR まな板へ
	*Coo'i, *Caa'i, *Coa'i	>·iR	CoR	koR'iR 川へ

表 21. 三根方言のイー格のパラダイムと通時的変化の解釈 (2)

通時的な音変化の「解釈」				現代の共時態			
当初	*ui>*ii, *ii>*ii	*oi>*ei, *ei>*ei	*ui>*ii, *ii>*ii	結果	頭子音 の条件	形態論 の条件	語例の参照先
*oi/oi/		>*ei		>ei	無条件	無条件	金田 (2001: 21-22)
*ui/üi/	>*ii/i:/	>*ei		>ei	/s, c, z/	非イー格	脚注 10
*ui/üi/	=*ui/üi/		=*ui	>ui	/s, c, z/	イー格	中之郷(2009). 'izui[izüi]
*ui/ui/	=*ui		>*ii	>iR	/s, c, z/ 以外	イー格	金田 (2001: 17-19)
*ui/ui/	=*ui		>*ii	>iR	/s, c, z/ 以外	非イー格	金田 (2001: 17-19)
*ii/ii/	>*ii/ii/		>*ii	>iR	/s, c, z/	非イー格	脚注 12, 脚注 20
*ii/ii/	>*ii/ii/		>*ii	>iR	/s, c, z/	イー格	金田 (2001: 17-19)
*ii/i:/	=*ii		=*ii	>iR	/s, c, z/ 以外	イー格	金田 (2001: 17-19)
*ii/i:/	=*ii	>*ei		>ei	/s, c, z/ 以外	非イー格	脚注 11
*ei/ei/		=*ei		>ei	無条件	無条件	金田 (2001: 21-22)

さて、本論では論点を明確化するために、自ら調査したデータには殆ど依拠せず、原則として既存のデータを利用した。末尾の「資料 (2008, 2009)」には録音された調査データの書き起こしが載る。筆者のデータによって本論がどのように補足され、どのような点が新規の情報・提案なのか、ということを中心に、本論に直接関係することを中心に述べる⁵³。

⁵³ その他の音声・音韻は脚注で述べる。原則として青ヶ島では/ui/[uy]で八丈島では/ui/[ui~uy]である。そもそも/i/自体が[i~y~ju]のような幅の広い音声で実現する傾向にあり、筆者が通時的な解釈として提案する「ju/iの合流」の影響と考えられる。但しiR[i:]とjuR(or i'u) [ju:]は明確に異なる音声で実現するので合流は軽音節のみと言える。原則としてカ・ガ行の直音は/#k, k, #g, g/[k, q, g~y, c]になるようだ(標準語でも同様の傾向はあるが弱い)。原則としてハ行の直音は/#ha, #hi, #hu, #he, #ho, ha, hi, hu, he, ho/[χa, xi~x'i, xu~φu, xc, xo, va, yi, yu, yc, wo]になるようだ。青ヶ島(2009)の「[kuzara] (食べた)」は/kuwara/でなく/kuhara/と解釈してよい。三根(2009)[³ritou], 各地^dre:nen], 青ヶ島(2008b)[^droqureō], 三根(2010)[^drambou], 末吉(2010)[^drunin], 先行研究「蠟燭(青ヶ島)/dausoku/, 流人/zuniN/」などの記述から、ラ行の語頭の直音は/#rV/[^dra, ³ri, ^dru(~³ru), ^dre, ^dro]となる。また、青ヶ島(2008b)の話者の音声を聴くと、語中でも発話の速度が遅い場合は弱い閉鎖が開閉することがあり、その閉鎖は発話の初めに近いほど強い。つまり(標準語と比べた場合)h/の閉鎖の強さが八丈方言のラ行の特徴である。

筆者の2010年の調査で、ハ行について、樫立の一話者は/hoa/[φue] (歯を(磨け))と発音した。中之郷の一話者には両唇を使った発音が更に盛んで、[φue]のような/CVV/のみならず、/haQpa/[φappa] (葉っぱ)のような/CVQ/や、/hara/[φara] (腹)のような/CV/でも[φa]と発音した。坂下の島民の中には中之郷・樫立が持つ

三根(2009)のデータに見られる/s, c, z/直後の特殊なヨ格の例「房事一, 土一, 血一, マッチ一, 話一」は, これまで「飯一(青ヶ島), 話一(末吉&青ヶ島)」しかデータが無かったため, /c, z/の範囲を補完することで議論を補強している(表 19 参照)。更に, 筆者の 2010 年の三根の調査では, 「/ouriR, 'ourjo/ヲヲリを⁵⁴」というヨ格を, 約 5 分の発話の中で意味の区別なく繰り返し用いている様子を確認できた。この/r/の例は/s, c, z/の範囲を超えており, よく分からない。

中之郷(2009)の/'izui/[izui], /'asui/[asui]と榎立(2009)の/'izui/[izi:](, /zoRsui/[zo:si:]) (※口蓋化しない)は「/s, c, z/の後かどうか」及び「イー格かどうか」という条件に関わる音変化の全体像のなかで唯一存在しなかった種類のデータを提供し, 「イー格であるという形態論の条件の下で語根が維持されて音変化が妨げられる」という説明が表 21 の中で有効であることを裏付ける。

青ヶ島(2009)/kuibi'jasi/と三根(2009)/kiRbi'ja(s)i/は「八丈実記方言集」の「クヒビヤシ」と比較することで「ui>ii」という変化の証拠となる。また蟻の分類法を見ると, 三根では白蟻を/sjoRrime/, ただの黒蟻を/'arime/, 小さくて見づらい蟻を/hi'jasime/, 刺されると赤腫れになって痒くて仕方がないヒヤシメを/kiRbi'ja(s)i/と呼ぶ。青ヶ島ではこれを/kuibi'jasi/ (食いビヤシ)または/kuQcigiribi'jasi/ (食っ千切りビヤシ)と呼ぶ(青ヶ島には白蟻そのものは存在しないそうだが, 言葉としては/sjoRrime/と言う)。他方で, 坂上地区にはクイビヤシに当たる語が存在せず, 代りに刺さない蟻を/'arime/, 刺して痒くなる蟻を/hi'jasime/と呼んで区別する。坂上の 3 分割法とそれ以外の地区の 4 分割法の違いは, 非短母音の系統樹の枝分かれと対応している。

参考文献

- 浅沼良次 (1999) 『八丈島の方言辞典』 東京: 朝日新聞出版サービス。
 飯豊毅一 (1959) 「八丈島方言の語法」『国立国語研究所論集』1: 215-232。
 上野善道 (2008) 「母は昔はパパだった、の言語学」『ことばの宇宙への旅立ち』 東京: ひつじ書房。
 大島一郎 (1986) 『八丈小島方言調査報告書』 東京: 東京都教育庁社会教育部文化課。
 大島一郎編 (1987) 『八丈島方言における言語変化』 東京: 東京都立大学国語学研究室。
 大間知篤三 (1951) 『八丈島—民俗と社会—』 東京: 東京創元社。
 金田章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』 東京: 笠間書院。
 金田章宏 (2002) 『八丈方言のいきたことば』 東京: 笠間書院。

このような「訛り」に気付いていた人もいた。中之郷・榎立でも若い世代は[ɣa]に変化している。国語研 (1950: 235-238) を見ると, 非対面式自筆アンケートの質問項目「「ハア (母)」という語を使うか?」に対して大賀郷当時 75 歳女性が「「フオー」という語を今は使わないが意味は了解している」と答え, 榎立当時 71 歳男性が「「フア」という語を使う」と答え, 榎立当時 60 歳女性が「「フア」という語を使う」と答えている。これらは非短母音の体系から大賀郷[ɸo:], 榎立[ɸue(:)]と解釈される。また上野 (2008: 58-59) に「私が調べたところでは, 八丈島の方言では「母」を「フア」と言います。その「フア」は「ハワ」に当たるかたちです」とある。

また, 筆者の 2010 年の中之郷の調査で, /w/でなく摩擦音/w/と解釈できる音声が見られた: /waQmaQma/[wammamma] (笑いの擬声語・感動詞), /waQkma/[wakkma] (輪っか), /waQpma/[wappma] (輪っば), /waQkmoa/[wakkmoa] (輪っかを), /waQpmoa/[wappmoa] (輪っばを)。これらは通時的には*/waQwa(Qwa)/ (わっわ (つわ)) のような音音から変化したと推測されるが, 共時的には/wa/でなく/ma, kma, pma/と解釈される。

⁵⁴ これは「道路やヤマ (畑の意) の領域へとはみ出している樹木の枝で, 地面に日蔭を作っていて, 剪定すべき部分」を表し, 上代語「ヲヲリ」(たわみ曲がること。花が沢山ついて枝のたわむこと)に対応する。

- 国立国語研究所（1950）『八丈島の言語調査』東京：秀英出版。
中田祝夫（1985）『八丈の寝覚草』（勉誠社文庫 133）東京：勉誠社。
永久保満（1927）『趣味の東京府八丈島誌』東京：南日本新聞社。
八丈実記刊行会（1976）『八丈実記』東京：緑地社。
平山輝男（1958）「青ヶ島方言の所属」『國學院雑誌』10(11)：301-306。
平山輝男編（1965）『伊豆諸島方言の研究』東京：明治書院。
馬瀬良雄（1961）「八丈島方言の音韻分析」『國語學』43：43-59。
馬淵和夫（1971）『国語音韻論』東京：笠間書院。
吉町義雄（1951）「『園翁交語』と『八丈実記』の島言葉」『文学研究』42：127-154。

Comparison of Non-short Vowels in the Hachijo Dialect

TAKAYAMA Rintaro

Keywords: Japanese, the Hachijo dialect, Comparative method, Long vowels, Diphthongs.

Abstract

This paper is based on the author's master's thesis. In this paper, non-short vowels (i.e. long vowels and diphthongs) of the Hachijo dialect (i.e. one of Japanese dialects) are compared among its subdialects, trying to reconstruct the proto-system of non-short vowels in the proto-Hachijo. Old "Hachijo Jikki" is also philologically analyzed to describe diachronic sound changes. The Hachijo dialect is derived from Old East Japanese while other Mainland Japanese dialects are derived from Old Middle Japanese, so that the well-known diachronic sound changes in Mainland Japanese cannot be applied immediately to the Hachijo dialect. They are hypothetically applied in this paper in order to analyze the vowel correspondences systematically. In conclusion, it was around 1800 that non-short vowels started to become various among the Hachijo subdialects.

(たかやま・りんたろう 東京大学大学院博士後期課程)

資料 1. 青ヶ島(2009)

下表で調査項目と回答内容は必ずしも厳密に対応しない。以降の表も同様である。

表 22. 筆者による調査データ；青ヶ島(2009)

調査項目	回答内容	備考
鳥打	tori'uci	
宇津木	'ucuki	
小島	kozima	
八丈小島		
大賀郷	'oukagou	
三根	micune	
坂下	sakasita	
檜立	kasitate	
中之郷	nakanogou	
末吉	su'ejosi	
坂上	saka'u'e	
大坂・登龍坂		
八丈島		
青ヶ島	'a'ogasima	'ougasima が録音の最後のほうに確認される。
永郷	'eRgou	'jeigou が期待された。
八重根港	'jaine, 'jeRne	
相手	'eRte	
間	'eRda	
明日葉	'eRtaba	
絵 (図)	'e	'je, 'je(Q)zo が期待された。
えびづる (山ぶどう)	'jebezu	
エビス様 (神様の)	'jebisu	調査票に無い項目だったが質問した。
大きい	boukja	
小さい	neQkokja	
家	'je	
台所	bouzihira	
便所	kaNzjou	
母屋 (大きい家)	bou'je	
母屋から離れた家		
ブナリ	bunari	「風揚げのブナリ」。
ウナリ		
ブトワ	butowa	
ウトワ		
箒 (ははき)	houki	hoRki が期待された。
揚梅 (ヨーモ)	'joRmo	
鋏 (畑の道具)	tega, cubotega, micude, kumade, kuwa, kaikoNguwa	多様な種類がある。
桑 (蚕の餌)	kanoki, kanomi, kabeR	それぞれ木, 実, 葉。
神様	kamisama	
龍宮	rjuRguR	「年寄りにはジューグーと言った」。
仏様	hotokesama	
漁手	rjousju	
入道雲	njuRdougumo	
入梅	njuRbai	
火吹き竹	huRkidake	

背負うわ	sjou	
塩	sjo	
塩辛	sjuRde	「魚の塩漬け」。
場合	baR'i[ba:i]	
ダース	daRsu	
筋	suzi	
土	cuci	[u]は前寄り&無声化により[i]と紛らわしい。
槌	geNnou	
敷く	siku	
始める	hazimeru[χazimeru]	
自在鉤	zizeR[ɕzyze:]	
霧	kiri	
岸・崖	kosi	
kosiwa gakeno tokou ko ... kosi Rtei 'imamo 'iQtemasu'jo 'uN kosiR sibakarini 'ikou teQte		
皆	miNna-meNna	
1日	'iciNci	
2日	hucuka	
3日	miQka	
4日	'joQka	
5日	'icuka	
6日	muika[muyqa]	
7日	nanuka	
8日	'jouka[jouqa]	古い世代の/au/[ɕu]が反映か。
9日	kokonoka	
10日	touka	
11日	zjuR'ici	Nci が省略されたと見られる。
12日	zjuRniNci	
13日	zjuRsaNci	
14日	zjuR'joQka	
15日	zjuRgoNci	
16日	zjuRrokunici	Nci が丁寧が発音されたと見られる。
17日	zjuRsicinici	Nci が丁寧が発音されたと見られる。
18日	zjuRhacinici	Nci が丁寧が発音されたと見られる。
19日	zjuRkunici	Nci が丁寧が発音されたと見られる。
20日	hacuka	
21日	nizjuR'ici	Nci が省略されたと見られる。
22日	nizjuRni	Nci が省略されたと見られる。
23日	nizjuRsaN	Nci が省略されたと見られる。
24日	nizjuRsi	nizjuR'joQka が期待された。
25日	nizjuRgo	Nci が省略されたと見られる。
26日	nizjuRroku	Nci が省略されたと見られる。
27日	nizjuRsici	Nci が省略されたと見られる。
28日	nizjuRhaci	Nci が省略されたと見られる。
29日	nizjuRku	Nci が省略されたと見られる。
30日	saNzjuR	Nci が省略されたと見られる。
31日	saNzjuR'ici	Nci が省略されたと見られる。
1月～12月		
1～10, 100, 1000		
正月		
朔日	cjeitaci	ce[se]/cje[ʃe]が対立。この[s]は口蓋化が無い。
晦日		
来年	reRneN[^d re:nen]	※[^d r]は青ヶ島(2008a)参照。
来月		

再来年、再来月		
今日	kei	
昨日	kinei[kinei]	古い世代の/ei/[ei]が反映か。
一昨日	'ucucei[utsusei]	2つ目の/uが無声化し直後の/c/は口蓋化の無い[s]。三根で現れた音声とほぼ完全に一致していた。当初'ucusei だと思っていたが三根の音声で気付いた。
明日 (アス・アシタ)	'asu	
明後日	'asaQte	
その次の日	saNnasaQte	
その次の日	si'asaQte	「その次の日は go'asaQte」。
朝	'asa, toNmete	
朝飯	'asake	
昼		
昼飯	hjoura	「おやつは cjaqasi」。
夕		
夕飯	'jouke	
春	haru	
夏	nacu	
秋	'aki	
冬	hu'ju	
暑いわ (ホタウロフ・シャシャキヤ・シャシャケロフ)	hotourowa, sjasjakja, sjasjakerowa	気候や気温が暑い。感触や熱線が熱い。その動詞化。
寒いわ (コゲイロフ)	kogeirowa	
アセイ	'asei	「兄貴」。
アネイ	'anei	「姉貴」。
トタウ	totou[totou]	「旦那」。古い世代の/au/[ou]が反映か。
カコー	kakoR	「奥さん」。
兄弟姉妹	kjoudeR	
祖父・爺	'ousama	
祖母・婆	basama	
旦那さん		
奥さん		
(人名) + 爺		
(人名) + 兄		
土地		
財産		
スイビ		「この言葉は聞かない」。
ブッチャリガネ		「この言葉は聞かない」。
稗 (ひえ)		
蛾 (が・ひひる)	heirume	「蛾も蝶も」。
屁 (へひり)	he	heiri が期待された。
最賃		
敷居	sikei	
褌 (ふんどし)	huNdousi	
裸足 (はだし)	hadoRsi	
子供 (はらわた)	haroRta	「giR を付けることもある」。
貧乏	biNbou	
頑丈	qaNzjou	
馬鹿	doNgo, nuke, baka	nukesaku という形が聞かれる地区もあった。
白髪	sjaga	
四郎	sjou	

白蟻 (しろあり)	sjoRri	「白蟻は青ヶ島に居ない」と言いつつ会話中に出現。
蟻	'arime	動物名に接尾する me は任意。省略可能。
黒蟻 (ヒヤシメ)	hi'jasime	「食われれば腫れる」。
吸物	seimono	
雑炊	zousei	※国語研 (1950) 語集「推量」は各地区ナシ。
思うに、調査者が/suirjoR/と発音したのを/sui/を聴き慣れない話者が[seirjou]?などと聞き返したのかも。		
杖	cukiNbou	「昔と違い今は cu'eNbou という」。
水道	suidou[suydou]	
かつえるわ (空腹)	'juwakja, haragaheQta	「kateiru などとは言わない」。
へっつい様 (かまど)	heQcjei	「普通のかまどと違う」。
教える	'oseiru	
煮える		
見える	meiru	
覚える	'obeirowa	標準語「覚える」と同じ意味。「怯える」じゃない。
燃える	meirowa	
吠える	heirowa	oQpeite という語も聞かれた。
呼ぶ	'joboRrowa	
貰う	muroRrowa	
オケル	'okiru	'okeru が期待された。どこにも確認できなかった。
オコス	'okosu	
オテル	'otiru~'oteru, 'ociru	
オトス	'otosu	
オレル	'oriru~'oreru	
オロス	'orosu	
オデル		(怖じる・怖がる)。※青ヶ島(2008a)には出る。
オドス		
ワタル	wataru	
ワタス	watasu	
ケール	keRrowa	(帰る)。
ケース	modosowa	(返す)。keRsowa が期待された。
ブッカタス		(勢いよく・沢山、片付ける)。
ブッコトス	buQkotosowa	(勢いよく・沢山・大きな物を、落とす)。
ブッチャル	buQcjaru	(捨てる)。
ブツオベイル	buQcjobeirowa	(驚く)。co[tsɔ]/cjo[ɰo]の対立の有無は不明。
スール	suRrowa	(味噌汁などを飲む)。
ヒッチュール	hiQcuRe	(酒などを呑む)。
ヒッカタス		(ちょっとだけ・少ない物を、片付ける)。
ヒッコトス	hiQkotosowa	(細かい物を・少ない物を、落とす)。
エーミミコワ		(歩き回る)。調査票には「エーミコワ」。
へーミコワ	heRmikowa	(這い回る)。調査票には「エーミコワ」。
マキミコワ	makimikowa	(飛び回る)。
ヒンマコワ	hiNmakowa	(サッと飛び立つ)。
ペイテ	peite	(雨に濡れて)。
ウェイテ		
デクロワ	kurowa	(やって来る・できる)。
デイテ		(やって来て)。
伏して		
燃して	miRte	
干して	heite	

話して	hanasite	
ワシテ	wase	
飲ませて		
壊して	kousowa, waru, buQcjakasowa	
通して	tousowa	
交して	koRsowa	
回して	moRsowa	
入れて	'jerowa	
くれて	kerowa	
痒がる	keRgarowa	
シンナカ	siNnaka	(しないよ)。
シンノーダラ	siNnoRdara	(ずっとしないよ・しないことだよ)。 発話; sogoNdoR kotowa siNnoRdara. 意味; そんなことはしちゃだめだよ。
ケンナカ	keNnaka	
ケンノーダラ	keNnoRdara	
イキンナカ	'ikiNnaka	
イキンノーダラ	'ikiNnoRdara	
私はこれを食べるわ	'ara korei kuRwa	「子供は kamowa、大人は kuRwa」。
私はそれを食べるわ	'ara sorei kuRwa	
私はあれを食べるわ	'urei kuRwa	
だれが食べるか	darega kuRka	
どれを食べるか	dorei kuRka	
私が食べるわ	'aga kuRwa	
あなたが食べてくれ	'uNga ku'e	
このようになるわ	kogoN narowa	
そのようになるわ	sogoN narowa	
ウクへ行こうと言った	発話; 'aQciR 'ikowa, 'ukiR 'ikowa, 'ukiR 'ikogoniR te 'jowa 意味; あっちへ行くよ、あそこへ行くよ、あそこへ行こうよと言ってるよ	
マゴン・マゴニー・マゴニーテ	発話; 'ikowaQte kimetoQtei magoR 'jadara. 意味; 行くよって決めといても本当はいやだ	
ウの人に会うわ	'uno hitoni 'ikjouwa	「[awowa]ということ」。
会いたい	'ikjouritakja	
会いに行こう	'ikjouriR 'ikou	
窓を板で覆うわ	madou 'itade haricukerowa	
覆いたい	haketakja	
覆いに行こう	hakei 'ikogoniR te	
私は今日はもう帰るわ	'ara hara keiwa keRrowa	
あれは昨日はまだ無かった	kineiwa mada nakaQta	
小島へ行こう	kozima'e 'ikogoniR	イー格でなく /e/, /qeR/ が出ることがある。
浜へ行こう	hameR 'ikogoniR	
庭 (ニャー) へ行こう	njager 'ikogoniR	
港へ行こう	minato	
角へ行こう	kadei 'ikogoniR	
外へ行こう	sotei 'ikogoniR	
三根へ行こう	micunei 'ikogoniR	
店へ行こう	misei 'ikogoniR	
上へ行こう	weRgeR 'ikogoniR	
寝に行こう	nei 'ikogoniR	
宇津木へ行こう		聞き間違いで 'aQciR 'ikogoniR が出た。

海へ行こう	'umiR derogoniR	
見に行こう	mabariR 'ikogoniR	mabaru は miru と同義語。使い分けは不詳。
中国へ行こう	cjuRgoku'e 'ikogoniR	
砂漠へ行こう		
ウクへ行こう	'ukiR 'ikogoniR	
伊豆へ行こう		
会津へ行こう		
大津へ行こう		
高松へ行こう		
イギリスへ行こう		
フランスへ行こう		
ドイツへ行こう		
スイスへ行こう		
昨日へ帰ろう	kinei'i modorogoniR	
明日 (アス) へ行こう		
前へ行こう	saQkateR 'ikogoniR	
台所へ行こう	『八丈実記』記載語に対応する/cjoudeR/は台所でなく、「お客が来たり子供と離れて話したりする部屋」。	
大神宮へ行こう		
九州へ行こう	kjuRsjuR	ここから「へ行こう」の部分に回答ナシ。
宇宙へ行こう	'ucjuR	
中学校へ行こう	cjuRgaQkou	
高校へ行こう	koukou	
漁へ行こう	rjou	
図書館へ行こう	tosjokaN	
交番へ行こう	koubaN	keisacu, cjuRzai とも。
軍へ行こう	quN	
これをカノーへ乗せよう	kanoR	
沢へ行こう	sawa	地名に見られるとか。「cuiteru[cuyteru]」。
川へ行こう		
湧き水	wakimizu	wakimizu 以外の複合名詞は存在しない様子。
落ちる水	'oteru mizu	nukidare (軒端(nukiba)から垂れる) と 'amamuri (雨漏り) が例に挙げた。
溜まる水	tamaru mizu	「ike にある水」。
流れ水	naqare mizu	naqaremezu という発音が 1 回だけ聞かれた。
井戸へ行こう	'judo, 'judei 'ikogoniR	
水汲場へ行こう		「水道 suidou[suydou]」という単語が聞かれた。
水神様へ行こう	mizugamisama (水の神), suiziN[suyzin] (海の神)	
湧き水へ行こう	発話; dero mizuno tokoro'e 'ikogoniR 意味; 出る水の所へ行こうよ 備考; miziR は聞いたことがないそうである。	
これをマサ爺へ渡そう		
腑ギーへ渡そう		
篩 (フリー) へ乗せよう	huriR	
焼畑 (コワレイ) へ行こう		
畑 (サテイ) へ行こう	hatake	
校庭へ行こう		
言葉を伝えた	kotoboR cukouwa	
皿を洗った	saroR 'aroRowa	
名を聞いた	nameR'jo kikara	

卵を割った	tamagou cubiRtara	「卵を潰した」。
物を壊した	monou warara	「物を割った」。
子を産んだ	kou neRtara	「子をなした」。
みみずを踏んだ	memezu, humu	
水をすすった	mizuR nomara	
湯を沸かした	'juR wakeRtara	
右目を瞑った	manakou cuburara	「眼を瞑った」。
酒を飲んだ	sakei nomara	
手を振った	tei huQta	
話を聞いた	hanasjo kikara	
飯を食べた	mesjo kuwara[kuwara]	偶に無声化した[kuxara]が聞こえた。
標準語[kuwa]に対応する ka (桑～)・ga (～鉾) はこのような音声を経て成立したと推測される。		
詩を詠んだ		
鼻血を出した	hanaziga detara	
恥をかいた	hazjo kakara	
字を書いた	zi'o kakara	
海の幸を食べた	'uminosaci'o kuwara	
土を掘った	cicjo horara	
血をぬぐった	cjo nogorara	nogowara でなく何故かこう聞こえた。
花火を見た	hanabjo mitara	
海を渡った	'umjo watarara	
木を伐った	kjo kirara	
学生を見た	gakusei'o mitara	
姉 (アネイ) を呼んだ	'anei'o 'joNda	[anei]だが分けて発音してもらおうと[ane ?i]だった。
例を挙げた		
マサ爺を呼んだ	'josi'oziR	ヨシオさんをまだ若い時からこう呼んだ。自分より年配の男性をこのように呼ぶことがある。
餅を食べた	mociR'jo kuwara	
椎を伐った	siR'o kiQta	
胡坐 (アツケー) をかいた	脛は'aQkeR で胡坐は'agura だそうだ。	
位牌を立てた	'juheR	
前を見た	saQkatoR mitara	
危険球を投げた		
焼酎を飲んだ	sjoucjuR	sakei[saqei] noNdara とも。
銃を撃った	teQpou'o 'uQta	
中学校を出た	cjuRgaQkou'o detara	
父 (トタウ) を呼んだ	totou	
量を計った	mekatoR hakaQta	
数千万を稼いだ	kaseQde	
警官を呼んだ	cjuRzai, keisacu	
本を読んだ	hoN'jo 'jomara	
カノーを漕いだ	kanoR'jo kogara	
母 (カコー) を呼んだ		tete'o'ja (父親) という語があるそう。
母 (ホー) を呼んだ	hoR	昔の人が母親をこう呼んだそう。
マッチがあるわ	maQcino 'arowa	
マッチを使って火をつけてくれ	maQcjo cukaQte hi'o musicuketara	
マッチを使うわ	maQcjo cukouwa	
注意があるわ	cjuR'i'o surukoto	
注意をしてくれ		

なおも注意をするわ	mada cjuR'i sitara, nou cjuR'i sitara	
早く (モーミン)		
鰹釣りへ行っ		
鰹 (かつお) を釣ろう	katou[katau, -tau, -təu]	「今は kacuR だが俺らの婆さんの時代は katou」。古い世代の/au/[əu]が反映か。音声揺れたのは古い世代の発音を思い出していた為であろう。
おとなしく (やをら) 座っている	'joura 'itare	
もう随分と長い時間がたった	haja heitei no zikaNga, nagakja, zeibu	
椎 (の実) を少し (コシ・チイト) 食べるわ	siRnomjo ciRto kuRwa, kosi	
餅を少し食べるわ	mociR'o ciRto kuRwa	
風が有るわ	nareRkazega 'arowa	
扇風機を買わせるわ	seNpuRki'o kawaseruwa	
団扇で扇れるわ	'uciwade 'a'orowa[aworowa]	(人), [aworerowa] (自分を)
青い海が見えるわ	'a'oke 'umiga meiorwa	[awoqe]となる。
海が青いわ	'umiga 'a'okja	
有る物を使うわ	'aru moNde rjouri'o koseRrowa	
船が有るわ		
父 (ちち) と母 (はは) の顔を思い出した	cjaN (父), 'oQkaR (母、これらは話者が子供の時分の言い方), cura (顔), 'omeidasowa	
トワリ	towari	「女を盗られたこと」
フタハライトコ	hutahara'itoko	'itoko という語もある。
クツカワシ	kucukoRsi	青ヶ島には1種類のみ、鳴声も「クツコーシ」。
キービヤシ	kuibi'jasi[kuybijaʃi]	kuQcigiribi'jasi とも。「黒くて細くて小さい。啞えといてケツで刺し、刺されたら非常に痛い」。語根維持により kiR への変化が妨げられたようだ。
デーチキャ	deRcikja	
メーレ	meRre	ここで kireRninaru (嫌いになる) という語が出現。
シヤレ	sjare	「どけ」。
マウニ	mou 'iQpaida	
オジャリヤローカ	'ozjari'jaroRka	「いらっしやいましたか」。
ヒサメル	hiQcamero, katazukero	「片付ける」。音声は[xissamero]。促音は短い。
ベナル	benaru	「泣く」。
デヤク	de'jaku	「喋る」。

資料 2. 三根(2009)

調査項目の全体像は上表にだいたい示したので、これ以降の表では回答内容の得られなかった調査項目は原則として省略する（※何らかの備考が得られた場合はその限りではない）。

表 23. 筆者による調査データ；三根(2009)

調査項目	回答内容	備考
鳥打	tori'uci	meiNnaka（見えない）という発言が冒頭に出る。
宇津木	'ucuki	
小島	kozima	
大賀郷	'oukaqou	
三根	micune	
坂下	sakasita	
檉立	kasitate	
中之郷	nakanogou	中之郷を gou、中之郷の人を gounohito という。
末吉	seisi	
坂上	saka'u'e	
大坂	'ousaka	
登龍坂	noborjou	付けるなら touge, saka より mici がよいという。
八丈島	hacizjousima	
青ヶ島	'a'ogasima	「昔は'oNgasi で、青ヶ島の人もそう言った。今の青ヶ島の人にそう言うのと怒りを買う」とか。
永郷	'eigou	'jeigou が期待された。
八重根港	'jeRne	gahama を付けた回答もあった。
相手	'eRte	'eRteni siNnaka と言ったりするそうだ。
間	'eRda	
明日葉	'eRtaba	以下に利用法に関する発話を記す；
「坂上的人是'jaRtaba, 'asitaba と言った。子供の頃は牛の餌であり人間は薩摩汁に少し入れたりする程度。苦く、現在の goma'eR などの調理法も無かったからか。今でこそ'jei'jouzai, kusuri という認識で島じゅうが食べているが touzi は kubukuriN の人は食べなかった」とか。		
絵（図）	'e, 'ezo	'je, 'je(Q)zo が期待された。
えびづる（山ぶどう）	'ebezu	'jebezu が期待された。
エビス様（神様の）	'ebisu, 'ebesu	'jebesu が期待された。
大きい	bouke	
小さい	neQoke, ciNgoke	「ciNgoke は更に小さいものをいう」。
家	'je	
台所	koQkuba	
便所	kaNzjou	
母屋（大きい家）	bou'je	
母屋から離れた家	'iNkjo	
ブナリ	bunari	「台風で響く電線の音・凧に付けた紙の鳴る音」。
ウナリ	'unarowa	「'unarowa もあった」。
ブトワ	bucu	「'ucu は余り kikiNnaka noR」。
箒（ははき）	hoRki	
揚梅（ヨーモ）	'joRmo	
鍬（畑の道具）	tega, cubotega micuga,	「hiratega ともいう」、「小さいのをいう」。 「刃が3つあり、単に tega ともいう」。
桑（蚕の餌）	kabeR, kanoki, kanomi	「haQpa no kotou kabeR」。

神様	kamisama	
龍宮	rjuRguRsama	
仏様	hotokesama	
漁手	rjousju	
入道雲	njuRdougumo	
入梅	njuRbai	doki を付けた回答もあった。
火吹き竹	huRkidake	
背負うわ	sju	
塩	sjo	「海水は'usjo」。
塩辛	sjo'jude	「kaNmo や里芋を塩でゆでたもの」。
場合	baR'i[ba:i]	
ダース	daRsu	
筋	suzi	「筋肉」。
土	cuci, cici	「cicjo hoQte」。「そのときによって両方ある」。 /u/の音声は advanced (前寄り) である。
榎	cucu	「でっかいのが cucu で geNnou, haNmaR は別」。
敷く	suku	「siku もある」。「hutoN'jo sike」。
始める	hazimeru	
自在鉤	zuzeR	
霧		「kuri とは言わない」。「gasuga kakarowa とも」。
岸・崖	mama	「kosi は聞かない」。
皆	miNna~meNna	
1日	cuitaci	
2日	hucuka	
3日	miQka	
4日	'joQka	
5日	'icuka	
6日	muika	
7日	nanoka	
8日	'jouka	
9日	kokonoka	
10日	touka	
11日	zjuR'iciNci	
12日	zjuRni	Nci が省略されたと見られる。
13日	zjuRsaN	ci が省略されたと見られる。
14日	zjuRsi	zjuR'joQka が期待された。
15日	zjuRgo	Nci が省略されたと見られる。
16日	zjuRroku	Nci が省略されたと見られる。
17日	zjuRsici	Nci が省略されたと見られる。
18日	zjuRhaci	Nci が省略されたと見られる。
19日	zjuRku	Nci が省略されたと見られる。
20日	nizjuR, hacuka	
21日	nizjuR'ici	Nci が省略されたと見られる。
22日	nizjuRni	Nci が省略されたと見られる。
23日	nizjuRsaN	Nci が省略されたと見られる。
24日	nizjuRsi	nizjuR'joQka が期待された。
25日	nizjuRgo	Nci が省略されたと見られる。
26日	nizjuRroku	Nci が省略されたと見られる。
27日	nizjuRsici	Nci が省略されたと見られる。
28日	nizjuRhaci	Nci が省略されたと見られる。
29日	nizjuRku	Nci が省略されたと見られる。
30日	saNzjuR	Nci が省略されたと見られる。

31日	saNzjuR'ici	Nci が省略されたと見られる。
1月	'icigacu	
2月	nigacu	
3月	saNgacu	
4月	sigacu	
5月	gogacu	
6月	rokuqacu	
7月	sicigacu	
8月	hacigacu	
9月	kuqacu	
10月	zjuRqacu	
11月	zjuR'icigacu	
12月	zjuRnigacu	
1	'ici	
2	niR	数え上げをしていない時に短母音かどうかは不詳。
3	saN	
4	siR	数え上げをしていない時に短母音かどうかは不詳。
5	goR	数え上げをしていない時に短母音かどうかは不詳。
6	roku	
7	sici	
8	haci	
9	kjuR	数え上げをしていない時に短母音かどうかは不詳。
10	tou	
100	hjaku	
1000	seN	
正月	sjougacu	
朔日	cuitaci	「cuitaci しか聞かない」。
晦日	misoka	「12月の大晦日にしか用いない」。
来年	reRneN ^[d] re:nen	※ ^[d] は青ヶ島(2008a)参照。
来月	raigecu	
再来年	sareRneN ^[sa^dre:nen]	※ ^[d] は青ヶ島(2008a)参照。
再来月	saraigecu	
今日	kei	
昨日	kinei	
一昨日	'ucucei[utsu ^{sei}] (※2 つ目/n/が無声化し直後/c/は口蓋化の無い[s])	調査票では2箇所であいていて1回目に聞いた時は[ototoi, otosei, otosui]が出たが2回目はこれが出た。意味の関連と音の類似を基準に調査項目を纏めた為「一昨日」は調査票の2箇所であくことになった。
明日 (アス・アシタ)	'asu, 'asita	各地で「'asita は標準語的」という声があかれた。
明後日	'asaQte	
その次の日	saNnasaQte	
その次の日	si'asaQte	「 'aNmari cukeRnNakanoR go'asaQte tokawanoR」
朝	'asa, toNmete	
朝飯	'asamesi, 'asake	「'asake はかなり古い言葉」。
昼	hiru	「hiruma は日中のこと」。
昼飯	hjoura	
夕	'juRgata, 'jeR'jou	「'jeR'jou は日暮のこと。俺もあんまり使わな

夕飯	'jouke	い。知らない人が 8 割の古い言葉。
春	haru	
夏	nacu	
秋	'aki	
冬	hu'ju	
暑いわ (ホトウロワ・ シャシャキヤ・ シャシャケロワ)	hotouru, sjasjakja, cjacjakerowa	気候や気温が暑い。 感触や熱線が熱い。「お湯が sjasjakja」。 その動詞化。「'jakekogetara, hotouQte sjasjagirete」。
寒いわ (コゲイロワ)	kogeiru	
アセイ	'asei	「上の人、例えば長男とか」。
アネイ	'anei	「姉さん」。
トトウ	totou	「親父」。
カコー		「kakoR は聞かない。お袋は'oQkaR か hoR」。
兄弟姉妹	'otoRne, kjoudeR	
祖父・爺	ziRsaN	
祖母・婆	baRsaN	
旦那さん	daNna	「daNnoRwa daNna」(旦那をは旦那)。
奥さん	'jome	
(人名) + 爺	kida'ozir, kidazir	「~'ozir は呼ばれると嬉しく、近い人が使う。」「~zir は嫌な感じで、陰口や罵倒に使う。」
(人名) + 兄		「人の名前には'asei も付ける」とは聞かれた。
土地	toci	「'jama は畑のこと」。
財産	zaisaN	
スイビ	suibi	以下の証言から漢語「衰微」であると推測される；
「suibi wa taiheN na koto doRde no. ma 'ouzei kite gocisou site suQto 'ura ga kitoRde (kita 'okagede) suibiN narara Rte. soNsitara Rte 'jo 'imi kano」。		
ブッチャリガネ	buQcjarigane	「生き金・死に金の、死に金のほう」。
稗 (ひえ)	hei	「田んぼの米の中に hei という zaQsou があって粟・稗とは違い食べられない」とか。稗ではない。
蛾 (が・ひひる)	heirume	「蛾も cjoucjo も」。
尻 (へひり)	he	「heQpiri は腰抜け。heiri は聞かない」。
鬘原	heiki sowa	「kabou (かぼう) ということ」。
敷居	sikiR, sikei	「sikei と言う時もある」。
褌 (ふんどし)	huNdousi	
裸足 (はだし)	hadoRsi	「kuniR detemo sugu hiNnukozja」。意味は「東京に出てもすぐ(靴下を)引き脱ぐんだ」。
子供 (はらわた)	haroRta, haroRtagiR	「neQkomegiR (猫), kaNmogir (薩摩芋) とは言わない。giR は人間だけに付ける」。
貧乏	biNbou	
頑丈	gaNzjou	
馬鹿	doNgo, nuke	「nuke は nukesaku ともいい doNgo より軽い」。
白髪	sjaga	
四郎	sjoume	「長男'jarou, 二男 zjoume, 三番 sabou, 【下へ】
四番 sjoume, 五番目 gorou, 六番目 rokuro, sicirou は名前として聞いたことがなく, hacirou はある」。		
白蟻 (しろあり)	sjoRrime	
蟻	'arime	「普通の黒蟻」。
黒蟻 (ヒヤシメ)	hi'jasime	「hi'jasimewa meiNnoR me、小さくて見辛い」。
吸物	suimono, cu'ju	「seimono は聞かない」。
雑炊	zousei, zousui	「塩ぐらいしか入れない真っ白な物を」。

		sjazousei」。
杖	cukuNbou	
かつえるわ (空腹)	'juwakja, haragaheQta	「樫立で kaciRte と言うらしいが kateiru は無い」。
へっつい様 (かまど)	heQcui	「heQcei は言わない」。
教える	'oseiru	
煮える	neiru	
見える	meitara	
覚える	'obeitara	標準語「覚える」と同じ意味。「怯える」じゃない。
燃える	meitara, mo'etara	
吠える	heirowa, heikuruRwa	樫立の調査では hiRkuruR が聞かれた。
呼ぶ	'joboRowa, 'jobara	
貰う	muroRowa	
オケル	'okiru	'okeru が期待された。どこにも確認できなかった。
オコス	'okosu	
オデル	'otetara, buQkoteru	
オトス	buQkotositara	
オレル	'orerowa	
オロス	'orositara	
オデル	'oderu, 'oQkanagarowa	(怖じる・怖がる)。
オドス	'odosu	
ワタル	wataru	
ワタス	watasu	
ケール	keRowa	(帰る)。
ケース	keRsowa	(返す)。
ブッカタス	buQkatasu	(勢いよく・沢山・片付ける)。
ブッコトス	buQkotosu	(勢いよく・沢山・大きな物を、落とす)。
ブッチャル	buQcjaru	(捨てる)。「ヒッコトスは使わない」。
ブツオベイル	buQcobeiru	(驚く)。「biQkurisitara, buQcobakasowa」とも。
スール	'oQcuRowa	(味噌汁などを飲む)。
ヒッチュール	hiQcuRowa	(酒などを呑む)。「sakei」(酒を)とか。
ヒッカタス	hiQkatasu	(ちょっとだけ・少ない物を、片付ける)。
エーミミコワ	'eRmu	(歩き回る)。「歩く」が出た。
ヘーミコワ	heRmiQte	(這い回る)。「うろちょろ這い歩く」とか。
マキミコワ	makimikowa	(飛び回る)。「そこをぐるぐるまっまっ」とか。「makowa, makiderowa」も確認された。
ヒンマコワ	hiNmakowa	(サッと飛び立つ)。鳥でも蛾でもいいかと聞くと、「まず羽があるものはひんまく」とか。
ペイテ	peirowa	(雨に濡れて)
ウェイテ	weiru	「ものが生えたこと。weitara, detara」とか。
デクロー	dekurowa, kurowa	(やって来る・できる)。「物ができた、あっちから来ることもいう」とか。
ダイテ	dekitara, deite	(やって来て)。「こっちゃん来るということ」とか。
伏して	hiRte	
燃して	hjo miRtara, hjo musu	
干して	heita	「干上がろわ」。
話して	haneRte	「biNgjo sitoRga は話す・相手に伝えること」。
ワシテ	wasowa, wasite, weRte	「行く時の話であり、年上の人に使う言葉」。
飲ませて	nomaseru, nomeRte	
壊して	buQkousite	

通して	tousite, tousu	
回して	moRsite	
入れて	'etara	'jete が期待された。
くれて	ketara	
痒がる	keRgarowa	
シンナカ	siNnaka	(しないよ)。
シンノーダラ	siNnoRdara	(ずっとしないよ・しないことだよ)。
ケンナカ	keNnaka	話者による発音は無いが音形に同意が得られた。
ケンノーダラ	keNnoRdara	
イキンナカ	'ikiNnaka	話者による発音は無いが音形に同意が得られた。
イキンノーダラ	'ikiNnoRdara	話者による発音は無いが音形に同意が得られた。
私はこれを食べるわ	korei	「kuRwa も kamowa も同じ。今の人は kuRwa」。
私はそれを食べるわ	waR kamozjaR sorei	「sorei kamowa, 'urei(あれを)」とも聞かれた。
だれが食べるか	daga kamoka	
どれを食べるか	dorei kuRkanoR	
私が食べるわ	'aga kamowa	
あなたが食べてくれ	'omiga 'agare	
このようになるわ	kogoN	''ugoN」も聞かれた。「あのよう」の意。
そのようになるわ	sogoN narowa	
ウクへ行こうと言った	'ukiR 'ikogoN te 'jozja, 'ukiR 'ikogoRniR, 'ikogoRN	「これは人を誘って言う言葉」だそう。 「dousiN 'ikouzjaR (一緒に行こう)」とも。 他に「tokei (とこへ)」という語も聞かれた。
マゴシ・マゴニー・マゴニーテ	maguN, magoN (※「両者同じ意味」。 筆者が推測するに、これは maN (今) と同源か。)	「本音というか何というか、masaka とか色々。masaka の意味がどうやら標準語と違うらしく、広辞苑曰く、万葉集では「目の前・現在・現実」、忠孝永代記では「差し迫っていること・緊急」、南総里見八犬伝では「まさしく・本当に」。
上記の項目について幾つかの例文が得られたので意味の解釈と共に記す； 発話；maguN ('aNno) 'josowa, magoN 'ikogoN, maguN 'ikogoN, 意味；やっぱり(～)よすわ、今すぐ行こうよ、今すぐ行こうよ、 発話；hara 'ikitaku naka'edoR ('adani)ga 'joboRroRte 'adaN sikatanasini 'ikoRzjaR, 意味；もう行きたく無かったけど(～)が誘ったのでとにかく仕方なしに行ったんだ。 発話；maguN 'uiga 'joboRroRte 'adaN 'ikiNnoRwakemo 'ikiNnakanoR, 意味；実際あれが誘ったのだからとにかく行かないわけにも行かないな。 発話；maguN 'ikitakunakaraido 'uNga 'joboRroRte 'ikara. 意味；本当は行きたくなかったけどお前が誘ったので行ったよ。 他に hiQkatamaQte (緊張して), tamakete (びっくりして), cuNbou (豊)などの語も聞かれた。		
離島 (※調査票には無いが特別に項目を立てた。録音の1:09:51。青ヶ島(2008a)の[r]についても見よ。)	ritou ³ ritou] (※ri が高く後は低いというイントネーション。[r]は摩擦音化した[r]を表し単一の子音である。例文を以下に記す；)	[³ ri]は[³ ji] (e.g. 「恥/hazi/[χa ³ ji]」「字/zi/[d ³ ji]」)と音声異なる。[³ r]の調音点は[³]に比べて非常に後部にあり「古い/hurui/[xuru:]」「らしい/rasiR/[rafi:]」の[r]と調音点が一致する。ラ行始まりの単語がラ行始まりで記録 (e.g. 「流人/zuniN/」) されてきたが、実は/r[³ r]だった可能性が高い。
「'ousimasenseiga 'i'unja ritoude 'icibaN hurui rasiR'jo」(大島先生が言うには離島で一番古いらしいよ)。		
ウの人に会うわ	'uno hitoni 'ikjouwa	「会いたいのは'ikeRtakja」。
窓を板で覆うわ	'amadou bucicukeNnoRto site	(雨戸をぶちつけようとして)
私は今日はもう帰るわ	haR keRrowa keiwa	
あれは昨日はまだ無かった	kineiwa nakarara	

小島へ行こう	kozimageR 'ikouzjaR	イー格でなく /e/, /geR/, /sjaN/ が出ることがある。
浜へ行こう	hameR 'ikogoN	「hamageR 'ikogoN」とも。
庭 (ニャー) へ行こう	njaRgeR derogoN	
港へ行こう	minatogeR 'ikogoN	
角へ行こう	kadogeR 'ikouzjaR	
外へ行こう	sotei, sotogeR	
三根へ帰ろう	micuneger keRrogoN	「micunei 'ikouzjaR」とも。
店へ行こう	mise'jager 'ikouzjaR	「店屋でゴメンクダサイは meRrarai」とも。
上へ行こう	weRgeR[weice:]	[wei]という音声は音環境[c]に同化したか。 「weRsjaN」とも。単独形は「weR」。
寝に行こう	nerouzjaR	
宇津木へ行こう	'ucukiR 'ikouzjaR	
海へ行こう	'umiR 'ikogoN	
見に行こう	mabariR 'ikogoN	mabaru は miru と同義語。使い分けは不詳。
中国へ行こう	cjuRgoku'e 'ikouzjaR	
砂漠へ行こう	sabakugeR 'ikogoN	
ウクへ行こう	'ukiR 'ikogoN	
伊豆へ行こう	'izugeR 'ikouzjaR	
前へ行こう	meRgeR	
台所へ行こう	発話; 'ou bouziR bouzjo suro uN bouziR suru te 'jowa 意味; おうボウジー、ボウジョする、うん。ボウジーすると言うのは 発話; monou cukuru tokou bouzi bouzi 意味; 物を作るところを房事、房事。 発話; koQkubade bouzjo surowa monou 'uno nitaki bouzi 意味; 台所でボウジョするよ、物を、あの、煮炊き、房事。 ※上記の「ボウジー」はヨ格における/s, c, z/直後の特殊な屈折形の例。 ※「房事」の「房」は「閨房」でなく「厨房」の「房」と想像される。	
九州へ行こう	kjuRsjuRgeR 'ikouzjaR	「kjuRsjuR'iR」とも。
中学校へ行こう	cjuRgaQkougeR 'ikouzjaR	
図書館へ行こう	hoN'jager 'ikogoN	誘導だが「hoN'ja'iR」が聞かれた。可能らしい。「寄り道する時は hoN'jasjaN 'jorouzjaR」。
これをカノーへ乗せよう	kanoR, kanuR	
沢へ行こう	soR, soRma	
川へ行こう	koR, koRda	「teNboRgoR」「koRdaga kiretara」が聞かれた
湧き水	wakimizu	wakimizu 以外の複合名詞は存在しない様子。
落ちる水	'oteru mizu	「weRkara[weiqara] potapota 'oteru」とか。 [wei]という音声は音環境[q]に同化したか。
溜まる水	'ike	「流れ水は koR」。
井戸へ行こう	'ido	「mizukumiba は無い」。
水神様へ行こう	mizuqamisama, suiziNgamisama	
湧き水へ行こう	発話; wakimizugeR miR 'ikogoN, wakimizuR miR 'ikogoN 意味; 湧き水へ見に行こうよ、湧き水を見に行こうよ	
篩 (フリー) へ乗せよう	huriR	(「金網や竹製で、杓をふるったりする。」)
焼畑 (コワレイ) へ行こう	kowarei	(「藪になっている所。」)
畑 (サテイ) へ行こう	satei	「畑」。
言葉を伝えた	kotoboR cukoRowa	他に「naqasi」という単語も聞かれた。
皿を洗った	saroR 'arouwa	「cjawaN'jo 'arouwa」とも。
名を聞いた	nameR'jo kikowa	
卵を割った	tamaqou waQte miro	「buQejakasite miro」とも。
物を壊した	monou buQkousita	「kouretara」も聞かれた。
子を産んだ	kou neRtoRga	「子をなしたが」。
みみずを踏んだ	memezume	「huNzubiRtara, huNzubusitara」とも。
水をすすった	mizuR nomara	

湯を沸かした	sjɑ'juR nomara	「白湯を飲んだ」。
右目を瞑った	mei cubiRtara	「manakou katame cuburara」も聞かれた。
酒を飲んだ	sakei hiQcuRrara	
手を振った	tei hurara	
話を聞いた	hanasjo kikowa	1:07:36 頃に「hanasiR」が出現する；
<p>'orega 'joNzjuRdainotokini sjabeQte (ええ、ええ) tamakete biQkurisite ka'eQta 'jo (ああそうですか) 「'oQtakuwa mezurasi'i hitodesune」 Rte (ああ 40 台なのに、) 'uN (よく喋る) 「'edozidaino hanasiR perapera sjaberunowa 'imadoki naidesu」 RcjuQte (笑い声) ※上記の「ハナシー」はヨ格における/s, c, z/直後の特殊な屈折形の例。ちなみに上記は大島先生のこと。</p>		
飯を食べた	mesjo kamara	
鼻血を出した	hanazjo nogouwa	
恥をかいた	hazjo kakasetara	「cugegucjo site hazjo kakeRtara」とも。
字を書いた	zjo kakara	
土を掘った (※音声はこう； /cuci/[tsuɕi] /cici/[ɕiɕi] なっている。思うに、 本来/cuci/であって [ɕiɕi]は音声実現の 一つであったらう)	<p>発話；cuciR horowa hozirowa tokane 'uN 意味；ツチー掘るよ、ほじるよとかね、うん。 発話；cucjo hozirozja 意味；【ここで調査者がツチョと言ったのに呼応して→】 ツチョほじるんだ。 発話；ciciR toka cuci 'uN cuciR horara toka ciciR horara 意味；「チチー」とか「ツチ」、うん。「ツチー」掘ったとか「チチー」掘った 発話；tokasa 'uN ciciR mo cuciR temo doQcidemo 'uN 意味；とかさ、うん。「チチー」も「ツチー」もどっちでも、うん。 ※上記の「ツチー」はヨ格における/s, c, z/直後の特殊な屈折形の例。</p>	
血をぬぐった	<p>発話；ci ga dete dete nogouwa tokasa ci ga dete dete hukara tokano 意味；血が出て出てぬぐうよとかさ。血が出て出て拭いたとかね。 発話；ciR wazawaza nogouwa ci ga dete nogoRrara toka 意味；チーわざわざぬぐうよ。血が出てぬぐったとか。 ※上記の「チー」はヨ格における/s, c, z/直後の特殊な屈折形の例。</p>	
花火を見た	hanabjo mabarara	
海を渡った	'umjo mabarara	
木を伐った	kjo kirara	
学生を見た	gakusei'jo mabarara	
姉(アネイ)を呼んだ	'joboRrara	
マサ翁を呼んだ	masoRzjo 'joboRrara	「マサおじを呼んだ」。
餅を食べた	mociR'jo hiroRrara	「mocjo kamara」とも。
椎を伐った	siRnokjo kirowa	
胡坐(アツケー)をかいた		脛は'aQkeR で胡坐は「'azukeR'jo kakowa」だそうだ。
位牌を立てた	'juheR'jo tateta	
前を見た	meR'jo mabarara	
焼酎を飲んだ	sjoucuR'jo hiQcuRrara	
銃を撃った	teQpou'jo 'ucu	
警官を呼んだ	zjuNsi'o 'joboRrara	
本を読んだ	hoN'jo 'jomu	「'ei mitara, 'ezou mabarara」が聞かれた。
母(ホー)を呼んだ	'oQkaR'jo 'joboRte	「hoR」も聞かれた。
マッチがあるわ	maQciga 'arowa	
マッチを使って火をつけてくれ		maQciR cukaQte hjo muse
マッチを使うわ	maQcjo cukouwa	
<p>上記の3項目について話者の発話の全体像を意味の解釈と共に記す； 発話；maQci ga 'arowa, maQciR cukaQte hjo muse, maQci to maQcjo to rjouhou cuka'u 'uN 意味；マッチがあるよ、マッチー使って火を燃せ、「マッチ(ー)」と「マッチョ」と両方使う、うん。 発話；maQciR ni maQcjou temo 'uN,</p>		

意味 ; 「マッシー」【の代り】に「マッショ」を【使っ】ても【いい】、うん。 発話 ; maQcjo cukouwa maQcjo cukeR toka, maQci de hjo muse, maQci de hjo cukero 意味 ; マッショ使うよ、マッショ使えとか、マッチで火を燃せ、マッチで火を点ける。 ※上記の「マッシー」はヨ格における/s, c, z直後の特殊な屈折形の例。		
注意があるわ	cjuR'i'ga 'arowa'joR	
注意をしてくれ	cjuR'i site kero	ヨ格は「cjuR'i'jo か cjuR'i'o がいい」そうだ。
なおも注意をするわ	nou cjuR'i sitemo	「また」という意味で nou。
早く (モーミン)	moRmini	
鯉釣りへ行って	kacuRcuri	「鯉 (かつお) は kacuR」。
おとなしく (やをら) 座っている	'jouraN se	
もう随分と長い時間がたった	zeibu, zeibuN, naNgakja, nagasugirowa, heiteiburidanoR	
椎 (の実) を少し (コシ・チイト) 食べるわ	siRnomjo kamowa, siRnomjo hireite hiroRriRte kamara, kosi kamara, ciRto kamara	
風が有るわ	kazega hukowa, kazega 'arozja, keiwa mada hukukanoR hoide 'osamarukanoR	
扇風機を買わせるわ	seNpuRkjo kawasererowa toka ka'owa[kawowa] toka	
団扇で扇れるわ	'a'orowa[aworowa] (他の人が扇る、他動), seNpuRkide 'a'orerowa[aworerowa] (自分が扇られる、自動)	
青い海が見えるわ	'a'o'i[awoi] 'umi	下記の「青きや」「青け」も[awo]。
海が青いわ	発話 ; 'a'okjanoR simano 'umiwa, basukuriN'jo 'etokoRte 'a'okedara 意味 ; 青いなあ島の海は、…バスクリンを入れといたんで青いんだ(笑)。	
有る物を使うわ	'aro monou cukeRte	
船が有るわ	hunega 'arowa	
父 (ちち) と母 (はは) の顔を思い出した	cici'o'ja (父親), totou (父), 'oQka (母), hoR (母)	
フタハライトコ	'ciga'itoko (「はとことも言う」)、「hutahara'itoko」、「mihara, 'johara」。 「だいたいフタハラまでが'o'jako (親戚)」だそうだ。	
クツカワシ	kucukoRsimega ganaQte ganaQte 'jakamasikjanoR	
キービヤシ	kiRbi'ja, kiRbi'jasi (※si は付けないのが普通だが付けて言うことも無いわけではないとか。)	「刺されると kabume (蚊) に噛まれたように赤腫れに。keRgaQte keRQgate 大変で magurerowa (混乱するの意か)。hoNtoni zeNbu nuQte (脱) sjaQpedaka (素っ裸) nimo narowa」。 「kiRbi'ja ga kuR (食)」とも聞かれた。 「si を付けることもあるが通常は kiRbi'ja」。
デーチキャ	deRcikja	
メーレ	meRre	
シヤレ	sjare	「どけ」。「どかすは sjasu」だそう。 「warawasero sjare (洒落)」とは別。
モウニ	moroN 'iQpeR	「本当にいっぱい」。「いっぱいは siQkai とも」。
オジャリヤローカ	'ozjari'jaroRka	「いらっしゃいましたか」。
ヒサメル	sameru	「片付ける」。
ベナル	benaru	「泣く」。「naku ともいう」。
デヤク	de'jaku	「(悪口に限らず何でも) 話す」。 「keiwa[keija] de'jaQte de'jaQte」。

資料 3. 末吉(2009)

末吉(2009)のデータは沖山尚昭さんのデータを基礎としつつ、時折述べられる服部直子さんの意見とのあいだで重要な違いがあれば、その違いが分かるように記す。

表 24. 筆者による調査データ；末吉(2009)

調査項目	回答内容	備考
鳥打	tori'uci	
宇津木	'uzuki	濁音が出た。
小島	kozima	
八丈小島	hacizjoRkozima	
大賀郷	'oRkagoR	
三根	micune	
坂下	sakasita	
檜立	kasitate	
中之郷	nakanogoR	
末吉	su'e'josi	
坂上	saka'u'e	
大坂	'oRsaka	
登龍坂	noborjuR	「zaka は付けない」。
八丈島	hacizjoRsima	
青ヶ島	'a'ogasima	「坂下か中之郷では'oNgasima」。
永郷	'jeRgoR	
八重根港	'ja'ene	「koR は付けない」。「'jeRne も聞かない」。
相手	'eRte	
間	'aida	「'eRda は聞かない」。
明日葉	'eRtaba	
絵 (図)	'je	
えびづる (山ぶどう)	'jebizu	'jebezu が期待された。
エビス様 (神様の)	'jebesu	
大きい	boRkja	
小さい	neQkokja, ciNgokja	「芋の小さいのを ciNgokja」。
家	'je	
台所	koQkuba	
便所	kaNzjoR	
母屋 (大きい家)	boR'je	
母屋から離れた家	hanare, ko'ja	「小屋は物置のこと。住んでる家は離れ」。
ブナリ	bunari	「風に付いた紙の鳴る音」。
ウナリ	'unari	
ブトワ	butowa	「殴るということ。'utowa は聞かない」。
箒 (ははき)	hoRki	haRki が期待された。 「njaRboRki, njaR'iR dero, njatorime」。
揚梅 (ヤーモ)	'jaRmo	「食べる実」。
鍬 (畑の道具)	tega, micuga	「テガは hiratega とも」。
桑 (蚕の餌)	kabeR, kanoki, kanomi	「順に葉、木、実」。
神様	kamisama	
龍宮	rjuRguR	
仏様	hotokesama	
漁手	rjoRsju (rjoRsi も可)	「seNdoR, kikaNsju, 'uNteNsju」。
入道雲	njuRdoRgumo	

入梅	njuRbai, cu'ju'iri	
火吹き竹	hjuRkidake	「かまどで薪を燃す時にヒューヒュー吹く」。
背負うわ	sjoRwa, sjo'u, sjo'e	
塩	sjo, sjoR moQte ko	
塩辛	sjo'ude~sjoRde	「塩茹で。里芋を皮ごと塩水で'juderu」。
場合	ba'ai[ba?ai]	
ダース	daRsu	
筋	suzi	「筋肉・血管」。「suziga hiNnobite, 'jamete」。
土	cuci	[u]は前寄り (advanced)。後で'cicjo」が出る。
植	cuci	[u]は前寄り (advanced)。「kanazuci」。
敷く	suku	「siku, hiku」とも。
始める	hazimeru	
自在鉤	zuzeR	「いろいろの上にごら下げてやかんを引っ掛ける」。
霧	kiri	「gasu」とも。
岸・崖	kosi	「崖っぶちのこと。地名にも nakagosi とか」。
皆	miNna~meNna	
1日	'iciNci	あとで'cuitaci Rte 'iciNcimeno koto」。
2日	hucuka	
3日	miQka	
4日	'joQka	
5日	'icuka	
6日	muika	
7日	nanuka	
8日	'joRka	
9日	kokonoka	
10日	toRka	
11日	zjuR'ici	Nci が省略されたと見られる。
12日	zjuRni	Nci が省略されたと見られる。
13日	zjuRsaN	ci が省略されたと見られる。
14日	zjuRsi	zjuR'joQka が期待された。
15日	zjuRgo	Nci が省略されたと見られる。
16日	zjuRrokuNci	
17日	zjuRsiciNci	
18日	zjuRhaciNci	
19日	zjuRkuNci	
20日	hacuka	
21日	nizjuR'iciNci	
22日	nizjuRniNci	
23日	nizjuRsaNci	
24日	nizjuR'joQka	
25日	nizjuRgo	Nci が省略されたと見られる。
26日	nizjuRrokuNci	
27日	nizjuRsiciNci	
28日	nizjuRhaciNci	
29日	nizjuRkuNci	
30日	saNzjuR'iciNci	
31日	saNzjuR'iciNci	
1月	'icigacu	
2月	niqacu	
3月	saNgacu	
4月	sigacu	
5月	gogacu	
6月	rokugacu	

7月	sicigacu	si は [i] と [çi] の中間の音声が聞こえた。
8月	hacigacu	
9月	kugacu	
10月	zjuRgacu	
11月	zjuR'icigacu	
12月	zjuRnigacu	
1	'ici	
2	niR	数え上げをしていない時に短母音かどうか不詳。
3	saN	
4	siR	数え上げをしていない時に短母音かどうか不詳。
5	goR	数え上げをしていない時に短母音かどうか不詳。
6	roku	
7	nana	
8	haci	
9	kuR	数え上げをしていない時に短母音かどうか不詳。
10	toR	
100	hjaku	
1000	seN	
正月	sjoRgacu	
朔日	cuitaci	「cuitaci しか聞かない」。
晦日	misoka	「大晦日」。
来年	deRneN	
来月	raigecu	
再来年	sadeRneN	
再来月	saraigecu	
今日	kiR	
昨日	kiniR	あとで「kinjoR」という単語も聞かれた。
一昨日	'uciciR	「ototoi」とも聞かれた。
明日 (アス・アシタ)	'asu	「'asita は標準語的」。
明後日	'asaQte	
その次の日	saNgasaQte	
その次の日	sigasaQte	更に「gogasaQte」。
朝	'asa, toNmete	
朝飯	'asake	「今は'asamesi」。
昼	hiru	「日中を hiru, hiruma」。
昼飯	hjoRra	
夕	'juRgata, baNgata	
夕飯	'joRmesi, 'joRke	「gohaN が混じれば'joRmesi」。 「'ozi'ja, 'imosiru, mugizoRsiR なら'joRke」。
春	haru	
夏	nacu	
秋	'aki	
冬	hu'ju	
暑いわ (ホトローワ・シャシャキヤ・シャシャケロワ)	hotoRrowa, sjasjakja, sjasjakerowa	気候や気温が暑い。「これ脱こわ (体感気温)」。 感触や熱線が熱い。 その動詞化。「アチチ! (接触温度)」。
寒いわ (コギーロワ)	kogiRrowa	「samui は最近の言葉。'acukja は古い言葉」。
アシー	'asiR, 'ani	「順に、お兄さん、目上の人」。
アニー	'iNne, 'aNdo	「順に、約5歳上、約10歳上のお姉さん」。
トトー	totoR	「お爺さん」。

カカー	kakaR, 'uNma, baNma	「お婆さん」。
兄弟姉妹	kjoRdeR	
祖父・爺	ziRcjaN	
祖母・婆	baRcjaN	
奥さん	'jome	
(人名) + 爺	自分の親父ぐらいの人は他人でも 'ozi, 'oba を付ける。	
(人名) + 兄	自分より 1 つ 2 つ上の方は他人でも 'ani を付ける。 直子さんは尚昭さんに「na'o'akenisaN[naoagenisan]」と呼びかけている。	
土地・財産	toci, zaisaN	「畑も山林も 'iQsjoquQtade 'jama という」。
ブッチャリガネ	buQcjariqane	「あてにもならない儲かりもしない返らない金」。
蛾 (が・ひひる)	hiRrume	「血を吸う蛭のこと。蝶も蛾も ga」。 「hiRrumeni hiQkamarete」。
屁 (へひり)	hiRri	「hiRrjo hiQte」。
鼻屑	hiRki	
敷居	sikiR	「kono sikiR'jo mataguna」。
禪 (ふんどし)	huNdosi	
裸足 (はだし)	hadaRsi	「hadaRside sokoR mikuna'joR」。
子供 (はらわた)	haraRta, harawata	「腸」。「ku'jasikute sjakuN saRQte」。 「haraRta hoNto hiNnigireroRde sjakuni sawarowa, hiQcigirero, ciNnigirero hodo」。
貧乏	biNboR	
頑丈	gaNzjoR	「gaNzjoRni buQcukero'joR」。
馬鹿	doNgo, nuke	「気軽な順に nuke, doNgo, baka'jaroR」。
白髪	sjaga	
四郎	siroR	
白蟻 (しろあり)	sjarime	me の用法に関して説明があったので以下に記す； 生物だけでなく可愛い人間にも me を付ける。直子なら ko を取って na'ome となる。男子にも使う。悪く言う時にも doroboRme などと me を付ける。白蟻は 'arime には含まれないがヒヤシメは含む。
蟻	'arime	
黒蟻 (ヒヤシメ)	hi'jasime	「これも黒蟻だが、こちらのほうが痛い」。 尚昭さん曰く「あれは何と言ったかなー、kuicuite、小さい蟻で。クイビヤシを思い出せないでいる様子」。
吸物	suimono	
雑炊	zoRsiR	「mugizoRsiR」。
杖	cu'e	「cu'iR moQte ko」。
水道	suidoR	
かつえるわ (空腹)	'juwakute, haragaheQte	「kuRhuku. 檜立では kaciRrowa」。
へっつい様 (かまど)	heQcui	
「wagaino heQcuiwa zjoRtoRdare toka, 'ai'jai kokono kamadoga deRcisaR tokane」。		
教える	'osiRru	
煮える	niRru, niRtara	「niRtaRkaR」とも聞かれた。
見える	miRru, miRroka	「miRtaRkaR」とも聞かれた。
覚える	'obiRtaRkaR	標準語「覚える」と同じ意味。「怯える」じゃない。
燃える	miRroka	「miRtaRrukaR」とも聞かれた。
吠える	hiRkuruR, hiRkuruQte	「大声で怒る」。「'jakamasisaR」とも聞かれた。
呼ぶ	'jobaRre	
オケル	'okiro	'okeru が期待された。どこにも確認できなかった。
オコス	'okosu, 'okosite	
オテル	'ociru, buQkociru	
オトス	'otosu	「'osite 'oQpecite buQkotosu kotoR 'otosu」。
オレル	'oriru	

オロス	'orosu	
オデル	'oderu, 'odete	(怖じる・怖がる)。
オドス	'odosu	
ワタル	wataru	
ワタス	watasu	
ケール	keRru	(帰る)。「'ara hara keRroNte 'joR」。
ケース	keRsu, keRsowa	(返す)。「koriR keRsitokoNte 'joR」。
ブッカタス	buQkatasu, katase	(勢いよく・沢山、片付ける)。(例文を以下に記す)。
発話；'juRna 'juRnani 'jaranaide；意味；タなタなにやらないで(少しずつやらずに一気にやる)		
ブッコトス	buQkotosu	(勢いよく・沢山・大きな物を、落とす)。
ブッチャル	buQcjaru	(捨てる)。「hiQkotosu という語は使わない」。
ブツオビール	buQcobiRru	(驚く)。「haR(baR も可) buQcobiRtara」。
スール	suRru, suRQte miro	(味噌汁などを飲む)。
ヒッチュール	hiQcuRru, hiQcuRQte	(酒などを呑む)。
ヒッカタス	hiQkatasu	(ちよつとだけ・少ない物を、片付ける)。
エーミミコワ	'eRmowa	(歩き回る)。「歩く」が出た。
「歩かないか、を'eRmiNnoRka といい歩けないか、を'eRmeNnoRka という」。aR でなく oR が出た。		
マキミコワ	torimega makimikowa	(飛び回る)。「makimiQte。飛んであつちこつち」
ヒンマコワ	hiNmakowa	(サッと飛び立つ)。「スピードが速い」。
ピーテ	piRte, buNnurete	(雨に濡れて)「雨で piRte」。
デクロワ	dekurowa, deko'joRi	(やって来る・できる)。「来る」。
ディーテ	dekite, dekite'joRi	(やって来て)。「'urega maN dekurowa」。
伏して	husite	
燃して	musite	
干して	hosite	「seNtakumonoR hosite kero」。
話して	hanasite	「hanasite kero'joRi」
ワシテ	wasite, weRte	「weRte tamore'joR は昔の人の言葉」。
飲ませて	nomasete	「nome, noNde tamore, nomasete tamore」。
壊して	buQkorsite	
通して	toRsite	「kokoR toRsite tamore」。
交して	「koQcjaN buNmare, kaware, kawaQte toRre」。回避を kawaru で表す。	
回して	maRsite	
入れて	'jete, sokiR 'jetoke	「koriR sumiNnara 'jete tamore」。
くれて	kete, kero	
痒がる	keRgaru	
シンナカ	siNnaka	(しないよ)。「これはもうやらない」。
シンナーダラ	siNnara (ずっとしないよ・しないことだよ)「これはもうやらないんだよ」。	
※尚昭さんは aR という音形を特に否定はしなかった。しかし自発的には「aiNnoRka」などと言う。		
ケンナカ	keNnaka	「これはお前にはやらないよ」
ケンナーダラ	keNnara	「これはくれないだよ」
イキンナカ	kiNnaka	「あれはもう来ない」。
イキンナーダラ	kiNnara	「あれは来ないだろうよ」。
私はこれを食べるわ	'ara koriR kamowa	'ara と書いたが口蓋化は強め。音声の問題か。
私はそれを食べるわ	'arja soriR kamowa	
私はあれを食べるわ	'arja 'uriR kamowa	
だれが食べるか	daga kamoR	
どれを食べるか	doriR kamoR	
私が食べるわ	'aga kamowa	

あなたが食べてくれ	'omeRga tabete tamoRre, ぞんざいな言い方だと kaNde kero	
このようになるわ	kogaN narowa	
そのようになるわ	sogaN narowa	
ウクへ行こうと言った	'ukiR 'ikogaN te 'jaRzjaR (※'ukiR も'uku'e も使う)	
マガン・マガーニ・マガニーテ	※尚昭さん「『今』の意だが少し違う、さっき言った事と今思う事が違う時」。 ※直子さん「『待てよ…』と言って少し考えて言う時に使う言葉」。	
<p>発話； magoN sogaN 'jaredo 'arja (kaNgeRtemitaRga) 'ikiNnaka 発話； saQkiwa sogaN 'jaredo magoN 'arja (kaNgeRtemitaRga) 'ikiNnaka 意味； (実際=さっき) そうは言ったけど、(やっぱり=今) 私は (考えてみたが) 行かないよ。 ※上記の2つの位置のどちらか一方に magoN を置く。思うに事実性の強調か。 ※「マガンってのは聞いたことありますか」に対して尚昭さん「magan っては…」と言い、これに対し直子さんが「言ったよ」と、続いて尚昭さんが「magoN っては言うよ」。直子さんは認めたようだ。 ※直子さん「magoN も。maganiR ちゅー時には待てよっていう意味だと思うし。magan ちゅーのは」。この発言に対して尚昭さん「magan っては俺聞いたことない」。ちなみに末吉の中でも長戸路屋敷に近い支配・教養階級 (直子さんの出身) とその他の階級 (尚昭さんの出身) とでは言葉が違っていたらしい。 以上のことから、magan, maganiR, magoN という音形が認められる。magoN は三根寄りの音形だ。</p>		
ウの人に会うわ	'uno hitoni 'a'owa	[aowa]。
会いたい	'uno hitoni 'aitakja	
会いに行こう	'aiNnoRka, 'aini 'ikogaN, 'iQte mirogaN	
窓を板で覆うわ	madoR 'itade hakerogaN, 「『覆う』は標準語に近いのではないか」。	
覆いたい	haketakja, hakete kero	
私は今日はまだ帰るわ	'arja hara kiRwa keRrowa (※hara と harja は同じ。)	
あれは昨日はまだ無かった	'arja kiniRwa mada nakaQta	
小島へ行こう	kozimeR 'ikogaN	イー格でなく /e/ が出ることがある。
浜へ行こう	hameR 'ikogaN	
庭 (ニャー) へ行こう	njaR 'iR derogaN	やや崩れた「njaR'eR derogaN」も聞かれた。
港へ行こう	minato'e 'ikogaN	
角へ行こう	kado'e 'iQtemirogaN	
外へ行こう	sociR derogaN	
三根へ行こう	micuniR 'ikogaN	
店へ行こう	misiR 'ikogaN	
上へ行こう	weNdeR 'ikogaN	
寝に行こう	neni 'ikogaN	
宇津木へ行こう	'uzukiR 'ikogaN	
海へ行こう	'umiR 'iQtemirogaN	
見に行こう	mini 'ikogaN	
中国へ行こう	cjuRgoku'e 'ikogaN	
砂漠へ行こう	sabaku'e 'iQtemirogaN	
ウクへ行こう	'ukiR 'iQtemirogaN	
伊豆へ行こう	'izu'e 'ikogaN	
会津へ行こう	'aizu'e 'iQtemirogaN	
大津へ行こう	'oRcu'e 'ikogaN	
高松へ行こう	takamacu'e 'ikogaN	
イギリスへ行こう	'iqirisu'e 'ikoR	
昨日へ帰ろう	kiniR'e keRrogaN	「kinjoR'e」も出た。
前へ行こう	saQkateR 'ikogaN	「meR'e susume」とも聞かれた。
大神宮へ行こう	daiziNguR'e 'ikoR	「'ikoR」という言葉はこの頃の言葉。

九州へ行こう	kjuRsjuR'e 'ikogaN	「kjuRsjuRhe denakute kjuRsjuR'je dana」。
宇宙へ行こう	'ucjuR'e 'iQtemirogaN	「doRsini というのは一緒にという意味」。
中学校へ行こう	cjuRgaQkoR'e 'ikoR	
高校へ行こう	koRkoR'e 'ikoR	
漁へ行こう	rjoRni derogaN	「'jocuri は rjoR の一種」。
図書館へ行こう	tosjokaN'e 'ikoR	
交番へ行こう	koRbaN'e 'ikoR	
軍へ行こう	guN'e 'ikoR	
これをカノーへ乗せよう		koriR kanoRni noserogaN (※kanuR は余り使わない。)
沢へ行こう	saR'e 'ikoR	
川へ行こう	kaRdeR 'iQtemirogaN	「kaRda, kaRda'e」とも。
湧き水	wakimizu	wakimizu 以外の複合名詞は存在しない様子。
落ちる水	taki	「nagonotaki」。
溜まる水	cucumi	
流れ水	kaRda	
井戸へ行こう		「地名に'judo が付くものがある。普通は'ido だがそもそも井戸が無い」。
水汲み場へ行こう	mizukumiba'e 'ikogaN	
水神様へ行こう	mizugamisama, mizugamisameR 'ikogaN	(※suiziNsama は言わない。)
湧き水へ行こう	wakimizu'e 'ikoR	
マサ翁へ渡そう	masaziR'e watasogaN	
篩 (フリー) へ乗せよう		hurui (※金網が付いてるのが hurui, soriR huru'e)。
焼畑 (コワリー) へ行こう		kowariR'e (※3年使い10-20年野生にし'arakeru=切り拓く。)
畑 (サティ) へ行こう	saciR'e 'ikogaN	「畑のこと。何年も使う所」。
校庭へ行こう	koRteR'e	「koRteR は使わなかった。gaQkoR が普通」。
言葉を伝えた	kotobaR 'osiRtara	
皿を洗った	saraR 'araQta	
名を聞いた	nameR 'jo kikara	ここで (茶が) 「nigakute, nigakja」 が聞かれた。
卵を割った	tamagoR waQta	
物を壊した	monoR buQkoRsita	
子を産んだ	koR nasita	
みみずを踏んだ	memezumiR humara	
水をすすった	mizuR noNda	「mizuR suRQta は聞かない」。
湯を沸かした	'juR wakasitara	
右目を瞑った	miqimiR cuburara	
酒を飲んだ	sakiR nomara	
手を振った	ciR huQtaRowa	
話を聞いた	hanasjo kikara	「hanasiR にはならない」。
飯を食べた	mesjo kaNda	「mesiR にはならない」。
詩を詠んだ	si'o 'jomara	
鼻血を出した	hanazjo dasitara	
恥をかいた	hazjo kaita	
字を書いた	zjo kaita	
海の幸を食べた	'uminosacjo kamara	
土を掘った	cucjo hoQta	直子さん曰く「cicjo horara, cuci, cici'o」とも。 尚昭さん「suzjo hiQkirara」(血管を切った)。
血をぬぐった	cjo nuguQta	
花火を見た	hanabjo mitara	
海を渡った	'umjo watarara	「海岸ぶちを渡って来たという意味だろ」。
木を伐った	kjo kirara	
学生を見た	gakuseR'jo mita	「gakuseR'o」とも。
姉 (アニー) を呼んだ	neRcjaN'jo 'joNda	「'ani は兄貴のほう」。

例を挙げた	reR'jo 'agerebanaR	
マサ爺を呼んだ	masazIR'jo 'jobaRrara	
餅を食べた	mociR'jo kamara	「moci とも」。
椎を伐った	siRnoki'o kiraRzjaN	
胡坐 (アツケー) をかいた	脛は'aQkeR で胡坐は'aguraR kake だそうだ。	
昔はズボンじゃなかった為いろいろの前で	'aQkeR'o 'abuQte 'abuQte 'arega madara mitaini naQte]。	
位牌を立てた	'iheR'o tateta	「hotokesama'o tateta とも」。
前を見た	saQkatar mita	
危険球を投げた	kikeNkjuR'jo nageta	
焼酎を飲んだ	sjoRcjuR'jo nomara	
銃を撃った	teQpoR'jo 'uQta	
中学校を出た	cjuRgaQkoR'jo detara, detaRzjaN	
父 (トト) を呼んだ	'o'jazjo 'jobaRzjaN	「俺らの時には toQcjaN, 'o'jazi, 'oQka」。
量を計った	rjoR'jo hakaraRzjaN	
数千万を稼いだ	suRseNmaN kasegaRzjaN (※「kaseQde kaseQde」が聞かれた。)	
警官を呼んだ	keRsacuR 'jobaRrara	尚昭さん「keRsacuR 'joQde tamoRreN」。
本を読んだ	hoN'jo mitara, 'jomaRzjaN	
カノーを漕いだ	kanoR'jo kogaRzjaN	「櫂で漕いだのが櫓になって今は船外機」。
母 (ハー) を呼んだ	'oQka が母でお婆さんが kakaR でその上が'uNma と言った。 直子さんの小さい頃に既に廃れ気味の言葉に haRdo, 'aNdo があつた。 家族が年上の女性を haRdo と呼び、誰でも年上の女性を呼ぶ時'aNdo と呼ぶ。 尚昭さんは'aNdo 「誰々姉さん」だけ知っているという。	
マッチがあるわ	maQciga 'arowa	
マッチを使って火をつけてくれ	maQcjo cukaQte hjo cukete kero	
マッチを使うわ	maQcjo cukoRwa	
注意があるわ	cjuR'i'ga 'aruzjaN	
注意をしてくれ	'ure'ureni cjuR'i'jo site keroN, cjuR'i sitemo dameda	
なおも注意をするわ	cjuR'i'jo sjowa	「na'o は使わない。アノネの意味で naR は使う」。 「'eRQto naR, kogaN site naR」。
鯉釣りへ行つて	kacuRcuri'e 'iQte	
鯉 (かつお) を釣ろう	kacuR'jo curaRzjaN	
おとなしく (やをら) 座っている	'joRraN sjeR, 'joRraN suwaQtaRreR	
もう随分と長い時間がたった	hara(ha'ja) keQkoR zikaNga tataRzjaN, zuibuN, nagakja	
他に'oRziR (大勢), koziR (小勢), tiRniR (直子; 丁寧), ciRniR (尚昭; 丁寧), zjuRbuN (充分)。		
椎 (の実) を少し (コシ・チイト) 食べるわ	ciRtodara, kosidara, ciRto kamowa, kamaRzjaN	
風が有るわ	kazega huite 'arunite[arunite] 'oki'e derareNnaka, kazega 'arowa	
扇風機を買わせるわ	seNpuRkjo kawaserowa (※他に dokodaraQkiRnoR。)	
団扇で扇れるわ	'uciwade 'a'orerowa	
青い海が見えるわ	'a'oke 'umiga miRrozjaN	
海が青いわ	'umiga 'a'okja, (人に言う時) 'a'okezjaN, (自分で感動して) 'a'osaR	
有る物を使うわ	naNdemo kaNdemo 'aRro monoR cukeRba 'jokezjaN	
「'aRru は'aru と同じ「有る」の意だがその時の気持ちによって使い分ける」。どうやら非特定化の意か。特に指す対象・場所を定めない感じが出る様子。ここでは他に「miRneR (見えない)」が聞かれた。		
船が有るわ	hunega 'aruzjaN, hunega 'aRruzjaN, naNbeR, saNbeR (三杯)	
父 (ちち) と母 (はは) の顔を思い出した	tete (直子: 父親), tete'o'ja (尚昭: 父親) ←呼ぶ時には不使用。 toQcjaN (父), 'oQka (母), totoR (爺), kakaR (婆), 'uNma (曾婆), baNma (婆?)	
フタハライトコ	「'itoko」、「hutahara'itoko」、「mihara'itoko」。「イトコは親戚、ミハラは他人の始まり、ヨハラ以降は完全に他人」だそうだ。	

クツカワシ	kucukaRsime	「蟬のこと」。
キービヤシ		「kuQcigiro me がある」という話は出たがキービヤシだったか思い出せず。
青ヶ島の「クッチギリビヤシ」		と符合する証言として以下に引用する； 発話；kuQcigiromiRwa 'ani RteN neQkokutoQciR, 'uriRwa nanibi'jasi Rc iQtaroR, 意味；食いちぎるメをば何て、小さくありながら、あれをば何ビヤシって言ったろう、 発話；ciRsakutoQciR kuQcigiromega, parerume, kuQcigirareruto kegasite parerumega 'areba, 意味；小さくありつつ食いちぎるメが、腫れるメ、食いちぎられると怪我して腫れるメがあるんだが、 発話；'are 'anibi'jasi Rc iQtaroRnaR, kiRbi'jasi Rte, 'uRN, 意味；あれ何ビヤシって言ったろうなあ、キービヤシって。うーん。 発話；直子：suQgoku 'itainoga 'aruzjaN kurokute, 意味；すっごく痛いのがあるじゃない、黒くて。 発話；kurokega 'ani Rte 'iQtakanaR, kuQcigiromega 'arudara 意味；黒いのが何て言ったかなあ、食いちぎるメがあるんだ。
デーチキャ	deRcikja	「きれいな」。「deRcike madara (着物) dara」。
メーレ	meRre	敬語の用法が聞けたので以下に記す； 「一番下の子供は ku'e, 4~6 歳は kame, 同年輩は meRre, 上の方は 'agare, 更に 'agari'jare という」。 ここでは他に「嘔吐きのことを kono kicune, kicune という」が聞かれた。
シヤレ		「どけを sjare, 同年輩なら doki'jare, 更に doite tamore という」。 なお、doite という直前に doQte を doQ まで言いかけた様子が見られる。
モーニ	moroni	「一緒に」。「沢山は siQkari, 'jerabaku」。
オジャリヤラーカ	'ozjari'jaraRkaR	「おいでになりましたか」。 「いらっしゃいますか」は 'ozjari'jarokaR」。
ヒサメル	sjameru, hiQcjameru	「片付ける」。「冷めるは sameru, hiQcameru」。
hiQcameru を直子さんは [xis'sameru] と、尚昭さんは [x'issameru] と発音した。[s] に口蓋化は無い。		
ベナル	naku	「benaru, de'jaku は使わない」とか。

資料 4. 中之郷(2009)

中之郷(2009)のデータは福田栄子さんのデータを基礎としつつ、重要な違いがあれば菊池貞行さんのデータを備考で記すようにする。なお福田栄子さんの/oa/は[ue~oe]で実現する。

表 25. 筆者による調査データ；中之郷(2009)

調査項目	回答内容	備考
鳥打	tori'uci	
宇津木	'ucuki	貞行さん「'ucugi」。
小島	kozima	
八丈小島	hacizjoRkozima	
大賀郷	'oRkagoR	
三根	micune	
坂下	sakasita	
檜立	kasitate	
中之郷	nakanogoR	
末吉	siRsi, su'e'josi	貞行さん「su'e'josi」。(※以下敬称略)
坂上	saka'u'e	
大坂	'oRsaka	
登龍坂	noborjuR(toRge)	貞行「年寄りは noborjou」。
八丈島	hacizjoRsima	
青ヶ島	'oNgasima, 'a'ogasima	貞行「'a'ogasima」。
永郷	'eRgoR	貞行「年寄りは'jeRgoR」。
八重根港	'jaRne, 'ja'ene	貞行「'ja'enekoR」。
相手	'jaRneR[ri] hjaRraQteR[ri]'ja(入ったと言うよ)。 'jaRte, 'aite	ウチは toRcjaN が rjoRsi でしたからね。 「相手にしない、という時に使う」。貞行「'aite」。 'jaRteni siNnakogaN 'joi」。
間	'jaRda	貞行「'aida」。
明日葉	'jaRtaba	貞行「'jataba, 'asitaba」。 'jaRtaboR siQkari toQtekittoRzja」。
絵(図)	'eQzo	貞行「年寄りは'je」。「'una 'eQzoga 'umakezja」。
えびづる(山ぶどう)	'ebezu, 'ebizu	「'ebizuR kiRwa toriR 'ikogani 'joR」。
エビス様(神様の)	'ebesusama	
大きい	boRkja, deQkai	「'ura boRkja noR」。「boRkute boRkute」。
小さい	neQkokja, ciNgoke	「'aNoR kono sacumawa ciNgokezja」。
家	'e	貞行「我が家 waga'e を昔は wagai とも」。 'uno 'ewa dokono hitono 'e dakanoR toka, waga'ewa kokodara toka」。
台所	koQkuba	「婆ちゃん達の言葉」。
便所	kaNzjo, kaNzjoR	「kaNzjoR'e 'ikara」。
母屋(大きい家)	boRke'e, boRke'je	「母屋から離れた家、は分からない」。
母屋から離れた家		貞行「'enoko といいおばさんが住んでたりする」。
ブナリ	bunari	「凧揚げの時、子供が泣く時」。 貞行「八丈凧の弓の弦の部分に紙で風に当たるとウナルものを付ける、それをブナリという」。
ウナリ	'unari	「溜息の時、病気の時」。
ブトワ	bucu	「殴る、叩く」。
ウトワ	'ucu	「釘を打つ」。
箒(ははき)	hoRki	「hoRkjo moQteko」。「hoaki は聞かない」。
揚梅(ヨアモ)	'jaRmo	'joamo が期待された。中之郷(2008)は'joamo」。

鍬 (畑の道具)	kuwa, tega, micuga	一度だけ[mitsuc ^w a]という音声が聞かれた。
「sono tegoa 'jokose」。形はクワが四角。こう三つになってるのがミツガ。		
桑 (蚕の餌)	kabjaR, kanoki, kanomi	「kabjaRnoki は聞くが kabjaRnomi は無い」。
「'jamjaR kabjaR'jo mogiR 'ikogaN 'joR 'ukuni kabjaRnokiga 'arozja」。		
神様	kamisama	
仏様	hotokesama	
漁手	rjoRsi	「waga'ewa rjoRsi doRnte」。
入道雲	njuRdoRgumo	「waR njuRdoRgumoga detoazja」。
入梅	njuRbai	「他の言い方もあったような気もする」。
火吹き竹	hjoRkidake	
背負うわ	sjo'u	「sjoQte 'ikogaNniR te」。/gaNniR/[ganni:] は{gaN}の古い音形で三根/goRniR/に対応。
塩	sjo	
塩辛	sjo'ude	「魚を塩を少し入れて茹でる。単独では'juderu」。
場合	ba'ai[ba?ai]	貞行「ba'jai があるかもしれない」。←ba'jaR か
ダース	daRsu	
筋	suzi	「筋肉・血管」。「suziqa hiNnobite, 'jamete」。
「sogoNdoR 'omjaR suzjo 'itamete Rtoka」。		
土	cuci	[u]は前寄り (advanced)。特に cucjo の時はそう。
貞行「自分達の世代でも cici を使ったことがあるかも」。←前寄り過ぎて次世代では cici に変化か。 「koRrega cucjo(u は前寄り), cucjo(u は前寄り), korega cucjo(u は特に前寄りでない) sjoQte kite」。		
植	kanazucjo tore	
敷く	suke 'joi	
始める	hazimeru	
自在鉤	zuzjaR	[u]は前寄り (advanced)。
「'ukuno zuzjaRno tokoroni koriR hiQcurusitoke toka」。		
霧	gasu, mo'ja	
岸・崖	gake, gakeQpuci mama(-kaburi), kosi	「段々畑の境目を mama」。コシの用法は特殊； 「草木が覆い被さっているのを mamakaburi」。
慣用句「cjoRno kosiR buQkociro, cjoRno kosiR buQkotose」に見られ、崖の意。cjoR は地名か何か。用法はどうやら「廃棄・排除したい、気に入らない・嫌気がさす」時に感情の対象に対して用いるようだ。		
皆	miNna	
1 日	'iciNci	
2 日	hucuka	
3 日	miQka	
4 日	'joQka	
5 日	'icuka	
6 日	muika	
7 日	nanuka	貞行「nanoka」。
8 日	'joRka	
9 日	kokonoka	
10 日	toRka	
11 日	zju'iciNci	zjuR が短母音化している。
12 日	zjuRniNci	
13 日	zjuRsaNci	
14 日	zjuR'joQka	
15 日	zjuRgoNci	
16 日	zjuRrokuNci	
17 日	zjuRsiNci	/s/は[ʃ]の中に強く [ç] が聞こえる。
18 日	zjuRhaciNci	
19 日	zjuRkuNci	

20日	hacuka	
21日	nizju'iciNci	zjuR が短母音化している。
22日	nizjuRniNci	
23日	nizjuRsaNci	
24日	nizjuR'joQka	
25日	nizjuRgoNci	
26日	nizjuRrokuNci	
27日	nizjuRsiciNci	/s/は[ʃ]の中に強く[ç]が聞こえる。
28日	nizjuRhaciNci	
29日	nizjuRkuNci	
30日	saNzjuNci	zjuR が短母音化している。
31日	saNzju'iciNci	zjuR が短母音化している。
1月	'icigacu	
2月	nigacu	
3月	saNgacu	
4月	sigacu	
5月	gogacu	
6月	rokugacu	
7月	sicigacu	/s/は[ʃ]の中に僅かに[ç]が聞こえる。
8月	hacigacu	
9月	kugacu	
10月	zjuRgacu	
11月	zju'icigacu	zjuR が短母音化している。
12月	zjuRnigacu	
1	'ici	
2	niR	数え上げをしていない時にも短母音かは不詳。
3	saN	
4	'joN	貞行「siR」。
5	goR	数え上げをしていない時にも短母音かは不詳。
6	roku	
7	sici	/s/は[ʃ]の中に僅かに[ç]が聞こえる。
8	haci	
9	kjuR	数え上げをしていない時にも短母音かは不詳。
10	zjuR	貞行「toR, zjuR」。
100	hjaku	
1000	seN	
正月	sjoRgacu	
朔日	cuitaci	「婆ちゃん達は ciRtaci とやった」。
晦日	misoka, 'oRmisoka	「大晦日のこと」。
来年	djaRneN	
来月	raigecu	
再来年	saraineN	
再来月	saraigecu	
今日	kiR	
昨日	kiniR	「konjaRda (こないだ)」が聞かれた。
一昨日	'uciciR	「otociR」とも言い、場によって使い分ける」。
明日 (アス・アシタ)	'asu	貞行「'asita」。
明後日	'asaQte	
その次の日	saNnasaQte	貞行「saNnoasaQte」。
その次の日	si'asaQte	
朝	toNmete	
朝飯	'asamesi, 'asake	「'asake は婆ちゃん達の言葉」。

昼	hiru, hiruma	
昼飯	hirumesi, hjoRra	「hjoRra は婆ちゃん達の言葉」。
夕	'juRgata	
夕飯	'juRmesi, 'joRke	「'joRke も古い言葉」。
春	haru	
夏	nacu	
秋	'aki	
冬	hu'ju	
暑いわ (ホトローワ・シャシャキヤ・シャシャケローワ)	hotoRru, sjasjakja, sjasjakerowa	気候や気温が暑い。「夏が暑い」。 「'are'are'are kiRwa hotoRowanoR」。 感触や熱線が熱い。「熱い物に触って」。 その動詞化。「いろいろの前で熱くて焼ける」。
寒いわ (コギーローワ)	kogeRru[koc:ru]	微妙に狭い/eR/[r:]。/eR/は古い世代の音韻。 貞行「kogiRru」。
トトー	totoR, toRcjaN	「父ちゃん」。
カコア	kakoa, kaRcjaN	「母ちゃん」。←後で「kakoa は知らない」とも。
兄弟姉妹	kjoRdjaR	
祖父・爺	ziRcjaN	
祖母・婆	baRcjaN	
奥さん	kaRcjaN	
(人名) + 爺	近い人に'ozi, 'ziR, 'baR を付ける。'ziR, 'baR は結構年を取った人に。 daredareziR, daredarebaR, tamamasasaNnaNkawa 'ozidesjo, tominoriziR, tomitakeziR, 'otoRbaR, takesibaR, kimikabaR 貞行「'jasaziR, 遠い親戚の人で最近まで喋った」。	
土地・財産	zimeN, zaisaN	
ブッチャリガネ	buQcjarigane (※捨て金。貸しても回収できない金。かけても無駄な金。) 貞行「無駄にしたお金、またはどうでも使っていいお金」。	
蛾 (が・ひひる)	hiRrume	
屁 (へひり)	hiRri, hiR'o hiRru, hiQte, 「he は最近の言葉」。	
鼻肩	hiRki sisugidara	
敷居	sikiR mataguna 'joi, sikiR'o humomoNzja naQkja 'joi	
襠 (ふんどし)	huNdoRsi (※持って来いと言う時 doRsjjo だが締めろと言う時 dosjo)。	
裸足 (はだし)	hadoasi	
	「'amega huridasitoNte kucuwa nasi hadoaside 'ikusika nakezja」。	
子供 (はらわた)	haroata	「婆ちゃん・母ちゃん達が kono haroatameraga」。 貞行「80 過ぎの年寄りが kono haroatame と」。
	「haraRta hoNto hiNnigireroRde sjakuni sawarowa, hiQcigirero, ciNnigirero hodo」。	
貧乏	biNboR	
頑丈	gaNzjoR	
馬鹿	doNgo, nuke	「kono doNgosjoimeraga」。
白髪	sjoaga, (「sjaga は新しい」。)	*sjaRga を経由して oa 群に巻き込まれたようだ。 貞行「sjaga」。
	「kono 'obaRsaNwa sjoagaqa siQkari daranoR toka maQsirokezja toka sjoaga daragenara toka」。	
白蟻 (しろあり)	sjoarime	
蟻	'arime	発音はしてないが、会話の文脈上存在するはず。
黒蟻 (ヒヤシメ)	hjaRsimе	「黒蟻で刺す・噛む。痒みが凄くて延々と痛痒い」。
貞行「特に海でチクチク刺すのを言うが、ただのアリのこともヒヤシメと言う」。		
吸物	siRmono, siru	
雑炊	zoRsiR	
杖	cu'eNboR, 「sono cu'eNboR'jo cukiNnako towa damedara 'joR」。	
水道	siRdoR	
かつえるわ (空)	haragaheQte, kateRrowa[kat:rowa] (※例によって/eR/は古い世代の音韻。)	

腹)	「juwakja は中之郷では使わない。」「areR ha'jaku hiruni sogaN kateRte」。 貞行「kaciRte だが kateRte ともいい、そちらの方が多いかも」。	
へっつい様 (か まど)	heQciR	「nabeR[ɾ:] heQciRni kakero」。
教える	'osiRru	
煮える	niRru	
見える	miRru	
覚える	'obiRru	標準語「覚える」と同じ意味。「怯える」じゃない。
燃える	miRte	「miRte 'aroNte daizjoRbudara」。
「sono hjo 'oQkoasete muse」(いろいろでもお風呂でも、焚口を合わせて燃せ)。		
吠える	hiRte	
呼ぶ	既に呼ばれている人には'joboaru を、これから呼ぶ人には'jobu を使う ここで「jobogani Qte, 'joboganiR sitoaNte」が出現。少し後に「'uriR 'odosogani」が出現。	
貰う	moroaru	「mora'u は新しい」。貞行「moroaru」。
「seNsiR[ɾ:]kara moroaroaNte」。/iR/はやや広い。「先生」という語は音変化に巻き込まれたようだ。		
オケル	'okiro	'okeru が期待された。どこにも確認できなかった。
オコス	'okosu	
オテル	'oteru, 'ociru	
オトス	'otosu	
オレル	'oreru, 'oriru	貞行「'oreru はありそうな気がする」。
オロス	'orosu	
オデル	'oderu, 'ode'jami	(怖じる・怖がる)。「'oziru は無い」。
オドス	'odosu	
ワタル	wataru, hiQkataQte	
ワタス	watasu, buQkatase	「ブッカタスは渡す・片付けるの2種類ある」。
キャール	kjaRru	(帰る)。
キヤース	kjaRsu, buQkjaRse	(返す)。他に「buQpataraku」が聞かれた。
ブッカタス	buQkatasu	(勢いよく・沢山、片付ける)。
ブッコトス	buQkotosu	(勢いよく・沢山・大きな物を、落とす)。
ブッチャル	buQcjaru, (捨てる)。「dokiRka hasino sitani buQcjaQte 'jare」。	
ブツオビール	buQcobiRru	(驚く)。「buQcobitara と短く言うことも」。
スール	suRre	(味噌汁などを飲む)。「婆ちゃん達の言葉」。
ヒッチュール	hiQcjuRre	(酒などを呑む)。「酒を。suRru は味噌汁を」。
貞行「hiQcjuRru だと思うが hiQcuRru も中之郷で聞いたことがある」。		
ヒッカタス	hiQkatasu	「ちょっとだけ・少ない物を、片付ける」。
ヒッコトス	hiQkotosu	「細かい物を・少ない物を、ボロボロ落とす」。
ヤーミミコワ	'jamu, 'jaNdekitoaka	(歩き回る)。「歩く。'jaRmu じゃない」。
ヒャーミコワ	hjaRmiku	(這い回る)。連用形は「hjaRmiQte と言う」。
「(子供が) waR hjaRmikogaN narozja ha'jasoa(早さは), (年寄りが) hjaRmikisika dekinakoka」。		
マキミコワ	torimega makimikowa	(飛び回る)。「泣き回るのは nakimiku」。
「鷹が悠然と飛ぶのを maku と言い、鳥が枝から枝へ飛び渡るのを makimiku と言う」。		
ヒンマコワ	hiNmakowa	(サッと飛び立つ)。「鳥・ヒールメが飛び立つ」。
ピーテ	kiRwa piRte kazehikara	(雨に濡れて)「濡れる」。
ここで栄子さんが外出から戻って来て貞行さんと顔を合わせる。貞行さんが「'or'i」と呼びかけると、栄子さんも「'or'i gokuroRsaN」と答えた。標準語では注目の要求だが、中之郷では擦違う時の挨拶か。		
デクロワ	kuru	(やって来る・できる)。「来る」。
栄子「dekurowa も dekirowa も同じだが、可能という意味。来るという意味なら kuru になる」。 貞行「dekuru は向こうから来ること。(連用形を) dekite とも言う」。		
伏して	husite	「hiRte は聞かない」。
燃して	musite	「miRte は燃えることで燃やすことじゃない」。

干して	hiRtaRNte torikome	「乾いたは hitara」。貞行「hosite」。
話して	hanjaRte	貞行「hanasite」。
ワシテ	wjaRte, wasite, 「婆ちゃん達の言葉」, 貞行「wase は聞いたことがある」。	
飲ませて	nomjaRte 'ozjaraserogaN, 貞行「nomasete」。	
壊して	buQkoRsite	「婆ちゃん達の言葉。同世代は buQkoasite」。 貞行「koRsite」。
「同世代では、活け花の造形や部屋の模様を、思い切って替えてしまうことを buQkoasite と言う」。		
通して	buQtoRsu	貞行「toRsite」。
交して		貞行「koasite」。
回して	buNmoasu, moasite	
入れて	'eru, 'ete	
くれて	keru, kete	「soriR kete simjaR」。
痒がる	kjaRgaru	
シンナカ	siNnaka	(しないよ)。
シンノアダラ	siNnoadara, siNnakodara (ずっとしないよ・しないことだよ)。	
人を叱る際に「siNnakodara, siNnoadara, siNnoadara, ..., siNnakodara」などと年寄りを使い分けた。発話の中で何度も「しちやだめだ」と言う時に、節目を強調して nako を用いる。強意形と解釈される。		
ケンナカ	keNnaka	貞行「-nakodara のほうしか使わない」。
ケンノアダラ	keNnoadara, keNnakodara	
イキンナカ	'ikiNnaka	貞行「自分で、行かない、という意味」。
イキンノアダラ	'ikiNnoadara, 'ikiNnakodara, 貞行「人に、行かないようにしろ、の意」。	
私はこれを食べるわ	wara koriR kamodara	
私はそれを食べるわ	wara soriR taberowa	
私はあれを食べるわ	wara 'uriR taberowa	
だれが食べるか	daga(darega) taberuka	
どれを食べるか	doriR kamodoa	
私が食べるわ	waqa koriR taberowa	
あなたが食べてくれ	'omjaRga koriR kameba 'jokezja	
このようになるわ	kogaNdoRhuRni narodoazja (※この doR は別の箇所では doa も出る。)	
そのようになるわ	sogaN narodoazja	「kogaN sogaN sodoazja」(こうこうしなさい)。
「決め付ける時は kogaN narodoazja と、こういう風になるだろうと言う時は kogani narowa と言う。同様に sogaN は強い言い方で、sogani は強さの無い言い方。'ugaN, 'ugani も同様である」。		
ウクへ行こうと言った	'ukiR 'ikogaN te('ikogani Qte) 'iQtaro('jaNnoRzja) 'ukiR 'ikoganiR 'joi (※これは hanasidaraR 'joi (話なんだよ) 等と使う。)	
マグワン・マゴアニ・マグワニーテ	maguN, magunja がある。「'ugaNdoahuRni 'joaga maguN kogaNdara」。 「haNzumef(さっき) hanasitoa hanasidoaga magunja kogaNdoa hanasidara」。 「本当はという意味か」と聞くと肯定。「kaNgjaR (考え)」という語が出た。 貞行「magoN ciga'u, magoN 'usodara というのを同世代で使った」。 貞行「magoN は「ちょっと待て本心は」という意味か」。 上記の例文も、全て「実際には」で解釈できる。各地区で意味は大体同じか。	
ウの人に会うわ	'ureni 'a'odara	
会いたい	'aitakezja	
会いに行こう	'aini 'ikogani 'joR (対目上), 'ikogaN (対同等以下), 'ikogaRN (強意か)	
窓を板で覆うわ	madoR 'itade 'oQputagu, (板を)bucicukeru nabeR[nabr:] 'oQputagu (※例によって'eR/は古い世代の音韻。)	
覆いたい	haketakja, hakete kero	
私は今日はもう	wara kiRwa hara kjaRrowa	

帰るわ		
あれは昨日はまだ無かった		'urewa kiniRwa mada nakarara 「'urja という短い形は人間のこと。'urewa は人間も物も」。
小島へ行こう	kozimjaR 'ikogani	イー格でなく/eが出ることもある。
浜へ行こう	hamjaR 'ikogani	
庭（ニャー）へ行こう	njaR'e derogaN	「njaR'i derogaN とは言わない」。←膠着は/e/?
港へ行こう	minato'e 'ikodoazja	
角へ行こう	kadiR derogaN	/iR/[r:]はやや広いが古い世代ほどではない。
外へ行こう	sotiR derogaN	/iR/[r:]はやや広いが古い世代ほどではない。
三根へ行こう	micuniR 'ikogani	/iR/[r:]はやや広いが古い世代ほどではない。
店へ行こう	misiR 'ikogaN	
上へ行こう	weNджаR 'ikogaN	「単独は weNda で wenda 'ikogaN とも」。
寝に行こう	nerogaN	「tokiR 'ikeba 'jokezja」とも。
宇津木へ行こう	'ucukiRmo 'ikukanoR	
海へ行こう	'umiR 'ikogani	
見に行こう	mini 'ikogani	
中国へ行こう	cjuRgoku 'ikogani	
砂漠へ行こう	sabaku 'ikogani	
ウクへ行こう	'ukiR 'ikogani	「'uQciR(あっちへ)は近くて'ukiR は遠い」。
伊豆へ行こう	'izui[zui] 'ikogaN	[izui]と[asui]の[u]は非常に前寄り。
会津へ行こう	'aizuni 'ikogani	
大津へ行こう	'oRcu'e 'ikogani	
高松へ行こう	takamacu 'ikogani	
イギリスへ行こう	'igirisu 'ikogani	
フランスへ行こう	huraNsu'e 'ikogaN	
ドイツへ行こう	doicu 'ikogaN	
スイスへ行こう	suisu 'ikogaN	
昨日へ帰ろう	kiniR'i kjaRrerurasikja 'joR,	「kiniR'e, kiniR'i, /i/もあるよ」。←膠着は2種。
明日へ行こう	発話; 'asui[asui] 'ikogaN, 'aNdaka 'asui[asui] 'ikeru teR[ri:]'ja 'joR	意味; 明日へ行こうよ、なんだか明日へ行けると言うよ (よ)。
前へ行こう	mjaRni 'ikerurasikja, mjaRni 'ikogani,	←「前」は時間の概念か?
九州へ行こう	kjuRsjur'e 'ikogaN 'joi	
中学校へ行こう	cjuRgaQkoR'e 'asuwa 'ikogani	
漁へ行こう	'asuwa rjoRni ikogani	
交番へ行こう	koRbaN'e 'ikogani 'joi	
これをカノーへ乗せよう		「カヌーは kanuR」。'ukuno hunewa kanuRdaQciR'ja」。
沢へ行こう	'ukuno 'jamano soawa	「'ukuno 'jamano sawa'e 'orirogani」。
川へ行こう	'asuwa koa'e 'ikoganiR	貞行「大きい川はないが小さい川を hora という」。
湧き水	wakimizu	
落ちる水	taki, 'oteru mizu, (※'oteteru も 'otetaru もどっちも発話中に見られた。)	「simizu mitainoga takitaki tarerunomo 'oteteru mizu Qte 'i'uzja」。
溜まる水	tame'ike	
井戸へ行こう		「'ido は無い」。「mizukumiba は水汲み場と言ったか微妙」。
水神様へ行こう	suiziNsama	「聞いた事はあるが行った事は無い」。
湧き水へ行こう	wakimizu([u]は前寄り) no tokoro 'ikogani, mizuR koriR buQkome	
篩（フリー）へ乗せよう	huriR,	「金網」。
皿を洗った	saroa 'ara'u	
名を聞いた	namjaR'jo kiRta	
卵を割った	tamagoR waraNnoRzja	

物を壊した	monoR[monuR] buQkoasitaNnoRzja (※oR[ɔR]はかなり狭い。)	
子を産んだ	kodomoga 'joR 'umaretaQciR'ja (※QciR'ja と QteR'ja は等価のようだ。)	
みみずを踏んだ	nenezumeR[e:] humaQteR'ja[ti:ja] (※この teR[tr:]はかなり狭い。以下同様)	
水をすすった	mizuR susure	
湯を沸かした	'juR wakasitaNnoRzja	
右目を瞑った	migimeR[ɾ:] cuburaQciR'ja	
酒を飲んだ	sakiR nomaQciR'ja	
手を振った	tiR huraQciR'ja	
話を聞いた	hanasjo kikaQteR'ja	
飯を食べた	mesjo kamaQteR'ja	
詩を詠んだ	si'o 'jomaQteR'ja	
鼻血を出した	hanazjo dasitaQteR'ja	「hanazi'o dasitaQciR'ja」とも聞かれた。
恥をかいた	hazjo kakaQteR'ja	
字を書いた	zjo kakaQteR'ja	「zi'o kaita」とも聞かれた。
海の幸を食べた	'uminosaci'o kamaQteR'ja	
土を掘った	cucjo horaQteR'ja	[u]は非常に前寄り (advanced)。
血をぬぐった	cjo nuguwaQteR'ja	
花火を見た	hanabi'o mitaQciR'ja	
海を渡った	'umi'o wataQtaQciR'ja	
木を伐った	ki'o kiraQciR'ja	
学生を見た	gakuseR'o mitaQciR'ja	/seR/[sr:]はやや狭い。音変化に巻き込まれた様子。
例を挙げた	reR'o[ri:ɔ] 'ageta	/eR/[ɾ:]はやや狭い。/iR/[ɾ:]かもしれない。
マサ爺を呼んだ	masaziR'o 'jobaQteR'ja	
餅を食べた	mociR'o tabetaQteR'ja	
椎を伐った	siR'o kiraQteR'ja	
胡坐 (アツキヤー) をかいた	男脛は'aQkjaR で胡坐は'aQkjaR'o kake だそうだ。	
	「やや記憶が曖昧」。「sogaN suwaQte naQkede 'aQkjaR'o kakeba 'jokezja Qte 'i'uno」。	
	「座禅みたいな感じに座んなさい」というのを'aQkjaR」。「aQkjaR'o(脛を) bucuketara とも言う」。	
位牌を立てた	'ihjaR	
前を見た	mjaR'jo mita	
焼酎を飲んだ	sjoRcjuR noNda	
銃を撃った	teQpoR 'utaQciR'ja	
中学校を出た	cjuRgaQkoR'o detaQteR'ja 'joR, cjuRgaQkoR detaQciR'ja	
量を計った	mekatoa hakaQta	
警官を呼んだ	keRkaN'jo 'jobaQteR'ja	keR[kɾ:]はやや狭い。/kiR/[kɾ:]かもしれない。
本を読んだ	hoN'jo 'jomaQteR'ja	
カノーを漕いだ	kanuR'o kogaQciR'ja	
母 (ホア) を呼んだ	hoa'o 'joNde ko	「kako は知らないね」とか。
マッチがあるわ	maQciga 'arowa 'joR	
マッチを使って火をつけてくれ	maQcjo cukaQte hjo cukeroadoazja	
マッチを使うわ	maQcjo cukjaRba 'jokezja	
注意があるわ	cjuR'i'ga 'arowa	
注意をしてくれ	cjuR'i'o site kereba 'jokezja	
なおも注意をするわ	siQkari cjuR'i se, 'ikudomo 'ikukaimo cjuR'jo se	
早く (モアミン)	moamiN ko	
貞行「maRmiN'jare (早くやれ)。同じ意味で maRmiN se, goragora 'jare とも言う」。		
鰹釣りへ行っ	kiRwa kacuRcurini 'ikara	
鰹 (かつお) を釣ろう	kacuR	
おとなしく (やをら) 座っている	'joRraN, 貞行「'joRraN 'joRraN (静かに静かに) など」。	

発話； 'joRraNnaQketo damedara, 'unaga'e no kodomowa 'joRraNnakaNnoRzja 意味；静かでないと駄目だよ、お前の家の子供はおとなしくないだろう。		
もう随分と長い時間がたった	貞行「hiRtiR, hara, naqakja」。	
椎（の実）を少し（コシ・チイト） 食べるわ	koside 'joQkja, ciRto moQte ko 貞行「siRnomi, siRnoki, kosi, ciRto」。	
風が有るわ	kazega 'arowa	
扇風機を買わせるわ	seNpuRki'o kawaserowa	
父（ちち）と母（はは）の 顔を思い出した	tete'o'ja（父親）「ウチは無いが中之郷で聞いたことがある」。	
フタハライトコ	hutahara'itoko	貞行「いとこの子供どうし」。
クツカワシ	kucukoasi	「蟬のこと、蟬の鳴声そのもの」。
ジャーチキヤ	zjaRzikja	/zi/は無声かもしれない。貞行「zjaRzi'i」。
ミャーレ	mjaRre	「食べる」。
シャレ	sjare	「出て行け」。
オジャリヤロア カ	'ozjari'jaroRka	「いらっしゃいましたか」。
ヒサメル	hisameru, hisjameru	「どかせ、奥にしまえ」。
ベナル	benaru	「泣く」。

資料 5. 樫立(2009)

樫立(2009)のデータは大部分が菊池浄さんに基づくが、一部で奥様の企世さん、マグワンという語については佐藤スミ子さんのお話(録音ナシ)にも基づく。なお浄さんの/Coa/は[Cwa~Cu^wa~Cɔ^wa]で実現する。スミ子さんの発音は/magoaN/[macwɛN]と記憶している。

表 26. 筆者による調査データ；樫立(2009)

調査項目	回答内容	備考
鳥打	tori'uci	
宇津木	'ucuki	
小島・八丈小島	kozima, hacizjoRkozima	
大賀郷	'oRkagoR	
三根	micune	
樫立	kasitate	
中之郷	nakanogoR	
末吉	su'e'josi	企世さん「seRsi」(※「大賀郷弁が出る」とか)。
坂下・坂上	sakasita, saka'u'e	
大坂	'oRsaka	「坂の付く地名はこれぐらいしか見当たらない」。「大坂」という呼び方は坂下の人が言い出した?。
登龍坂	noborjuR, noborjoR	「noborjoR が一般的だが、両形使う。」
「樫立の人は昔は大坂トンネルの横の峠を昇り降りして、登龍とは余り関わりを持たなかった」。		
八丈島	hacizjoRsima	
青ヶ島	'oNgasi, 'a'ogasima	
永郷	'eRgoR	「'jeRgoR とする人もいる」。
八重根港	'ja'enekoR	「'jaRne とする人もいる」。
相手	'jaRte, 'aite	
間	'aida	「'jaRda とするかどうか分からない」。
明日葉	'jaRtaba, 'jataba	
絵(図)	'ezu	
えびづる(山ぶどう)	'ebezu	
エビス様(神様の)	'ebesu	
大きい	boR'i	
小さい	neQko'i	
家	'je	
台所	djaRdokoro, koQkuba, boRziba	
便所	kaNzjo, beNzjo	
母屋(大きい家)	boR'ja	
母屋から離れた家	'iNkjozjo	企世さん曰く「hanare とする」。
ブナリ	bunari	「凧に付ける。台風も、家の軋みもブナリ」。
ウナリ	'unari	「bunari と同じ」。
ブトワ	butowa	「wa は「そうしますよ」という意味」。
箒(ははき)	hoRki, hoRkjo	hoaki が期待された。cf. 樫立(2008)。
揚梅(ヨアモ)	'joamo	「坂下の人には'joRmo」。
鍬(畑の道具)	ka, tega, cubotega	単純語で ka が出た。「teqoa hiQkasuriNnoRka」。
桑(蚕の餌)	kabjaR, kanoki, kanomi	「順に、葉、木、赤紫のやつ」。

「wara kiRwa kabjaR'o mogiR 'ika(? 聴き取れず)dara, kanomjo moNde(もいで) kamiR 'ikuka」。		
神様	kamisama	
龍宮	rjuRguR	「元々あったとは思えない、あるとすれば民話」。
仏様	hotokesama	
漁手	rjoRsi	
入道雲	njuRdoRgumo	「余り使わない言葉」。
入梅	cu'ju no 'iri	「njuRbai は聞かない」。
火吹き竹	hjuRkudake	
背負うわ	sjo'u, sjoRwa	
塩	sjo	
塩辛	sjo'ude~sjoRde	「サツマイモを茹でる、つゆを捨てないで継ぎ足して使うと美味しい、単独だと'juderu という音」。
場合	ba'jaR	「sogaNdoa ba'jaRniwa」。
ダース	daRsu	「檜立にはダースを使う習慣が無かったと思う」。
土	cuci, cucjo	「cicjo という言い方をする人もいるかも」。
槌	kanazuci, geNnoR	「kanazucu と発音する人はいると思う」。
敷く	suku, hiku	「ha'jaku hutoN'jo suQtoQte nekasero」。
始める	hazimeru	
自在鉤	zuzjaR	「坂下は zuzeR」。
霧	kiri	
岸・崖	mama	「kosi は聞き覚えない」。
皆	miNna~meNna	
1 日	cuitaci	
2 日	hucuka	
3 日	miQka	
4 日	'joQka	
5 日	'icuka	
6 日	muika	
7 日	nanuka	
8 日	'joRka	
9 日	kokonoka	
10 日	toRka	
11 日	zjuR'ici	Nci が省略されたと見られる。
12 日	zjuRniNci	
13 日	zjuRsaNci	
14 日	zjuR'joQka	
15 日	zjuRgoNci	
16 日	zjuRrokuNci	
17 日	zjuRsiciNci	/si/は[çi]に聞こえる。
18 日	zjuRhaciNci	
19 日	zjuRkuNci	
20 日	hacuka	
21 日	nizjuR'iciNci	
22 日	nizjuRniNci	
23 日	nizjuRsaNci	
24 日	nizjuR'joQka	nizjuR'joQka が期待されたがこれも可能か。
25 日	nizjuRgoNci	
26 日	nizjuRroku	Nci が省略されたと見られる。
27 日	nizjuRsiciNci	/si/は[fi]に聞こえる。
28 日	nizjuRhaciNci	
29 日	nizjuRkuNci	
30 日	saNzjuRniNci	
31 日	saNzjuR'iciNci, misoka	

1月	'icigacu	
2月	nigacu	
3月	saNgacu	
4月	sigacu	
5月	gogacu	
6月	rokugacu	
7月	sicigacu	/si/は[ɸ]に聞こえる。
8月	hacigacu	
9月	kugacu	
10月	zjuRgacu	
11月	zjuR'icigacu	
12月	zjuRnigacu	
1	'ici	
2	niR	数え上げをしていない時に短母音かどうかは不詳。
3	saN	
4	siR	数え上げをしていない時に短母音かどうかは不詳。
5	goR	数え上げをしていない時に短母音かどうかは不詳。
6	roku	
7	nana	
8	haci	
9	kuR	数え上げをしていない時に短母音かどうかは不詳。
10	toR	
100	hjaku	
1000	seN	
正月	sjoRgacu	
朔日	cuitaci	「ciRtaci」と言ったかどうか分からない。
晦日	misoka	「月末のことをこう言った」。
来年	zjaRneN, rjaRneN	
来月	zjaRgecu	
再来年	saraineN	
再来月	saraigecu	
今日	kiR	
昨日	kiniR	
一昨日	'ucuciR, 'ocuciR, 'otociR	
明日 (アス・アシタ)	'asu, 'asita	「'asu も 'asita も五分五分」。
明後日	'asaQte	
その次の日	saNnasaQte	
その次の日	sinasaQte	「gonasaQte」とは言わない。
朝	'asa, toNmete	
朝飯	'asamesi, 'asake	「'asake は相当の歳でないと使わない」。
昼	hiru, hiruma	
昼飯	hiru, hjoRra	「hirumesi でなく。hjoRra は子供の頃使った」。
夕	'juRgata, 'joNbe	
夕飯	'juRmesi, 'joRmesi, 'joRke	
春・夏・秋・冬	haru, nacu, 'aki, hu'ju	
暑いわ (ホト一ロワ・シャシャキヤ・シャシャケロワ)	hotoRru, sjasjakja, sjasjakeru	気候や気温が暑い。「気候的に暖かい」。 感触や熱線が熱い。「鉄などを触って熱い」。 その動詞化。「sjasjakja が動詞になる感じ」。

寒いわ (コギ ーロワ)	kogiRrowa	「大賀郷だと kogeRrowa」。
アシー	'asiR	「アシー・アセーは主人の意か、今は死語」。
アニー	'ani	「masa'ici'ani, tomiharu'ani など男性に使う」。
		「mine'aNdo, simakaNdo (シマカお姉さん。'aNdo はお姉さん), simakadono (dono は尊称)」。
トトー・カコ ア	totosama, kakasama	
		「佐藤スミ子さんは tosasama, kakasama と言っていたが、支配階級の服部家に通じる、支配階級に非常に近い人達が使ってた言葉で、自分の家の父母でなく支配階級の旦那様奥様という感じ」。
兄弟姉妹	kjoRdjaR	
祖父・爺	ziR	「三根の人が大賀郷の人を'oRsama と呼んでた」。
旦那さん	'omjaR (=御前)	「旦那さんのことをだいたいこう呼ぶ」。
(人名) + 爺		「'jamadaziR, koNdoRziR を実際に使った」。
土地・財産		「waga zimeN と言い toci とは言わない。waga zaisaN」。 「普通財産は長男が継ぐが樞立では等分するので土地が小さくなっていく」。
ブッチャリガ ネ	buQcjarigane	「無駄金・役立たずのお金」。
蛾 (が・ひひ る)	hiRrume,	「(その場で電話で聞いて) 蛾だそうだ」, 「蝶は cjoRcjome」。
屁 (へひり)	he, hiRri, heQpiri	
最良	hiRki	「子供の頃イジメで hiRki hiRki と言った」。
敷居	sikiR	
禪 (ふんどし)	huNdoRsi	「こう言ってた人もいる」。
裸足 (はだし)	hadoasi	「あっちこっちを'aQcjaN koQcjaN」だそう。
	'aNde 'omjaR sogaN hadoasini naQte mikoR,	歩くを miku, 歩き回るを mikitateru」。
了供 (はらわ た)	haroata	「haroatagiR は大勢」。標準語「連中」の意か。
		「kaNmogiR は言わない。多くもなく少なくもない或る程度の数を表す。単純に数が多いという意味ではなく、困ったもんだというニュアンスがある。njaQtorigiR, neQkomegiR も使う」。「多いは'jerade」。
貧乏	biNboR	「biQboR というのを樞立で聞いたことがある」。
頑丈	gaNzjoR	
馬鹿	doNgo, nukesaku, nuke	「中之郷は気軽に nuke と言うが樞立では重い」。
白髪	sjaga	
白蟻 (しろあ り)	sjoarime	アリメは刺さないがヒヤシメは刺す。プクッと腫れる。昆虫のアリかどうか不明で、とにかく刺されて腫れたらヒヤシメ。ショアリメ・アリメ・ヒヤシメで3分割する。
蟻	'arime (普通の黒蟻)	
黒蟻 (ヒヤシ メ)	hjaRsime	
雑炊	zoRsui[zo:si:]	「大賀郷・三根では zoRseR」。
杖	cu'eNboR	「人によってはこういう言い方をする」。
かつえるわ (空腹)	kaciRru, 'juwakute, 'jowakute	
へっつい様 (かまど)	heQcui[hetsi:]	「sama を付けるのは相当の年寄り」。
教える	'osiRru	
煮える	njeRru	古い世代の発音[ie]が出たようだ。
見える	miRru, mieru[miuru]	古い世代の発音[ie]が出たようだ。
覚える	'obiRru	標準語「覚える」と同じ意味。「怯える」じゃない。
燃える	mo'eru	
吠える	hiRru, hiRte, hiRkuruR	
呼ぶ	'joboaru	
貰う	muroR	「過去形は muroara」。
オケル	'okiru	'okeru が期待された。どこにも確認できなかった。

オコス	'okosu	
オテル	'oteru, buQkoteru, buQkociru	
オトス	'otosu, buQkotosu	
オレル	'oriru	
オロス	'orosu	「sitasjaN 'orosu」。
オデル	'oderu, 'odegaQte	(怖じる・怖がる)。
オドス	'odosu	
ワタル	wataru	
ワタス	watasu	
キヤール	kjaRru	(帰る)。
キヤース	kjaRsu	(返す)。
ブッカタス	buQkatasu	(勢いよく・沢山、片付ける)。
「buQ は忙しさや慌て具合を表現」。ここで zjaRziku という語が出現、'oQkatasu という語が出現。		
ブッコトス	buQkotosu	(勢いよく・沢山・大きな物を、落とす)。
ブッチャル	buQcjaru	(捨てる)。「(方法にかかわらず) 捨てる」。
ブツオビール	buQcobiRru	(驚く)。「びっくりする、ぶったまげる」。
スール	suRru	(味噌汁などを飲む)。「味噌汁を」。
ヒッチュール	hiQcuRru	(酒などを呑む)。「酒を」。
ヒッカタス	hiQkatasu	「とりあえず、大急ぎで、パパッと片付ける」。
エーミミコワ	'jaRmimikowa	(歩き回る)。「'jaRNde は歩いて、miku も歩く」。
ヒヤーミコワ	hjaRmiku	(這い回る)。「大賀郷なら heRmiku」。
マキミコワ	makimiku	(飛び回る)。「飛んだり跳ねたりしている」。
「maku は飛ぶ。火の付いた葉っぱが散ったら火がマクと言い、鳥に限らない」。		
ヒンマコワ	hiNmaku	(サッと飛び立つ)。
「hiNmaku はちり紙とか、掃き集めた葉っぱが、予想外に急な風で飛び散るような場合に使う」。		
ピーテ	piRte	(雨に濡れて)「濡れる」。
デクロワ	dekurowa	(やってくる・できる)。「向こうからやってくる」。
ディーテ	dekite, deko	「dekite は古い言葉。deko は呼ぶ言葉」。
伏して	hiRte	「maNwa 'jaNde hiRte 'owasowa」。
干して	hosite	「洗濯物は hara hikara」。
話して	hanjaRte	「大賀郷は haneRte」。
ワシテ	wjaRte, wasite	
飲ませて	nomjaRte	他に「nomjaRtiR」(飲んでも) が出た。
壊して	koRsite	
通して	toRsite, toRru	
交して	koasite	「契約書を交して、とか」。
回して	moasite	
入れて	'jete	
くれて	kete	「同等以下に対して雑に。目上には'agete」。
痒がる	kjaRgaru	「大賀郷・三根の人は keRgaru」。
シンナカ	siNnaka	(しないよ)。
シンノアダラ	siNnoadara	(ずっとしないよ・しないことだよ)。
「siNnoadara のほうが意思が強い。例えば血圧の薬を飲んでるかとか聞かれて、wara sogaNdoRkotowa siNnoadara と言うと、ずっと飲まないよというニュアンスが強くなる」。		
ケンナカ	keNnaka	
ケンノアダラ	keNnoadara	
イキンナカ	'ikiNnaka	
イキンノアダラ	'ikiNnoadara	
「例えば今日大賀郷で演芸会があるよと言われて、wara 'isogasikeNte 'ikiNnoadara と使う」		
私はこれを食べるわ	wara koriR kamowa	「/iR/は[i:]と[e:]の中間の音声」。←古い世代か。但し浄さん自身の音韻・音声は/iR/[i:]であろう。

私はそれを食べるわ	wara soriR[r:] kamowa	「あれを」は'uriR」。
だれが食べるか	daga 'agaro(-ka)	「雑には daga kamo とも」。
どれを食べるか	doriR[r:] 'agaro	「単なる[i:]だと中之郷弁になる」。
私が食べるわ	waga kamowa	
あなたが食べてくれ	'omjaRga 'agari'jare	
このようになるわ	kogoaN narowa	これらは古くは/oa/[wa]であり再現もできるようだが 浄さん自身の気楽な発音は/gaN/と解釈される。
そのようになるわ	sogoaN narowa	
ウクへ行こう と言った	'ukiR 'ikogoaN te 'jara, 'ikogoaNiR te 'jaredo 'ikiNzjarara 「niR/と長い場合、誘われたが行かなかった、のように次に否定が来易い」。	
マグワン・マ ゴアニ・ マグワニーテ	スミ子さんは magoaN[magwɛn], magoa[magwɛ]と発音したと記憶している。 浄さん自身が持っている形は magoR, maguR のようである（大賀郷のか）。 浄さんは「逆接になるのかな」と言ったが浄さんの例文からは「実際には」か；	
発話；'oRkagoRsjaN 'ikoRwakedaroaga magoaN 'joRga 'aroNti 'ikiNzjarara 意味；大賀郷のほうへ行っただけだったが実際には用があるので行かなかった。 発話；suzumega toNdekitaRedoRmo 'oQpara'oRto 'omowaredo 発話；magoR mugeRkotodoaNte sogoaNsita 'okara 意味；雀が飛んできたが、追っ払おうと思ったが、実際には可哀想だからそのままにしておいた。		
ウの人に会う わ	'unohitoni 'a'owa	[awowa]が聞こえる。
会いたい	'aitakja	
会いに行こう	'aini 'ikogaN	「人も一緒に連れて行く時の言い方」。
窓を板で覆う わ	madoni 'ita'o kabuserowa,	「覆うは島では聞かない」。
私は今日もう帰るわ	wara kiRwa ha'ja(hara も可, harja は不可) ka'erowa	
ここで浄さんから「樫立/kasitate/[kwa[ɪtate]]という発音が聞かれた。単なる音声の揺れか。 あれは昨日はまだ無かった	'ura kiniRwa mada nakarara	
小島へ行こう	kozimjaR 'ikogaN	イー格でなく/qiR/, /sjaN/が出ることもある。
浜へ行こう	hamjaR derogaN	
庭（ニャー） へ行こう	njaRni derogaN	
港へ行こう	minatiR 'ikogaN	「kozimasjaN, minatosjaN でもいい」。
角へ行こう	kadiR 'ikogaN	
外へ行こう	sotiR 'ikogaN	「sotogiR でもいい」。
この辺りで「樫立は giR だ」という話が出るが、三根の geR と対応するのは gjaR のはずで、gjaR という発音も何回か浄さん自身から聞かれている。giR だと対応規則の例外になるかもしれない。		
三根へ行こう	micuniR, micunesjaN	「sjaN だと行き先の範囲が広い感じ」。
店へ行こう	miseR[misi:]	[fi:]でなく[si:]が聞こえたので/seR/と解釈した。
上へ行こう	wesjaN, sitasjaN, doQcjaN 'ozjaro, dokogiR 'ozjaro	
寝に行こう	neni 'ikogaN	
宇津木へ行こう	'ucukiR 'ikogaN	「'ucukisjaN, 'ucukigiR でもいい」。
海へ行こう	'umiR 'ikogaN	
見に行こう	miR 'ozjaru	「mini 'ikogaN でもいい」。
中国へ行こう	cjuRgokugiR	
砂漠へ行こう	sabakuqiR	
伊豆へ行こう	'izugiR 'izui[izi:]	「言うとなれば[izi:]。[zi:]でないので/zui/」。
イギリスへ行	'igirisugiR	「言うとなれば'igirisui[si:]」。

こう		
フランスへ行こう	huraNsugiR	「言うとすれば huraNsui[si:]」。
昨日へ帰ろう	kiniRsjaN ka'erogaN	
明日へ行こう	'asusjaN	
前へ行こう	mjaRsjaN	「遠距離は sjaN を使うことが多い」。
「saQkata は目の前にある先のことで、ひにちのずっと先だと mjaRsjaN, 'usirosjaN になる」。		
台所へ行こう	koQkuba	企世さんに対し浄さんが'joi と呼びかけていた。
中学校へ行こう	cjuRgaQkoRgiR, cjuRgaQkoRqjaR, cjuRgaQkoR'i	
高校へ行こう	koRkoR'i	
漁へ行こう	rjoR'i	
図書館へ行こう	tosjokaN'i	
交番へ行こう	koRbaN'i	
沢へ行こう	soa	
川へ行こう	koa	
湧き水	wakimizu	
落ちる水	taki	「nakaNtaki という地名がある」。
溜まる水	'ike	「池は三根にある」。「イブリガサワは池」。
井戸へ行こう	「井戸は無い。水汲み場はあったが牛が水を飲んだという言い伝えしかない」。	
水神様へ行こう	suiziNsama	「自分のウチに火の神様と水の神様を飾る」。
湧き水へ行こう	wakimiziR	
篩（フリー）へ乗せよう	huriR, 「金網。資料館には各種ある。粳・麦・胡麻をふるう」。	
畑（サティー）へ行こう	「聞いた。音声はツでもチでもない」。←/satei/[sats'i:]か。	
皿を洗った	saroa 'arawara	
名を聞いた	namjaR'jo kikara	
卵を割った	tamagoR[u:] warara	
物を壊した	monoR koRsita, 「これでもいいが、樫立は koasita だと思う」そうだ。	
子を産んだ	koR nasita	
みみずを踏んだ	memezume'o humara	
水をすすった	mizuR nomara	
湯を沸かした	'juR wakasitara	
右目を瞑った	miqime'o cuburara	「cumuru は使わない」。
酒を飲んだ	sakeR nomara	/eR/はやや狭い。古い世代の発音か。
手を振った	teR hurara	tiR が期待された。
話を聞いた	hanasjo kikara	
飯を食べた	mesjo kamara	「詩を詠んだは高等すぎる。si'o 'jomara」。
鼻血を出した	hanazjo dasitara	
恥をかいた	hazjo kakara	
字を書いた	zjo kakara, zi'o kakara	
海の幸を食べた	'umino monoR kamara	「海の幸とは島では言わない」。
土を掘った	cucjo horara	/u/の音声は非常に advanced（前寄り）。
血をぬぐった	cjo hukara	
花火を見た	hanabjo mitara	
海を渡った	'umjo watarara	
木を伐った	kjo kirara	
学生を見た	gakuseR'jo mitara	siR が期待された。
姉（アニー）を呼んだ	'aNdo'o 'jobara	

例を挙げた	reR'jo 'agetara	riR が期待された。
マサ爺を呼んだ	masaziR'jo 'jobara	
餅を食べた	mociR'jo kamara, mocjo kamara,	「同じ物を繋がりの中で長短にして使う」。
椎を伐った	siR'o kirara	
位牌を立てた	'ihjaR'o tateta	
前を見た	mjaR'o mita	
危険球を投げた	kikeNkjuR'jo	
焼酎を飲んだ	sjoRcjuR'jo nomara	
銃を撃った	zjuR'jo 'utara	
中学校を出た	cjuRgaQkoR'o detara	
父（トトー）を呼んだ	totoR 'joNda	※トトーという語が無いので「トトを」か。
量を計った	rjoR'o hakarara	
数千万を稼いだ	suRseNmaN'jo kasegara	「稼いだは kaseNda と言った」。
警官を呼んだ	keRkaN'jo 'jobara	kiR が期待された。
本を読んだ	hoN'jo 'jomara	
カノーを漕いだ	kanuR'jo kogara	
母（ホア）を呼んだ	hoa, hoawa	「母親か定かでないが聞き覚えがある」。
マッチがあるわ	maQciga 'arowa	
マッチを使って火をつけてくれ	maQcjo cukaQte hjo cukete kero maQcjo cukaQtoQciR hjo cuke'jare	
注意があるわ	cjuR'i'ga 'aruwa	「ciRto hanasitake kotoga 'arowa とも」。
注意をしてくれ	ここで「konjaRda（こないだ）」が出る。 cjuR'i'o 'unagasu, cjuR'jo sitakega（低速だと cjuR'i'jo sitakega になる）	
なおも注意をするわ	maNkara omini cjuR'i'o sodoRga（今からあなたに注意をするんだが）	
早く（モアミン）	moamiN, moamini	下記の「maQto ciRto」はもう1例確認された。
「waR maQto ciRto moamini 'aruki'jare, sogoaN 'juQkurizja cukiNnaka」。		
早く鰹釣りへ行って鰹を釣ろう	moamini kacuRcurini 'iQte kacuR'jo curogaN	
おとなしく（やをら）座っている	'joRra, 'joRraN, 'joRrani	
もう随分と長い時間がたった	「zuibuN は使わない、siQkari を使う」。	
hara noR kiR siQkari zikaNga tataru 'joR（はやもう今日はシッカリ時間が経ったよ） ha'ja noR zuRQto nagaRke zikaNga tataru 'joR（はやもうズーッと長い時間が経ったよ） 「noR はもうと同じような意味。途中に付く noR と文末に付く noR とは違う言葉」。		
椎（の実）を少し（コシ・チイト）食べるわ	「ciRto, kosi の意味は同じ。今の人は ciRto を使う」。	
風が有るわ	kazega 'arowa	
扇風機を買わせるわ	seNpuRkjo kawaserowa	
団扇で煽れるわ	'uciwade 'a'orerowa[aworerowa] 「'a'orowa もあるが意味が違う。食べると食べれるの違いか」。	
青い海が見えるわ	'a'oake[awoke] 'umiga meRrowa, 「榎立もメーロワだね」だそうだ。	
海が青いわ	'umiga 'awokja[awokja]	

有る物を使う わ	'aro monoR cukoRwa	
船が有るわ	hunega 'arowa, ここで「kiRroke (黄色い)」が出た。	
父 (ちち) と母 (はは) の 顔を思い出した	「toRcjaN, kaRcjaN という。ka'o は ka'o でいい」。 「子供の頃からテテオヤとかは聞いたことがない」。	
フタハライト コ	hutahara'itoko	「またいとこのこと」。
クツカワシ	kucukoasi	「蟬のこと」。
ジャーチキヤ	zjaRzikja (「美しい」)	この/zi/[zi]は子音も母音もハッキリ聞こえた。
ミヤール	mjaRre	「あがれ、食べなさい」。
シヤレ	sjare (「去れ」)	「waga suwaroNte 'omja sokoR sjare」。
オジャリヤロ アカ	'ozjari'jaroaka	「いらっしゃいましたか」。
発話; 'omjaRwa kiniR 'eRga mini 'ozjari'jaroaka? 'oso wara 'ikiNzjarara 意味; あなたは昨日映画観にいらっしゃったか? 嘘 (=いいや) 私は行かなかった。		
ヒサメル	hisameru	「片付ける」。
ベナル	benaru	「子供などが泣く」。
「'omjaR komori sitarinagara sogaN kodomoR benarasena」。		
デヤク	de'jaku (「囁く・喋る」)	「sogaNdoa hitono warukucjo de'jakuna」。 企世さん「人の悪口などをささやく、喋る」。

資料 6. 青ヶ島(2008a)

2008年夏の調査の主目的は金田(2001: 15-28, 39, 47)を検証することだった。調査項目は知識不足のため必ずしも厳選・洗練されておらず、また2009年秋の調査項目と一部で重複しているが、同一人物に再びお願いできた場合は時間の許す限り再確認を行っている。下表で調査項目と回答内容は必ずしも厳密に対応しない。以降の表も同様である。

表 27. 筆者による調査データ；青ヶ島(2008a)

調査項目	回答内容	備考
1	'ici	
2	niR	「koko'jo kazuR ka ... suNdesuka?」。
3	saN	
4	'joN	
5	goR	/go/[yo]。強く発音すれば[go]になるはず。
6	roku	
7	nana	
8	haci	
9	kuR	
10	zjuR	
100	hjaku	
1000	seN	
1匹	'iQpiki	/pi/[i]はやや無声化していた。
2匹	nihiki	/hi/は摩擦音が非常に強く聞こえた。
3匹	saNbiki	
4匹	'joNhiki	/hi/は摩擦音が非常に強く聞こえた。
5匹	gohiki	/go/[yo]。/hi/は摩擦音が非常に強く聞こえた。
6匹	roQpiki	
7匹	nanahiki	/hi/は摩擦音が非常に強く聞こえた。
8匹	hacihiki	/hi/は摩擦音が非常に強く聞こえた。
9匹	kjuRhiki	/hi/は摩擦音が非常に強く聞こえた。
10匹	ziQpiki	/pi/[i]は強く無声化していた。これまで/puki/と記録された物は実際にはこれか。
100匹	hjaQpiki	/pi/[i]はやや無声化していた。
1000匹	seNbiki	他に「hitocuki, hutacuki」が開かれた。
一ヶ月の最初の日	cuitaci[tsuytaʃi], cjeitaci[ʃeitaʃi]	[u]は前寄り。 「年寄りは[ʃeitaʃi]と言った」。
2日	hucuka	
3日	miQka	
4日	'joQka	
5日	'icuka	
6日	muika[muyqa]	直音は/#k, k, #g, g/[k, q, g~y, c]と相補分布。
2008年夏のデータから語例を引く；「kazuR, kinei, kuR, kei, koko, 'iQkagecu, hiki, roku, 'a'oke, koko, gaQzjou, gicigici, -, -, goR[yo:], 'icigacu, togi'aQte, sigure, 'iQkagecu, zjuRgonici」。2009年秋のデータから語例を引く；「quN[yun], geNnou」。語頭は軟口蓋で語中は口蓋垂の子音になる。		
7日	nanuka	
8日	'jouka	ou[ɔu]がやや広く聞こえる。古い世代の発音か。
9日	kokonoka	
10日	touka	
11日	zjuR'iciNci	
12日	zjuRniNci	

13日	zjuRsaNnici	
14日	zjuR'joQka	
15日	zjuRgonici	
16日	zjuRrokunici	
17日	zjuRsicinici	
18日	zjuRhacinici	
19日	zjuRkjuRnici	
20日	hacuka	
21日	nizjuR'icinici	
22日	nizjuRninici	
23日	nizjuRsaNnici	
24日	nizjuR'joQka	
25日	nizjuRgonici	
26日	nizjuRrokunici	
27日	nizjuRsicinici	
28日	nizjuRhacinici	
29日	nizjuRkjuRnici	
30日	saNzjuRnici	
31日	saNzjuR'icini	
一年の最初の月	'icigacu	「'iQkagecu, sjougacu」が聞かれた。
2月	nigacu	
3月	saNgacu	
4月	sigacu	
5月	gogacu	/go/[yo]。
6月	rokugacu	
7月	sicigacu	/si/[i]の中にやや[ci]が聞こえた。
8月	hacigacu	
9月	kugacu	
10月	zjuRgacu	
11月	zjuR'icigacu	
12月	zjuRnigacu	
20歳	hataci	
一年の最後の日	'oumisoka	
大声で歌お歌うわ	'ougo'ede 'uta'o 'utouwa	
火よ使うとはむそことだら		
なう皆でとぎあつていごん	nou miNnade togi'aQte 'ikogoni	
やうらうれい見てあろわ	'joura 'urei	
あうがしまのあおけうみだら	'ougasimano 'a'oke 'umidara	
あうばこにいえーろわ	'oubakoni 'jete, ここで「berou kamu 'joR」。	
ほーごーていけーろわ	'ou hoRgoRtei 'ikowa Qte, ka'erowa, 「お母さんの所に帰る」。	
ぶなりのきけいろわ(うなり?)	「'unari はある。怒っている人が'unaQte いた、とか」。	
むしゃうぶとわ(うとわ?)	musirono kotou mukasiwa mosjoudeQte 'iQtaNdesu 「'oziRsaN に習って作ったことはあるが同時代は余りやらない」。	
”母屋”、ばういえ	hoNke, bou'je	
”離れ”	'iNkjo	
”大さや”	boukunakutemo	
”小さや”	neQkokja	

” 道い” 出たろわ	miciR detara	
掬いながら		
” うきー” 行こごん	'ukiR 'ikogoni	
水神様	suiziN[suygin]	
すいび (ぶっちゃり金)	buQejarigane	「要らない物を買って来て使わないでおく様子」。
来年	raineNwa raineNde ... reRneN ^d re:nen] teQte	
[^d r]は破裂音化した[r]を表し単一の子音である。[^d re]は[de]とは音声が異なる。[^d r]の調音点は[t, d]に比べて非常に後部にあり「来年[rainen]」の[r]と調音点が一致する。ラ行始まりの単語がダ行で記録 (e.g.「蠟燭/dousoku/」) されてきたが、実はr/[^d r]だった可能性が高い。1つある録音の 0:25:58-。		
来月	raigecu	
再来年	saraineN	
再来月		
” 川い” 行こわ	kawa'e 'ikowa, koR'i 'ikowa	
ふたつの足でえーもわ	hutacuno 'aside 'eRmowa	
飲むねーだう	nomu	
” 山え” 行こわ	'jama'e 'ikogoN, 'jama 'ikowa, 'jameR 'ikogoni	
” 国い” 行こわ	kuniR 'ikogoni	
” 郵便局い” 行こわ	'juRbiNkjoku'e 'ikogoni	
” 店い” 行こわ	misei 'ikogoni	
島の” 外い” 行こわ	simano soto'e 'ikogoni, simano sotei 'ikogoni	
” 九州い” 行こわ	kjuRsjuR'i 'ikogoni	
” 千葉県い” 行こわ	cibakeN'e 'ikogoni	
” 坂う” のぶろわ	saka'o noborowa,	
” 血よ” あらうわ、 あろーろわ	ci'o 'ara'uwa, cjo 'arouwa, 「アローロワは今も使う」。	
” 水う” のもわ	mizuR nomowa	
” 手い” あげろわ	tei 'agerowa	
” 窓う” あげろわ	mado	
” 十よ” かぜいろわ	tou'jo kazo'erowa	
” パンよ” かもわ	paN'jo kamowa	pa が[ɸa]に聞こえる。
わー行きんなこーじや	wara 'ikiNnaka	
” 火は” 熱けじゃ	hiwa 'acukja, sjasja'i	
” 肉は” んんまけじゃ	'NNmakezja, nikuwa 'NNmakja	
” 毛は” 細けじゃ	hosoi	
” 外は” 暗けじゃ	sotowa kurakezja	
うの” 鱈は” 大けじゃ	kacu'o, kacuR, kacuRcurini 'ikouzja	
この” 新聞は” ふる けじゃ	korewa hurusike siNbuNdara, 「古きやと古しきやは意味は同じ」。	
一昨日	'ototoi, saki'ototoi	
昨日	kinei	
今日	kei	
明日	'asita	あとで「'asa」も聞かれた。
明後日	'asaQte	
” 明後日の次の日”	saNnasaQte	
” 明後日の次の次の日”	si'asaQte	「sou sou」という言葉が出た。
朝	toNmete	
昼		
夕、夜、夕べ	'joNbe, keino 'joQbe	

朝飯	'asake	
昼飯	hjoura	
夕飯、晩飯	'jouke	
朝日、夕日		
春が来たら	haruga kitara	「cigoukara」という言葉が出た。
梅雨の雨は強きゃ	cu'juno kotou 'sigure, njuRbai, 'ame, cu'jokja	
夏が来たら	nacu	
夏はほたうってほたうって	nacuwa hotouQte hotouQte, nacuwa hotourowa	
秋が来たら、冬が来たら	'aki, hu'ju	
冬は寒けじゃ、風にこげいろわ	hu'juwa kogeirowa, kazeni kogeirowa, 'imawa miNna samukjaQte 'i'udaidou imano hitowa」。	
丁寧だら	'ano hitowa teineidara	
” 陰い ” なぶそわ	nabusu	「隠す」。 「cukoudaroune」という言葉が出た。
大賀郷	'oukaqou	
三根	micune	
坂下	sakasita	
八丈島	hacizjouzima	
樫立	kasitate	
中之郷	nakanogou	
末吉	su'e'josi	
坂上	saka'u'e	
西郷	nisigou	
休戸郷	'jasuNdo	「'jasuNdoumo cukaQterusi」。
青ヶ島	'ougasima	「mukasino hitowane」。
” へっつい様 ” (かまどのこと)	heQcjei	「かまどのこと」。
		「koko'e nabe'o su'ete koQkara maki kubete mosuno'o heQcjei」。
屁	he, heQpirigosi(「力の弱い者が monou kacuNde hurahura する」)	
随分長け話だら	naqake, naNgake, zuiibuN[zuybun] naqake hanasidara	
西瓜おかもわ	suika'o[suykao] kamowa	
たうけ島がめいろわ	touke simaga meirowa	
へいるめのまこわ (飛ぼわ?)	heirumega makowa, 「cjoucjome のこと」。 「maku のは cjou か toNbou で hikouki ではない」。	
白蟻め		「白蟻はそもそも居ない」。
白鳩め		「白鳩はいない」。
ほ一き	hoRki	
よ一も	'joRmo	「イケノサワに植えたが生らなくなった」。
岩	'iwa	
穴	'joR	「穴のこと」。
洞		「ホラはある」。
石、砂、粒		「イシ・スナ・ツブはある」。
裸足	hadasi	「hadoRsi って言ったろう昔は恐らく」。
裸、” 背中 ”	hedaka	
” 兄弟姉妹 ”	kjoudai, kjoudeR, 'otoRne	
” 兄さん ”	'aNcjaN	
” 弟 ”	kjoudai	
” 姉さん ”	'iNne	
” 妹 ”	kjoudai	
” 父さん ”	'otoQcjaN	
” お爺さん ”	'ousama	
” 奥さん ”	'oQkasaN	

”お婆さん”	basama	
はつ一の鯉よあがってたまうれ	hacugacu'o, 'agaQte tamoure	
魚、飛び魚	'jo, tobi'jo	
おめーが裂こー服う縫うじゃ		「裂くという言葉はある」。
未調査項目；「うーどのことはありんなから」、「こうどに予う思う親は少なきゃ」		
ふんだうしよ締めとーじゃ	huNdotsjo simena'osite koi tomo, kacu'ocurini 'ikotokini	
うのあっぱの口にはうでける	'aQpa(女の子), kuwasero, tabete, houmeru, hasaQde houmeru	
酒い飲めだう酔いんなこ人だら	sakei nomedou 'joiNnoRhitodara	
体おかうしてまるぼ人もあらら	marubu	
伏してあろわ、ふしたろわ	husitarowa	
燃してあろわ、むしたろわ	musitarowa	
道よ通してたまうれ	mici'o tousite tamoure	
腕い回して運動したら	moRsite	
明日葉	'eRtaba	
未調査項目；「話してあろわ、話したら」、「干してあろわ、干したら」、「飲ませてあろわ、飲ませたら」、「酒い飲まんねーや酔って来たら」、「こけいわしとってい夕飯あがれ」、「酒いのもーとき(のまろとき?)」、「そごんどー事はしんなこだら」		
似がましけ言葉は言いんなこだら	nigamoRsikja, nitarowa	
すーろわ、ひっちゅーろわ	「スールは飲むこと」、hiQcuRru	
塩、潮	sjo, 'usjo(塩水)	
塩う舐めろわ	sjou nameroka	
未調査項目；「遠け潮い船い出したら」、「今日の潮は速けじゃ」		
庭	nja	「鶏は natorime」。
庭お作ろわ	nja'o cukurowa	
庭え出ろごん	njeR deroqoni	「njaR'e deroqoni とも」。
うの庭は広きゃ	hirokja	
家	'je	
未調査項目；「家い建てろわ」、「家いけーろごん、わけいけーろわ」、「うの家はばうきゃ」、「木」		
木よ切ろわ	ki'o kirowa	
未調査項目；「うの木い走れ」、「うの木はふときゃ」、「火」		
火よ消そわ	hi'o kesowa	
未調査項目；「虫めが火い寄ってまるぼわ」、「火は熱けだら」、「海」		
海よおでてへーりんなこ子だら	ここで「berou kamu 'joR」。	
「'umi'o 'odeite heRriNnoR kodara, 'umi'o 'odegaQte heRriNnaka, kowagaQte」。		
海いへーろわ	'umiR heRroqoniR Qte	
昨日の海は荒れてあらら	kineino 'umiwa 'arete 'arara	
土地	「hatake の zisjo のことを toci」。	
未調査項目；「土地よ買うわ」、「この土地い移って来とーじゃ」、「土地は財産とも言おわ」		
字よ書こわ	zjo kakowa	
字よ書から	zi'o kakara	
字よ書きんなか	zi'o kakiNnaka	

字よ書きんなからら	zi'o kakiNzjarara	
字よ書くなうわ、書くなうじゃ	zi'o kakunouwa, zi'o kakunouzja	
字よ書きげ一なら (書くようだ)		ここで「berou kamu 'joR」。
日が良っきゃ、良け日だら	higa 'joQkja, 'joke hidara	
日が良からら、良け日だらら	'jokarara, 'joke hidarara	
日の良かりんなか	hino 'jokariNnaka	
悪け日だら	waruke hidara	
今日の日は良かりんなから	keino hiwa 'jokariNnakara	
悪け日だらら	waruke hidarara	
日が良かんなうわ	higa 'jokaNnouwa	
良け日だんなうわ	'joke hidaNnouwa	
日の良かりげ一なら		
貧乏	biNbou	
頑丈	gaNzjou	「仕事の場所により gaQzjoudara とも聞いた」。
痣(あざ)	'aza	
”馬鹿”	doNgo, nuke	
”便所”	kaNzjou	
酒い買って来と一じゃ	sakei kaQte kitoRzja	
子が泣って大人がそ一ごわ	koga nakuQte 'otonaga soRgowa(怒る)	
字よ書って壁に貼ろわ	kaQte	
はやりやめ一よ病っであろわ	'jaNde 'arowa	「昔は'jaQde 'arowa」。
うの草お刈ってける		「今も使ってる言葉」。
海に浮かって沈みんなか	'ukaNde	
台風が来と一で、家のきしっであろわ	taihuRga kite huite[ɸuyte] kite, 'i'ega kisiNdarowa, 'i'ega gicigici 'jurete	
死んでけ一りんなこ人	siNda hitowa ka'erenai'Qte	
うの木はかしやっであろわ	katamuite[katamuyte] aru koto, 「カシヤグは katamuite」。	
悲しっで伏してあら	kanasiNde	
この家に住って 40 年になるだら	kono 'i'eni suNde 'joNzjuRni narodara	
家を継って船主になら	'je'o cuNde	「フナヌシという言葉はある」。
あすっで暮らしたら	rakuna hitono kotodesjou, 'asuNde	
うの人はまるっだろわ	maruNdarowa	
金い稼っで稼っであろわ		「稼っで稼っでという言い方はできる」。
大声でよぼ一ろわ	'ougoide 'joboRowa	
われにへいな	wareni heina	「吠えて怒ること、私に大声で怒鳴るな」。
うの家は金持ちだら	kanega na'i	
未調査項目；「この包丁は砥っであろわ」, 「飛行機が飛っで行こわ」, 「勝負に勝ちてけ一ろわ」		

酒い両手に持ちてけ ーろわ	moQte	
蝶々めい針で刺して 小箱にいえーとこわ	hakusei mitaini site 'jaru koto dakara 'jeR 'arudesjou haride sasite beQconi[bessoni] naQte 'jeR siNde 'jeR kireini naQte 'irukara	
貸してけとー鉛筆う けーそわ	'eNpicu	

資料 7. 榎立(2008)

調査の主対象（伊勢崎陽子さん）と副対象兼調査協力者（菊池浄さん）が存在し、意見の対立が起こりうるという点で榎立(2008)は末吉(2009)と状況が似ている。どちらの場合も調査協力者の同席は調査を実現する上では必須と考えられた。末吉(2009)の場合は副対象兼調査協力者から「違うと思ったことが幾つかありました」と調査終了後に告げられたが内容の確認を取る時間は無かった。同様のことがここでも起こりうるが、こちらの場合は「譲る」のは女性である主対象の方である可能性が高い。通例通り、以下では主対象と相違する発言等をした場合のみ副対象の発言を記名して区別する。また、調査項目の全体像は上表にだいたい示したので、これ以降の表では回答内容の得られなかった調査項目は原則として省略する。

表 28. 筆者による調査データ；榎立(2008)

調査項目	回答内容	備考
大声で歌お歌おわ	'oRgo'ede 'utoa 'utoRwa noR	
火よ使おとはむそことだら	hjo cukoRtoki, cukoRtowa musokotodara	
の一皆でとぎあつていこがん (※「の一」は「尚」のほすが、 「ね」に当たる語と解釈された)	noR miNnade togi'aQte 'ikogoaN[e ^w en] miNnade, miNnade togite 'ikuka Qte meNnade togi'aQte 'ikogoaN 'ikogoaN	
「ああ、「noR」って、「'omjaR soNdaR(そうだ)? noR?」ってその、ああ、その「noR」かな?」。 浄さん「noR」ってのは使ったり使わなかったり。だからいつでも言葉の先に付くわけではない。」		
よーらうりー見てあるわ	'joRrani 'urjaR mite 'arowa, 'ureR[ɾ:]	
「じーっと見ているよってことだ」。※例文で最初に出た'urjaRは*'urewaと見られる。		
おーがしまのあおけうみだら	'a'ogasimano 'a'oke 'umidara(※'a'o[awo].)	
浄さん(※以下敬称略)「'oNgasima	は侮辱した表現。青ヶ島の人はその言われると腹を立てる。	
おーばこにいれろわ	'oRbakoni, boRke hakoni 'irerowa	
ほあごあてーきあろわ	hoagoateR[ɾ:] kjaRrowa, 「お婆さんの所へ帰っていく」。	
ぶなりのきけーろわ(うなり?)	bunarino kikiR[ɾ:]rowa(風揚げのとき buRbuR, buNbuN)	
むしよーぶとわ(うとわ?)	mosjoR butowa(座るモシヨ)	
" 母屋"、ぼーいえ(ぼーけ?)	boRke'e	/g, Q, N, R/とあるのは/g, Q, N, R/の意。
" 離れ"	'iNkjozjo	「ここじゃ hanare は言わない」。
" 大きや"、" 小さきや"	boRkja(大), boRsugiru, neQkokja(小), ciNgokja(里芋が小)	
" 道い" 出たろわ	浄「dokoni waso?」, miciiR detarowa	
掬いながら	kumu(水を), sjakuru(米・麦を), 浄「sjakuQtoQciR」	
" うきー" 行こがん	'ukiR 'ikogoaN, 「beNkjoRdanaR(物知りだなあ)」を聞いた。	
水神様	suiziNsama	
すいび(ぶっちゃり金)	buQcjaru(捨てる), 浄「buQcjarigane(捨て金)」	
来年	zjaRneN	音声は[dʒa:nen]。
来月	raigecu	
再来年	saQzjaRneN	「saraigecu は言わない」。
" 川い" 行こわ	「kawa は kawa」 浄「kawjaR, kawasjaN, kawaqiR[ɾ:] 'ikowa」。	
ふたつの足でやーもわ	hutacuno 'aside 'jaRmowa	
飲むにあどー	sakeR[ɾ:] nomedoR, nomiNnoRka	
" 山あ" 行こわ	'jamjaR 'ikowa	
" 国い" 行こわ	kuniR 'ikowa	
" 郵便局い" 行こわ	'juRbiNkjokiR 'ikowa	
" 店い" 行こわ	miseR[sɾ:] 'ikowa	
島の" 外い" 行こわ	simano soteR[ɾ:] 'ikowa, 浄「聞かれる中身が大き過ぎる」。	
" 坂あ" のぶろわ	sakoa noborowa	

” 血よ” あろーわ	cjo 'aroaruka	
” 水う” のもわ	mizuR nomowa	
” 手い” あげろわ	teR[t:] 'agerowa	
” 窓お” あけろわ	madoR 'akerowa	
” 十よ” かぞえろわ	toR kazo'erowa	
” パンよ” かもわ	paN'jo kamowa	
わー行きんなこあじゃ	wara 'ikiNnaka, wara 'ikiNnakaR	
” 火は” 熱けじゃ (の一)	hiwa 'acukezja noR	
” 肉は” んんまけじゃ	nikuwa 'NNmakja	
” 毛は” 細けじゃ	kewa hosokezja	
” 外は” 暗けじゃ	sotowa kurakezja, kurakja, sotowa maQkuradoRzja	
うの” 鱈は” 大けじゃ	'uno kacuRwa boRkezja	
この” 新聞は” ふるけじゃ	kono siNbuNwa hurukezja, hurukja noR, hurusike kimono 浄「前に付く時は hurusike で後に付く時は hurukja」。	
一昨日	'uciciR	
昨日	kinoR[u:]	標準語の樫立訛りか? 後で kiniR も出る。
今日	keR[kr:]	
明日	'asu	
明後日	'asaQte	
” 明後日の次の日”	saNnasaQte	
” 明後日の次の次の日”	'joNnasaQte	
朝	toNmete	
昼	hiru	
夕	'joNbe, 'juRbe(昨日の夜か?), 'juRgata, kuregata	
夜	'joru	
朝飯	'asamesi	
昼飯	hirumesi	
夕飯、晩飯	'juRmesi, 'joRmesi, baNmesi	
夕日	'juRhi	太陽は「'ohisama, tai'joR」。
春が来たら	kitoRzja, suikano tanewa haruga kitaraba(kitaRba) maki'jare	
梅雨の雨は強きや	cu'ju	
夏のほとーりは暑けじゃ (※oR[o:~u:].)	nacuno hotoRriwa 'acukja noR, 「暑さが暑い」は変。 nacuwa hotoRrowa noR, hotoRQte hotoRQte	
秋が来たら、冬が来たら	'aki, hu'ju	
冬は寒けじゃ、風にこぎーろわ	hu'juwa samukezja, kazega kogiRrowa	
丁寧だら	teRneR[t:nr:]dara noR	
” 陰い” なぶそわ	kagiR(余り使わない) nabusowa, 'ukiR nabusitokara	
大賀郷、三根	'oRkagoR, micune	
坂下	sakasita	
八丈島	hacizjoRsima	
樫立、中之郷	kasitate, nakanogoR	
末吉	su'e'josi, seRsi[sr:si]	
「'oR[u:]mukasinohitotaciwa siRsi Rte」。	これは恐らく、古形*siesi をこう表現しているのだろう。	
坂上	saka'u'e	
” へっつい様” (かまどのこと)	heQcui	
屁	hiRri, hiRrjo hirowa	
随分長け話だら	kibinoariR nagake hanasidara noR, zuibuN, kibigoariR	
西瓜あかもわ	suikoa kamowa	
とーけ島がみーろわ	toRke simaga mierowa, (※古い音韻/ie/が出たようだ。)	
ひーるめのまこわ (飛ぼわ?)	hiRrume(蛾)no hiNmakowa, 「maku は使わない」。	
白蟻め	sjoarime	
白鳩め	「全部まとめて hatome」。	
ほあき	「hoaki[xu'eqi] da 'jo no」 だそう。cf. 樫立(2009)。	

よあも (よーも?)	'joamo[jo ^w emo], 浄「明らかに'jaRmo」。
陽子さんの発音では/oa/の母音が段々広くなっていくのが分かる。浄さんに同意しつつ実際には/oa/だ。	
岩	'iwa
穴	zimeNsjaN no 'ana
洞	hora
石、砂、粒	浄さん「'isi, suna, cubu」。
裸足	hadoasi
裸、”背中”	hedaka 「背中のこと。裸は hadaka」。
”兄弟姉妹”	kjoRzjaR, 'otoane dazja
”兄さん”、”弟”	'aNcjaN 「弟は不明」。
”姉さん”、”妹”	'aNdo 「妹は不明」。
”父さん”、”お爺さん”	'otoRcjaN, ziRcjaN(浄さん曰く), 'oRcjama
”奥さん”、”お婆さん”	'jomesaN(浄さん曰く), kaka
はつーの鰹よあがってたもーれ	hacuno kacuR'jo 'agaQte tamoRre, 「魚'jo, 飛魚 tobi'jo」。
うんが裂こあ服う縫うわ	'omiga sjabakoa hukuR nu'ozja
浄「'omiga hiQcjabakoa(陽子さんは不使用) hukuR nu'owa」。(※nuRwa は出なかった。)	
うーどんのはありんなから	浄「sogoaNdoa kotowa 'ariNzjarara, nakarara」。
ここで陽子さんから soNda が聞かれ、浄さんに同意する文脈だったので「そうだ」の意と考えられた。	
うーどに子う思お親は少なきや	浄「sogoaN koR 'omoR 'o'jawa sukunakja」。
ふんどーしよ締めとあじゃ	浄「huNdosjo simete 'arozja」。
口にほほめて喋ろはわるけじゃ	浄「kucini hoRmeru は赤ん坊の口に入れてあげること」。 浄「kucini hoRmeraretoQciR sjaberowa damedara」。
酒い飲めど一酔いんなこ人だら	sakeR[ɪ:] nomedoRmo 'joiNnoRhitodara
体あこあしてまるぼあ人もあらら	karodaa warukusite maruboa hitomo 'arowa mugeR[ɪ:]kotoni
伏してあるわ、ふしたろわ	浄「kosi'jamide husite 'arowa」。
燃してあるわ、むしたろわ	浄「hjo musite 'arowa」。
道よ通してたもーれ	浄「micjo toRsite tamoRre」。
腕い回して運動したら	浄「'udeR[ɪ:] moasite 'uNdoRsitara」。
明日葉	陽子さん「檜立は'jataba」だそうだ。
話してあるわ、話したら	hanasite 'arowa, hanasitara
干してあるわ、干したら	hosite 'arowa, hositara
飲ませてあるわ、飲ませたら	nomasete 'arowa(飲ませてるところ), nomasetara(飲ませた)
酒い飲まんにあや酔って来たら	sakeR[ɪ:] nomisugite 'joQparaQtara, 浄「nomaNnjaR'ja」。
こきー来てよーけみあれ	浄「kokiR[ɪ:] wasitoQciR 'juRmesjo mjaRre」。
酒いのもあとき (のまるとき?)	浄「sakeR[ɪ:] nomoatoki」、陽子さん「nomotoki」。
そごんどあ事はしんなこたら	kasitatewa sogoaNno kotoR siNnaka 'joR Qte 'i'ukara noR 浄「sogoaNdoa kotowa siNnoadara」。
似がましけ言葉は言いんなこたら	浄「nite 'aro kotobawa 'iRNnoRmonodara」。
すーろわ、ひっちゅーろわ	suRowa(お茶), hiQcuRowa(酒), hiQcuRri'jare
塩、潮	sjo, 'usjo
塩お舐めろわ	sjoR namerowa
潮い船い出したら	浄「huneR[ɪ:] dasitara, 檜立は漁が無いから船の言葉は少ない」。
今日の潮は速けじゃ	keR[ɪ:]no sjowa ha'jakezjaR
庭あ作るわ	nja cukurowa ヽ格が出なかった。「庭は nja」。
庭あ出るがん	浄「njaR'i derogaN」。
うの庭は広きや	'uno njaRwa cja 'a sokono niwawa hirokezja Qte 'i'u 'imika 浄「'uno njawa hirokja noR」。
家、家い建てろわ	'je, 'jeR[ɪ:] taterowa
家いきあるがん	浄「'jeR[ɪ:] kjaRrogaN, waqiR kjaRrogaN」。
浄「kibinoariR kasitateR[ɪ:] beNkjoRsite beNkjoRsite」。	但し勉強のンは Q に近い。

うの家はぼーきや	'ono 'ewa boRkja noR, [o]に関して以下に引用する；
3つある録音ファイルの2つ目の1:30:37-； 浄；'uno 'ewa boRkja noR は、いいんだよの？ 陽子；'uno'e Qte kasitatedewa 'uno'e Qtewa 'iRNnaka noR ? 'uno'e Qte 'i'u ? 浄；'N ? 'ani Rte 'i'uzjaroR 陽子；'uNmag'aNte 'i'udaroR 'ono 'ono 'ewa boRkja noR 【'uNma は末吉(2009)では曾祖母】 浄；あ、'ono だ、'ono だ、うん。 陽子；'ono っていうと思うけど。 浄；'u じゃなくて'o だ。 陽子；慳立では、'o。 調査者；こちらも'o ですかひょっとして。 浄；うん？うん、そう。 陽子；'ono 'ewa boRkja noR 浄；'ono nja でもいい。そうそう。'o がいいかもしれない。'o にしたほうがいい。 以上のことから、コソアドのア系列に当たるウ系列の'u はこれ以外も全て'o か。	
木	[k ^x iwa k ^x i k ^x iron], 浄「kiwa kidana」。
木よ切ろわ	[k ^x jo k ^x irowa], 陽子さんの発音に軽い摩擦音が聞こえる。
うの木い走れ	'ono kiR hasire, 浄「sjaN · cjaN を付けたほうがいい」。
浄「'uQcjaN hasirodoR, no ? 'oQcjaN hasirodoRzja, doQcjaN hasirodoR ? , 'aQcjaN koQcjaN」。	
うの木は太きや	'ono kiwa hutokja noR
火よ消そわ	浄「hiwa hidakedo, sono hjo kese, hjo kesowa」。
虫めが火い寄ってまるぼわ	浄「musimega hiR 'joQte maruboa, まあ悪くはないな」。
浄「musimega hisjaN kitoQciR maruboa dakara, hino hoRsjaN kitoQte marubu Qte. sjaN っの は方向性を指し示す、なんだか副詞だかなんだかに当たるわけだから、それが、sjaN がくっ付く とき、 doQcjaN 'aQcjaN koQcjaN migisjaN hidarisjaN 'u'esimasjaN sitasimasjaN. の？」。	
火は熱けだら	hiwa 'acukedara
海	浄「'umiwa 'umidana」。
海よおでてひありんなこ子だら	浄「'umjo 'odete[odite] hjaRriNnoR kodara」。
上記の[odite]は青ヶ島(2008a)の菊池義行さんの発音と併せて考える必要がある。	
海いひあろわ	浄「'umiR hjaRrowa」。
昨日の海は荒れててあらら	浄「kinoRno 'umiwa 'arete 'arara」。
土地	浄「tociwa zimeNka, waga'jano zimeN」, tociwa tocidoaga
土地よ買おわ	浄「kono toejo 'uri'jare, toejo ka'owa」。
この土地い移って来とあじや	kono tociR 'ucuQte kitoazja
土地は財産ともよーわ	tociwa zaisaNtomo 'jowa
字よ書こわ	浄「zjo kakowa」。
字よ書から	zjo kakara 浄「kakiNnaka という形は無い」
字よ書きんなか	zjo kakiNnaka 浄「今書かない、未来も含めて」。
字よ書きんなからら	浄「zjo kakiNnakarara」(私はあの時字を書かなかった)。
字よ書くの一じゃ	zi'o kakunoRzja, 「字を書くでしよう」。
字よ書きぎあなら(書くようだ)	浄「zi'o kakigenara, 字を書くでしよう」。
日が良つきや、良つけ日だら	higa 'joQkja, 'jokehidara
日が良からら、良つけ日だらら	浄「higa 'jokarara, 'jokehidarara」。
日の良かりんなか	higa 'jokariNnaka, 浄「'jokehizjanakarara が良い」。
わるけ日だら	浄「kjoRwa teNkiga waruke hidara」。
今日の日は良かりんなから	kjoRno hiwa 'jokunakarara
わるけ日だらら	浄「kiniRwa teNkiga waruke hidarara」。
日が良かんの一わ	浄「higa 'jokaNnoRwa」。
良つけ日だんの一わ	'jokehidaNnoRwa
日の良かんぎあなら	浄「'asuwa 'jokehi, 'jokarigenara」。
貧乏、頑丈、痣(あざ)	biNboR, gaNzjoR, 'aza
”馬鹿”	doNgo, nuke, nukesaku, baka
”便所”	kaNzjoR 浄「kaNzjo, kaNzjoRsiba(尻を拭く草)」

酒い買って来とあじゃ	sakeR[ɪ:] kaQte kitoazja
子が泣ってそあごわ	koga naite soagoa(うるさい), 浄「どっちがうるさいか不明」。
字よ書って壁に貼ろわ	浄「zjo kaite kabeni harowa」。
はやりやみあよ病っであるわ	浄「ha'jari'jamjaR'jo 'jaNde 'arowa」。 陽子さんの反応を見るに、「流行病」という単語は無さそう。
うの草あ刈ってける	浄「'uno kusoa kaQte kero, 'o でも'u でも全く違いはない」。
海に浮かっで沈みんなか	'umini 'ukaNde sizumiNnaka
台風が来とあで、家のきしっであるわ	taihuRga kitoade 'i'eno kisiNde 'arowa
死っできありんなこ人	maruNde kjaRriNnoRhito 浄「'unohitowa 'adaN si'jaro? hara marubara」。
うの木はかしっであるわ	浄「'unokiwa kasjaQde 'arowa, 傾いて」。
悲しっで伏したらら	kanasiNde husite 'arara
この家に住っで40年になら	kono 'i'eni suNde 'joNzjuRneNni narodara
家を継っで頭首になら	浄「'i'e'o cuide 'atocugini narara」。
あずっで暮らしたら	'asuQde, 浄「'asuNde kurasitarowa, 時々'asuQdeを聞く」。
うの人はまるっであるわ	'anohitowa maruNdarowa
金い稼っで稼っであるわ	'orawa kane'o kaseQde kaseQde suQciR'ja Qte 'jo 'imika
大声でひーてよぼあろわ	浄「hiRkuruR, hiRte, wara hiRNnaka, wareni hiRna」。
うの家は富っであるわ	浄「'uno'ewa kanemocidara, kanega 'arowa」。
この包丁は砥っであるわ	浄「kono hoRcjoRwa toide 'arowa」。
飛行機が飛っで行こわ	浄「hikoRkiga toNde 'ikowa」。
勝負に勝ちてきあろわ	浄「sjoRbuni kaQte kjaRrowa」。
酒い両手に持ちてきあろわ	sakeR[ɪ:] rjoRteni moQte kjaRrowa
蝶々みい針で刺して 箱にいれときゃ良つけじゃ	hjoRhoN, cjoRcjome'o haride sasite hakoni 'iretokowa
貸してけとあ鉛筆うきあそわ	浄「kasite ketao 'eNpicuR kjaRsowa」。

資料 8. 中之郷(2008)

話者（福田栄子さん）は中之郷(2009)の話者の1人と同一人物である（2008年に続いて2009年も調査をお願いしたのは他に青ヶ島(2008a)の話者、檜立(2008)の話者の1人）。

表 29. 筆者による調査データ；中之郷(2008)

調査項目	回答内容	備考
1	'ici	
2	niR	
3	saN	
4	'joN	
5	go	
6	roku	
7	sici	[ʃi]の中にやや[çi]が聞こえた。
8	haci	
9	kjuR	
10	zjuR	
100	hjaku	
1000	seN	
1匹	'iQpiki	
2匹	nihiki	
3匹	saNbiki	
4匹	'joNhiki	
5匹	gohiki	
6匹	roQpiki	
7匹	nanahiki	
8匹	hacihiki	
9匹	kjuRhiki	
10匹	zjuQpiki	
100匹	hjaQpiki	
1000匹	seNbiki	
”一ヶ月の最初の日”	'iciNcime	「祖母は cuitaci を ciRtaci と言った」。
2日	hucukame	
3日	miQkame	
4日	'joQkame	
5日	'icukame	
6日	muikame	
7日	nanukame	
8日	'joRkame	
9日	kokonokame	
10日	toRkame	
11日	zjuR'iciNcime	
12日	zjuRniNcime	
13日	zjuRsaNnicime	
14日	zjuR'joQkame	
15日	zjuRgoNcime	
16日	zjuRrokuNcime	
17日	zjuRsiciNcime	
18日	zjuRhaciNcime	
19日	zjuRkuNcime	
20日	nizjuRNcime	/R/は通常より短く発音された。

21日	nizjuR'iciNcime	
22日	nizjuRniNcime	
23日	nizjuRsaNcime	
24日	nizjuR'joQkame	
25日	nizjuRgoNcime	
26日	nizjuRrokuNcime	
27日	nizjuRsiciNcime	
28日	nizjuRhaciNcime	
29日	nizjuRkuNcime	
30日	saNzjuNcime	/R/は省略されたようだ。
31日	saNzjuR'iciNcime	
”一年の最初の月”	'icigacu	
2月	nigacu	
3月	saNgacu	
4月	sigacu	
「婆ちゃん達は別の発音をしていた曖昧な記憶がある。恐らく siRtaci かそれに類する感じのもの」。		
5月	gogacu	
6月	rokugacu	
7月	sicigacu	
8月	hacigacu	
9月	kugacu	
10月	zjuRgacu	
11月	zjuR'icigacu	
12月	zjuRnigacu	
一重	hito'e, 'icizjuR	/hi/[xi]にはやや[i]が聞こえた。
「hito'eno kimono'o kirogaNみたいな感じ。hara moR hito'edara 'joR とかいう感じ」。		
二重	huta'e, nizjuR	「重箱は'icizjuR, nizjuR」。
三重	mi'e	
四重	sizjuR	「四重以降は表現として使わない」。
五重	gozjuR	
六重	roku'e	
七重	nana'e	
八重	'ja'e	
九重	kokono'e, ku'e	「分からない」。
十重	zjuR'e	「分からない」。
二十重、百重、千重		「分からない」。
二十歳	nizjuQsai	
「nizjuRni naraoNte」と言っていて、hataci は方言では使わなかった」。		
三十路	saNzjuR	
”一年の最後の日”	「同時代は'oRmisoka で祖母らは'icineNno 'owaridoaNte」。	
大声で歌お歌おわ	'oRgo'e 'uta'o 'uta'ogaN(複数で), 'uta'owa(自分が)	
火よ使おとはむそこと だら	hjo cuka'otowa musokotodara, hjo musicukerowa 'irorini hjo musicukerogani, kjo 'eRte ha'jaku muse muse	
の一切でときあつてい ごん	noR minade(miNnade) togi'aQte 'ikogaN('ikogani 'joR)	
「noR は挨拶みたいな言葉。sogaNdoazja noR, miNnade 'ikogaN noR など、誘い言葉の一つ。最初に付けても最後に付けてもいい。「皆が集まって行く場所がお祭りなど分かっている時に使う」。「toji'aQte は誘い合って」。「年相応で表現が違う。miNnade 'ikogani 'joR とか mina haR moR ha'jaku 'ikogani とかは乱暴。noR miNnade 'ozjari'jarogani 'joR は目上に対して」。		
よーらうりー見てあろ わ	'joRra'uriR mite 'arowa, 「静かにあの人を見ている」。 miNnade 'uriR mite 'arogani 'joR, 「皆であれを見てよう」。	
おーがしまのあおけう みだら	'oRgasimano('a'ogasimano) 'a'oke 'umidara	

おーばこにいえーろわ	kome'o 'oRbakoni 'irerogaN, 'eRrogaN 'joR, ciRto	
ほあごあてーきあろわ	kjaRrowa, 「よく分からない」。	
ぶなりのきけーろわ (うなり?)	bunariga kikiRte kitara, 「凧に付けた紙が風に反応する音」。	
「'areR 'unaQte kitoazja, 台風で風がぶつかり響く音を bunaQte('unaQte) kitara 'joR と言う」。		
むしよーぶとわ (うとわ?)	musjoR(蓆) hike, 「musjoR butowa は musjoR cukurowa」。	
” 母屋”、ぼーいえ (おーいえ?)	boRke'e	「boRke'eni 'ikogaN」。
” 離れ”	ciNgoke'e	
” 大さや”、” 小さきや”	boRkja, ciNgokja, ciQsakja	
” 道い” 出たろわ	micini detarowa 'joR, micini detaroNte	
掬いながら	mizuR kumogani(水を), ha'jaku sukure(米を) 「sjakure は引っ張るという意味」。	
” うきー” 行こごん	'ukiR 'ikoganiR, 'ukiR 'ikogaN 'joR	
水神様	mizugamisama	
すいび (無駄遣いのこと)	buQcjarigane	「buQcjaru は捨てるということ」。
来年	raineN	
来月	raigecu	
再来月	cugino cuki	
” 川い” 行こわ	koani 'ikowa	「小さな水路は hora と言い koa とも」。
「koani kjoRwa 'ikogaN ha'jaku sasaNde 'ikogaN のササンデは頭に乗っけてという意味」。		
ふたつの足でやーもわ	'una hutacuno 'asiga 'arudoaNte ha'jaku 'jame	
飲むにあどー	sake'o nomunjaRdo, 「飲むんだろうけれども」。	
” 山あ” 行こわ	'jamjaR 'ikowa	
” 国い” 行こわ	kuniR 'ikowa	
” 郵便局い” 行こわ	'juRbiNkjokuni 'ikowa, 'juRbiNkjoku'iR, 'juRbiNkjoku'e	
” 店い” 行こわ	misiR 'ikowa	
島の” 外い” 行こわ	simano sotoni(sotiR) 'ikowa	
” 九州い” 行こわ	kjuRsjuRni(kjuRsjuR'iR) 'ikowa	
” 千葉県い” 行こわ	cibakeN'iR 'ikowa	
” 坂あ” のぶろわ	sakoa 'noborowa, 'uno sakoa noborogani	
” 血よ” あろーわ	cjo 'aroRwa	
” 水う” のもわ	mizuR nomowa, kono mizuR nomoawa(飲んだよ)	
” 手い” あげろわ	teR[ɾ:] 'agerowa	
” 窓お” あけろわ	madoR 'akerowa	
” 十よ” かじーろわ	kazuR kazo'erowa	
” パンよ” かもわ	paN'jo kamowa	
わー行きんなこあじゃ	'ikiNnakaroaka(行かなかったか), 'ikiNnakozja(行かないよ)	
” 火は” 熱けじゃ	hiwa 'acukezja noR	
” 肉は” うまけじゃ	nikuwa 'NNmakezja	
” 毛は” 細けじゃ	kewa hosokezja	
” 外は” 暗けじゃ	sotowa kurakezja	
うの” 鱈は” 大けじゃ	'uno kacuRwa boRkezja	
この” 新聞は” ふるけじゃ	kono siNbuNwa hurukezja noR	
昨日	kiniR	
今日	kjoR, kiR	
明日	'asu	
明後日	'asaQte	
” 明後日の次の日”	si'asaQte	中之郷(2009)では saNnasaQte が出る。
朝	toNmete	

昼	hiruma	
夕	'juRgata	
夜、夕べ	'joNbe	
朝飯	'asamesi	「'asake は耳にしなかった」。
昼飯	hjoRra	
夕飯、晩飯	'joRke	
朝日、夕日	'asa'jake, 'juR'jake	という言葉はあった。
春の来たら	haruga kitara	
梅雨の雨は強きゃ	njuRbaino(sigureno) 'amewa cu'jokja 「sigure とは mo'jaQpoi, 'amede zitozito suru ということ」。	
夏の来たら	nacuga kitara	
夏のほとりの暑けだら	nacuno hotoRriwa 'acukezja, 'acukedaror	
	「hotoRri とは hotoboto suru, hotoRQte 'janinarozja の意」。「maQtaku horoRrowa noR」。	
秋の来たら、冬の来たら	'akiga kitara, hu'juga kitara	(「来た」という意味)
hu'juga kitaraba, hu'juga cikakeNte ha'jaku nagasodeR[ɾ:] dasogaN		
冬の寒け風にこぎーろわ	hu'juno kazewa kogiRrowa noR,	「samukja は標準語的」。
丁寧だら	tiRniRdara	「'unohitowa tiRniRdara 'joR」。
” 陰い ” なぶそわ	kagiR, nabusowa	(見えない所に隠す, nabureror(隠れる))
大賀郷	'oRkagoR	
三根	micune	
坂下	sakasita	
八丈島	hacizjoRsima	
檜立	kasitate	
中之郷	nakanogoR	
末吉	su'e'josi, siR'josi, siRsi	(こちらの方が古く、よく使われた)
坂上	saka'u'e	
西郷、休戸郷	nisigoR, ?	
青ヶ島	'a'ogasima, 'oNgasima, 'oNgasimjaR 'iku	
” へつつい様 ” (かまどのこと)	heQciRni kakero	「sama は付けない」。
尻	'una hiR hiroRka,	「hiRri は音も含む」。
随分長け話だら	zuiBuN nagake hanasidara	
	zuiBuN の zui は中之郷(2009)の'izui のそれと同じく、[u]が非常に前寄りだが ziR ではない。調査者に聞かれて「[dzuibuN]より ziRbuN が古い言葉」とも言っているが第一声は上記の音声だ。	
西瓜あかもわ	suikoa kamowa	
とーけ島のみーろわ	toRke simaga miRrowa(見える), keQkoR toRkezja noR	
ひーるめのまこわ (飛ばわ?)	hiRrume(蛾のちょっと大きめのもの), makowa(蛾・鳥が飛ぶ)	
	「'okaikosaN を昔飼ってて、mai になって、出るのも hiRrume と言った」。「suzume, hatome」。	
白蟻め	sjoarime	
	「'ukuno 'ucini sjoarimega cuita soRda, 'unokiwa 'joR sjoarimeno 'jadodara」。	
白鳩め	hatome	「sjoatome は聞いたような気もする」。
ほあき	hoRki	
よあも (よーも?)	'joamo	「苺みたいにツブツブしている木の実」。
岩	'iwa, 'joa	「'ukuno 'joamade 'o'jogogaN」。
穴	'ana	「'ukuno 'anoa kugurogaN」。
洞	hora	「'ukuno horoa kugurogaN」。
石、砂、粒	'isi, suna, cubu	「'ukuno 'isjo hiro'e」。
裸足	hadoasi	
裸、” 背中 ”	hadaka(裸), hedaka(背中)	
” 兄弟姉妹 ”	kjoRdjaR, 'otoane	(婆ちゃんの時代の言葉)
” 兄さん ”、” 弟 ”	'aNcjaN	「同時代は'otoRto で、過去は不明」。

” 姉さん”、” 妹”	neRcjaN	「同時代は'imoRto で、過去は不明」。
” 父さん”、” お爺さん”	toRcjaN, ziRcjaN	
” 奥さん”、” お婆さん”	kaRcjaN, baRcjaN	
はつーの鯉よあがって たもーれ	hacuRno kacu'odara 'agaQte tamo(R)re	
「hacuR は一番先に出た飛び魚・鯉のことで、hacuR'o kubarowa というシキタリが今でもある。 「人によって kacuR'(j)jo とも言う。kacuRcurei という言葉がある」。		
魚	'joR 'agare	「'jo と言うと魚の種類は任意」。
うぬが裂こあ服う縫う わ	'uNga sakoa, hiQcjabukoa hukuR nu'owa, nu'ozja	「過去形なら nu'oazja になる。他に nuQtarowa もある」。
うーどのことはありん なから	'uRdonokotowa 'ariNnakara, 「あんな大きい事は無かったよ」。	
こーどに子う思お親は 少なきや	'uRdoni('ugaNdoahuRni) koR 'omoR 'o'jawa sukunakja	
ふんどーしよ締めとあ じゃ	huNdosjo simetoazja, simetaroazja	
口にはーで喋ろは悪し けじゃ	kucini hoRmete'irete sjaberowa warukezja	
檜立(2008)でも指摘されたが、hoRmete は赤ちゃん・年寄りに食べさせること。'irete が適当。 hoRmaru, hoRmaQtoQciR という言葉もあり、自分で食べるという意味のようだ。		
酒い飲めどー酔いんな こ人だら	sakiR siQkari nomedo 'joiNnakohitodara	
体あこーしてまるぼ人 もあらら	'unohitowa karadoa koasite maruboa hito darara	
伏してあろわ	husite 'arowa, husitarowa	
むしてあろわ	musite 'arowa, musitarowa 'joR	
むそわ	musowa	
道よ通してたもーれ	micjo toRsite tamoRre	
腕い回して運動したら	'udiR mawasite(moasite) 'uNdoRsitara	
明日葉	'jataba	中之郷(2009)では'jaRtaba と回答。
話してあろわ、話したら	hanasite 'arowa, hanasitara, hanasite 'okoaNte	
干してあろわ、干したら	hutoN'o hosite 'arowa, hositara	
飲ませてあろわ、飲ませ たら	(hiN)nomasete 'arowa, (hiN)nomasetara, sakiR hiNnomasete simarara(←simawara じゃなかった)	
酒い飲むにあや酔って 来たら	sakiR nomaNnjaR('ja は任意、飲んだら) 'joQte kitara	
こきー出来て夕飯いみ あれ	kokiR kite 'joRke'o('joRkeR) kame, mjaRre, 'agari'jare	
酒いのもあとき (のまろ とき?)	sakeR nomoatokja	上記・左記の keR は[kiR]。「～時は」。
そごん事はしんなこだ ら	sogoaNdoakotowa siNnakodara(しちゃだめだよ)	
苦ましけ言葉は言いん なこだら	nigamasike kotobawa 'iNnakodara ※moa は出なかった。'iRNnako が出ないのは規則どおり。	
「ニガマシキヤというのは似たり寄ったりというかね。表現が違う言葉。似通っていて間違え易い」。		
すーろわ、ひっちゅーろ わ	suRrowa(すする), hiQcjuRre(ビュッと酒を飲む)	
塩、潮	sjo, sjo	「'uno sjoR miro」。
塩お舐めろわ	sjoR namero	
潮い船い出したら	sjoR mite huneR[ɾ:] dasitara	
今日の潮は速けじゃ	kiRno hunewa, si'owa ha'jakezja	
庭	njaR, njaR'jo hake	
庭あ作ろわ	njaRno hana'o cukurowa	

庭あ出るごん	njaRni derogaN	
うの庭は広きや	'uno njaRwa hirokja noR, dekakja	
家	'uci(新しい言葉), 'ukuno 'e(古い言葉)	
家い建てろわ	'iR taterowa	
家いけーろごん	'iR kjaRrogaN	
うの家はぼーきや (おーきや?)	'uno 'ewa boRkja	
木	ki	
木よ切ろわ	kjo kirowa	
うの木い走れ	'uno kiR hasire	
うの木は太きや	'uno kiwa dekakja, hutokja	
火	hi	
火よ消そわ	hjo kesowa	「gasuR kesowa」。
虫めの火い寄ってまるぼわ	musimega hiR 'joQte marubowa	
火は熱けだら	hiwa 'acukedara(接触), kiRwa hotoRrowa noR(気温)	
海	'umi	「'umiR 'ikogaN」。
海よおでてひありんなこ子だら	'umi'o 'odete hjaRriNnako kodara	
海いひあろわ	kiRwa 'umiR hjaRrowa	
昨日の海は荒れてあらら	kiniR 'umiwa 'joR 'aretete 'arara	
土地	toci	
土地よ買おわ	tocjo ka'owa	
この土地い移って来とあじや	kono tocini(tociR は古い言葉) 'ucuQte kitoazja	
土地は財産とも言おわ	tociwa zaisaNtomo 'joRwa 'joR	
字よ書こわ	zjo kakowa	
字よ書から	zjo kakara	
字よ書きんなか	zjo kakiNnaka	
字よ書きんなから	zjo kakiNnakarara	「ra は2つ」。
字よ書くの一わ、書くの一じゃ	zjo kakunoRzja	
字よ書きぎあなら (書くようだ)	zjo kakuNzja njaRka	
日の良きや、良け日だら	hiŋe 'joQkja, 'jokehidara, 'aNnimo naQkja	
日の良からら、良け日だらら	kiRno higa 'jokarara, kjoRwa 'jokehidarara	
日の良かりんなか	kiRno hiwa 'jokariNnaka, warukedara	
悪しけ日だら	kiRwa waruke hidara	
日の良かりんなから	kiRwa 'jokariNnakarara	
悪しけ日だらら	warukehidarara	「'jokariNnoRwa は良くないの意」。
日の良かんの一わ	kjoRno hiwa 'jokaNnoRwa(良いだろう)	
良け日だんの一わ	'jokehidaNnoRwa	
日の良かりぎあなら	kiRno hiwa 'jokariNgjaRnara 'asuwa 'mada 'jokaNnoRzja 「今日の日は余り良くなくても明日はまだ良いだろうよ」。	
貧乏	biNboR	「biNboRdoRzja, biNboRdaR 'joR」。
頑丈	gaNzjoR, gaQzjoR, 「'ucino cukuriga gaQzjoRdoaNte」。	
痣	'aza, 'aQza	
”馬鹿”	doNgo(理解できない), nuke, baka(人を貶して), kicigjaR 「'ura は'urewa と同じ意味だが中之郷では'ura と言う」。	
”便所”	kaNzjoR	
酒い買って来とあじや	sakiR kaQte kitoazja	
子の泣ってそあごわ	koga naQte soagowa(五月蠅い)	

字よ書って壁に飾ろわ	zjo kaQte kabeni harowa, kakizome'o kaQte harogani
はやりやみあよ病っであろわ	ha'jari'jamjaR'jo 'jaNde('jaQde) 'arowa, 「赤痢・伝染病」。
雑草よ薙っでける	zaQsoR'o, 'uno kusoa naNde, kaQte kero
海に浮かっで沈みんなか	'umini 'ukaNde('ukaQde) sizumiNnaka
台風の来とあで、家のきしっであろわ	taihuRga kitoade 'i'ega kisiNde(kisiQde) 'otoR dasitaroka
死っできありんなこ人	siNde(siQde), maruNde kjaRriNnaka konohitowa
うの木はかしっであろわ	'unokiwa kasiQde 'arowa, 'uciga kasiQdarowa 'joR kasiNde 'aruNzja naino kono 'uciwa
悲しっで伏したら	kanasiNde(kanasiQde) husitarara, nekoNda, kanasiNde 'uraR 'joR husikomara
この家に住っで 40 年だら	kono 'i'eni suNde 'joNzjuRneNni narodara, narara
家を継っで船主になら	'i'e'o cuNde(cuQde) hunanusini narara
「戦後、小中学で標準語を	叩き込まれた為か、今ではQがNに変化しているが、昔はQだった」。
あすっで暮らしたら	'unohitowa 'joR 'asuNde kurasitara
うの人はまるっであろわ	'unohitowa maruNde 'arowa
金い稼っで稼っであろわ	robe(フェニックスの葉)de kaniR kaseQde kaseQde
大声で叫っでよぼあろわ	'oRgo'e('oRgoi)de 'joboarara, 「sakebu という語は無い」。 'una hiRte hiRte 'aNdor, hiRru 「吠えるという意味」。
船主の家の富っであろわ	hunanusino 'i'eno, 'ukuno 'uciwa kanemocidarara
この包丁は砥っであろわ	kono hoRcjoRwa toQde 'arowa, to'isi, toQdokoaNte
飛行機の飛っで行こわ	hikoRkiga toNde 'ikowa, (物が新しくて maku は使わない)
勝負に勝ちてきあろわ	sjoRbuni kaQte kjaRrowa, sumoRni kaQte kjaRrowa
酒い両手に持ちてきあろわ	sakiR rjoRteni moQte kjaRrowa
蝶々みい針で刺して 小箱にいえて飾っ あじや	cjoRcjome'o(-miR) haride sasite hakoni 'irete kazaQtokjaR 'jokezja
貸してけとあ鉛筆うき あそわ	kasite ketoa 'eNpicuR kjaRsowa

資料 9. 末吉(2008)

筆者が調査をお願いした最初の話者である。そのため調査票は最初期のもの。最初に挨拶に伺った際は服部直子さんが同席しているが翌日は一対一である。なお、話者はご高齢にもかかわらず標準語がかなり達者なことで島では有名であり、外来者に分かるように八丈方言の本来の屈折形をあえて標準語風に直して発話しているようだ。

表 30. 筆者による調査データ；末吉(2008)

調査項目	回答内容	備考
1	'ici	
2	ni	
3	saN	
4	siR, 'joN	
5	go	
6	roku	
7	nana	
8	haci	
9	kuR	
10	toR	
100	hjaku	
1000	seN	
1 匹	'iQpiki	/pi/[pi]の[i]は無声化。
2 匹	nihiki	
3 匹	saQbiki	
4 匹	'joNhiki	
5 匹	gohiki	
6 匹	roQpiki	/pi/[pi]の[i]は無声化。
7 匹	nanahiki	
8 匹	hacihiki	
9 匹	kjuRhiki	
10 匹	ziQpiki	/pi/[pi]の[i]は僅かに無声化。
100 匹	hjaQpiki	/pi/[pi]の[i]は僅かに無声化。
1000 匹	seNbiki	
"一ヶ月の最初の日"	cuitaci, 'iciNci	
2 日	hucuka	
3 日	miQka	
4 日	'joQka	
5 日	'icuka	
6 日	muika	
7 日	nanuka	
8 日	'joRka	
9 日	kokonoka	
10 日	toRka	
11 日	zjuR'ici	
12 日	zjuRniNci	
13 日	zjuRsaNci	
14 日	zjuR'joQka	
15 日	zjuRgoNci	
16 日	zjuRroku	
17 日	zjuRsici	/si/[ʃi]は強く [ç] が聞こえる。

18日	zjuRhaci	
19日	zjuRku	
20日	nizjuR	
21日	nizjuR'ici	
22日	nizjuRni	
23日	nizjuRsaN	Nは完全に無声化してQに聞こえる。
24日	nizjuRsi	
25日	nizjuRgo	
26日	nizjuRroku	
27日	nizjuRsici	/si/[ʃi]は強く[ç]が聞こえる。
28日	nizjuRhaci	
29日	nizjuRku	
30日	saNzjuR	
31日	saNzjuR'ici	
”一年の最初の月”	'icigacu	「sjoR ...」(正月)と言いかけていた。
2月	nigacu	
3月	saNgacu	
4月	sigacu	
5月	gogacu	
6月	rokugacu	
7月	sicigacu	
8月	hacigacu	
9月	kugacu	
10月	zjuRgacu	
11月	zjuR'ici	
12月	zjuRnigacu	
一重	'icizjuR	
二重	nizjuR	
三重	saNzjuR	
四重	'joNzjuR	
五重	gozjuR	
六重	rokuzjuR	
七重	nanazjuR	
八重	hacizjuR	
九重	kjuRzjuR	
十重、二十重	zjuR, nizjuR	
百重	hjakuzjuR	「soreR naNte」(それをなんて)。
千重	seNzjuR	
二十歳	hataci, nizjuR	
三十路、五十路、六十路	saNzjuR, gozjuR, rokuzjuR	
四十路	'joNzjuRro	/ro/が[d ^h ro]と閉鎖音化している。
歌ふ	'uta'u, 'uta	「su'e'josino kotobade」。第2ファイル 5:54。
使ふ	cuka'u	「'uta'u Rte 'i'u 'jo su'e'josidemo」。
青ヶ島	'a'ogasima	「mukasino hitowa 'oRgasima Rte, nagametena」。
母が下へ	'oQka	「sorekara 'otoRsaNno kotowa toQcjaN」。
「watasiraga zidainiwa hahano koto 'oQka RteQte 'jobaRQta 'jo」。		
うなり	'unari, 'unaru Rte 'i'utowa 'uno ko'i'jo takaku suru kotokana	
” (筵(むしろ)を)う っ”	bucu	
” 母屋”	boR'je	「zibuNga sumu hoNkeno tokoro'o boR'je」
「ko'ja su'e'josinohitowa sotoni hanareta ciRsa'i 'ucinokotodaro」。←小屋は物置のはず。 「ciRsa'i 'ucini sumu, 'obaRsaNtaciga sumu tokorowa zigura」。		

”大きい”	boRkja	
大賀郷	'oRkagoR	
道へ	mici, doRro	「doQcino miciR 'ikodaR」。
掬いながら	sjakurinagara, sukurinagara	Rte suko naNkade koRsite sukuruzja
”あそこ”へ	'aQci, 'aQcjaN	'ike Rte 'iQte 'osi'erudara 'i'eno hoRgaku'e [ybi]'o nobete
水神様	mizugamisama, mizukumiba, tamari mizu	
mizukumiba Rtowa 'juQte 'iru keredo kokowa mizugamisama RteQte kokoni 'aru tokorowa 'ano mizukumiba Rte 'uN sousou 'ano kireRnisite naNbjakuneN sokono koNna 'anaga tamarimizuga doNNna teNkidemo mizuga taQkiNtaQkiN neNkaraneNzjuR tamaQte 'iruto 'imademo soQkara mizu'o sokono mizu'o nomutowa bjoRkiga na'oru Rte 'iQte 'ano 'arede 'okuQte mora'u hitoga 'iru'jo 'uN 'uNteNsisaN'jo tanoNde soRsite koNna poQto de soRsite sokono mizu'o nomutowa bjoRkiga na'oru Rte 'iQte sono kokono mizugamisamano 'are sorekara micune 'oRkagoRkaramo kumini kuru hitomo 'iru 'uN 'uN soR 'i'u tokoroga kono koko'o hiNmagarutowa 'arudara 【アレで送ってもらおうとは、タクシーのことであろう。】 ※中之郷では takitaki だった。大島 (1986) の tamari mizu (小島) がここにも確認できる。		
”無駄遣い”	buQcjarigane	mudazukai te 'i'utowa 'ano buQcjariganeR cukoRna
Rtemo 'juQta buQcjariganiR cukoRna 'joR te mudazukai te 'jacuna		
来年	raineN te 'i'u kotowa reRneN	[r ^d e:nen]
来月、再来月	raigecu, saraigecu	
再来年	saraineN Qte 'i'unowa sareRneN	[sar ^d e:nen]
川へ	kaRda	
歩む(”歩く”)	ha'jaku 'eRme, 'eRmudazja	
”飲むだろうけど”	sakeR(sakiR が期待された)	meRroka Rtemo, nomu Rtemo
山へ	'jama'je, 'jameR 'ikogani Rte 'iQte[ytte] 'uN soR 'jameR te, 'jama Rte 'jazuN teRneRnja kotoR(言葉を) cukaRnaide	
町へ	maci'je Rte 'iQte maci Rtewa 'iwanaQkaraRga	
maci Rtewa hacizjoRno kotoR maci Rte 'ano su'e'josinara su'e'josino murade macide nakaQtakarana hacizjoRmaci su'e'josidakara		
局へ	'i'ubiNkjoku[yubinkjoql'e 'ikodaRga Rte 'i'uzjaN	
nimocu naNkaga 'aredatowa cukuQtoQte kodomo'o[wo] 'i'ubiNkjokiR 'jariR cuQte deroni Rte 'i'uzjaN cuQte dero Rte nimocuR moQte		
店へ	'ikucumoarukara mise Rte 'iwanaide koRbaitoka su'e'josisjoRteNtoka Rte 'aruNdakara koRba'iR kaimonoN cuQte 'iQte kero Rte 'i'udaRzjaN misenokotowa namai'o kakuwake namai'o 'iQte cureteQte morauwake soto, sociR cuQ 'ano dokosoko'e cureteke Rte 'i'ukoto	
外へ	kjuRsjurNi rjokoRni 'ikiNnoRka seNsei[ten'fei] Qte sasowareta Qdo mukasiwa 'ano roRziNkaide 'aruita 'jo meN meNna 'eR 'ano 'iQkaini 'joNpakugureR 'ano sjukuhaku site zjuRnaNmaN cukaQte	
千葉県へ	cibakeN'je, sjoQcjuR kono cibakeNkara 'ano muguriRga kite teNkusamuguriRga sorekara watasimo teNkusamuguri'o naraQte teNkusa'o muguQte teNkusaR toQte kodomoR sodatetaR daRzjaN 'uN daRde mugurimo dekuru da 'jo	
長母音化した muguriR は「潜る人」の意味のようだ。「jamakuzuriR 山崩れ」も関連現象か。		
坂を	saka, saka'o toRQte doQcjaN dero Rte 'i'u 'osi'eruNda sakaR toRQte hidarisjaN 'ike toka migisjaN 'ike toka RteQte mici'o 'osi'eruwake 'uN, sakaR toRre Rte naR	
血を	ciga dete dete Rtewa 'i'u teR(ciR 期待) hiQkiQtari naNka surutona cjo, ciR te 'jazuN ciga dete dete Rte ←特殊なヨ格形 ciR の可能性。	
水を	mizu	
手を	ciR	'aga ciR mite miro Rte teR te 'jazuni ciR te
'aga ciR mite miro 'urusasa Rte kitanai 'jo Rte 'i'u 'joRna kotoR 'i'unoniwana kitanai'koto'o 'urusasa Rte 'uN maQkuronu naQte koNna kitanaku naQtaruno'o 'urusakja Rte		
窓を	mado	'amado toka kamado toka Rte 'i'u towa ciga'udaro

十を	toR, zjuR	
パンを	paNwa sjokupaNto 'ureto 'arudaNtena 'asamesiga warja paN baQkasi	
daRzja gohaN ... naNzjuRneN te moR hoNtoRni gokugokudenakereba 'asagoaN tabetakotonai moR naNzjuRneNmo daNnaga nakunaQtekara zuRQto nizjuRnaNneNni narimasuga 'ano gohaNwa tabenaide paNtoka satsuma'imotoka satsuma'o 'jaite 'oitari nitoitari site soreo nominagara 'ocjaR nominagaraN toRsite tabete 'asasjokuwa		
”私は”	'aga, wataSiwa Rte 'jowa 'ano 'arja Rtemo 'i'u 'jo 'uN 'arja dokiR kiRwa 'ikowa RteQte 'ano 'ara kiRwa gaQkoR'i derodara toka RteQte	
火は	hiwa	
肉は	nikuwa naninikuga 'Nmakja RteQtei sukizukino monoR 'i'uwake	
毛は	kebisjo, 'atamano kebisjo	
井戸は	'ido Rte 'i'unowa 'aNmari nai 'jo kokoniwa	
鏝は	kacuR, kacuR'jo sasimide kamara Rte 'i'u daRzjaN 'Nmakja Rte kacuR te 'i'odara 'ano nagametenā	
時間は	zikaN, naNzida RteQte tokei naNka kikutokini 'i'u sorenō koto	
一昨日	'ototoi	
昨日	kinjoR	
今日	kjoR, kiR	
明日	'asu	
明後日	'asaQte, mjoRgoNci, mjoRgonici	
”明後日の次の日” ”明後日の次の次の日”	sigasaQte, 'adaN 'iciNci nobiru dakara gogasaQte, rokugasaQte Rte 'i'uka sokomadewa cukaRnakaQtaroR 'jo	
酒	sake'o nomasete 'o'jaziga mena 'okjakuni simazake'o sukinahitowa	
'okaQteR(tiR 期待) ko RteQte 'okaQtede sakeR(kiR 期待) nomasetā hitoda 'jo		
朝	'asa	'ani] (何)。「taigai nitena」(大概似てな)。
昼	hiru	話者は時間帯の名称を直接答えてないが発話から拾える。
”夕”	'juRgata	話者は「夕=夜, 夕飯=晩飯」と言っている。
夜	'joru	'joru R 'juRsjokuno kotowa 'joRke]。
朝飯	'asake	以下の例文で/sa, si/'sa~sa, 'jɪ~jɪ]と軽い閉鎖あり。
	'asamesinokotowa 'asake 'asawa 'asake] 「asita mazimeni 'jarogaN]。これは全体にも言える。	
昼飯	hjoRra	'3時のおやつは cjagasi]。
夕飯	'joRke	'joruwa 'joRke]。
	'na'o(=服部直子)na 'jeR 'ano mimiga toRkede kikiNnaR tokiga 'aQte toNciNkaNno heNzjo sitarisa soR'juRkotoR sitari 'imiga wakaranai kotoga 'arudazjaRda mukasino hitode naR 'uN]。 「jenu'eQcikeR(NHK ; この促音 Q は短いが存在する), 'a'okute[awoqute], curetemiQte]。	
朝日 (02:32-)	'asahi, 'asa 'icibaN sakini 'jarukoQ 'asa 'okite doko'e 'ikuno 'aNtawa	
	'asa 'okitara 'icibaN sakini daibeNka beNzjoka sjoNbeNni 'ikudaroR dakara sono sjoNbeNni 'iku tokoro'o kaN beNzjono koto'o kaNzjoR kaNzjoR te 'iQta da sorekara sjoNbeNno koto'o 'joQbari 'uN soR 'i'uhuRni tada koQcikara 'osi'eru kotowa soR 'i'u koto'o 'osi'ete 'iru desu'jo 'uN koR 'i'u sicumoNdenaku koQcide 'ano mukasikara cukaQte 'iru koto'o 'osi'erukara keQkoR muzukasiku 'jaQte 'iruNdesu'jone 'ano daga koR site kikudakenokotodatowa taigaino kotoga sugu heNziga dekiruga hacizjoRno koto gokasoN ciga'ukara 'iroNnakoto'o sjaberenaī daRzja	
朝焼け	'asa'jake daRNte koR 'asa kogane(黄金) ... hikarutowa 'asa'jakeno hiwa 'amega hurowa Rte 'i'uNda'jona 'uN	
夕日	'juRhi, higa kurete, higa kurerowa	
夕暮れ	higure Rte'wa 'jaQpasi higa kuretara Rte 'jo kotodana higure Rte 'i'udaroR korewa 'juRgure Rte'wa harja higurasi'ara Rte	
春、春雨	haru, haruno 'ameno samidare Rtemo 'joga 'uN	
梅雨、夏、秋、秋雨	njuRbai, 'uno cu'juga 'aketara Rte korewa harja 'uno cu'juga haiQte 'amega huQte baQkasi 'arudaRdaRzja soR suQto kaminari'ga naruto cu'juga 'aketara Rtemo 'juQte korewa cu'juga 'aketara Rte cu'juga 'akete nacuN narara RteQte nacukarawa 'akiN narara RteQte kore meNna kimaQtaru kotoda 'uN korewa 'akino 'ame koriRwa 'ani Rte 'iQtakanaR	

korewa 'aki'ame Rtewa naNnokotoR 'iQtaka toRkjoRwa 'ani Rte 'i'uN koriRwa 'akisame Rte 'akisame Rtena 'akisame Rtewa 'iRNnaka su'e'josidewa	
冬	hu'ju
”暑い”、”暑さ”	'acu'i Rte 'jo kotoRwa hoQ sjasjakute Rte 'i'u 'jo 'uN harja nacuN naQte sjasjaku naQte RteQte 'acusa 'uN sjasjakja Rtena [atsuy] koto'o sjasjake kiRwa sjasjakute sjasjakute sigotowa sareNdarara Rte 'jowa daRNte 'acusaga cuzuite naR
日照り	hoteri (←hotoRri が期待された。)
日照り	'oR'amedarara Rte 'aR waR korewa 'oR'amezjanai hiderida
”寒い”	[s:: s:::: samui: s samuy] kotowa kogiRrowa samusaga cuzukukoto'o
”丁寧だ”	'aNmari ciRNiRde Rte
蔭へ	kagewa
末吉	korewa su'e'josino kotoba ? hoRgeN seisi Rte 'i'u'jo micuneno hitowa
'uN soR su'e'josino hitowa su'e'josi 'uN kono su'e'josiniwa 'uno 'omeR wakakeNte waka ... 'uno sjoRgaQkoR te 'i'u monowa meRzi 'joneNni sumidakuni sjoRgaQkoR 'uno ga hazimete dekita soR da'jo 'uno 'arede watsiwa ki'okuno tameN korenimo koRsite meRzi 'joneNni sumidakuni 'uno sjoRgaQkoRga hazimete 'uno terako'ja Rte 'i'unowa 'aQta soR da'jo beNkjoR suru tokorowa sjoRgaQkoR to 'i'u namaiwa 'uno meRzi 'joneNni dekite hacizjoRsima'ewa meRzi goneNni su'e'josini sjoRgaQkoRga dekite su'e'josino hitowa rikoRda 'atamaga rikoRda Rte 'iwareru (笑い声) sorede kono nagatoro to 'i'u hitoga nagatoro to 'i'u hitoga kunikara nagasarete kono nagatoro Qte 'iQta koto naidesjoR kono murade 'icibaN 'u'eno daidai 'uno mukasino kotomo naNnimo hoNmono QteQte 'uno keNgakuni 'iQta tokorodaga sokono hitoga kite(11:47-) hacizjoR ... su'e'josinimo terago'jaga 'aQta soR da'jo su'e'josi'e sjoRgaQkoR'o meRzi goneNni sorede haci ... su'e'josikara micune 'oRkagoR'ewa 'atokara sjoRgaQkoRga hu'eta tokoro dakara su'e'josino hitowa rikoR da'jo Rte watasiga zimaN suru (笑い声)	
”へっつい様”	heQcuisama, mukasino kotoda kamado'jori ma'eno kotoba 'uN 'joku mata doQkara micukeruka(/cu/[tsu]は非常に前寄り)
睡眠	suimiN Qte 'i'udaroR daredo hacizjoRno hitowa suimiN te 'i'uka
netaRka Rte nemuretaka Rte 'i'u koto'o suimiN dekonakaQta Rte 'i'u hitoga 'iru daroR daqa hacizjoRno hitowa nemuretaRka neraretaRka Rte (※sui[suy]になること多し)	
西瓜	suika[suyqa]
終に・遂に	'owari
”見える”	miRroka, miRru, miRrowa
蛾	cjoRejo, 'uno saNnagi, saNnagimeR micuketara([tsu]は前寄り&無声化)
Rte 'i'uzja, saNnagiwa musiN naQte cucino([tsu]は前寄り&無声化) nakaN ha'iQte 'iru 'jacu 'uN toNderu 'jacu 'urewa 'aretowa cigaQ kono ga Rtewa su'e'josino hitowa cucino([tsu]は前寄り&無声化) nakani saNnagimeni naQte sanagini naQtaru 'jacuR ga Rte 'jowa (ここで調査者が「ヒルメに似てる言葉はありますか」と聞いたところ、) 'aR nigamasi'i kotomo 'ariwa sjowana ※調査者が最初に「チョウチョより小さい…」などと言ったため、蛹のことと思って話が進んでしまった。※最後にヒルメという語を聞いて何をどう気付いたか不明だが、「似たり寄ったりで間違え易い言葉もあるものだよな」と述べているようだ。ニガマシイは中之郷(2008)を参照せよ。	
白蟻	sjaRri
”兄弟姉妹”	kjoRdaiwa kjoRdeR 'uno kjoRdeRga 'oRziRdarara Rte 'iQtarisite kjoRdai 'ane'ja 'imoRtono koto'o 'oQkurumete
白鳩(”キジバト”)	sirobato
箒	hoRki
山桃	'joRmo Rte 'i'unowa kogaNdaR neRQkoke me neRQkoke 'jamamomo
Rte 'i'uka 'uno murasakiN naQte tane ... mi baQkaside kamu tokoromo naQke mono ... 'jamamomo Rte 'i'uto 'joRmotowa cigoRdara micuneno baR'i becuno simamono 'uN 'joRmo Rtewa 'uno murasakide kogaNdaR cubude 'uno 'umebosino mi'jori mada ciRsakute soR 'i'unoga murasakide 'amazuQpa'inoga 'aru su'e'josiniwa na'i micune 'oRkagoRN 'aru	
岩、石	[ywa]wa 'uno hamano 'ureno 'isino kotoR [ywa] Rtemo 'i'uzjaN 'isitowa cigaQte [ywa] Rtewa 'umino nakaN 'aru 'arega [ywa] sorekara 'isiwa 'okademo dokodemo 'arunoga 'isi 'umino nakano 'isinokoto'o [ywa], [iwa] Rte 'i'u 'jo

砂、粒	sunā, cubu	
裸足	hadāRsi	
裸	hadaka, hedaka	
” 背中”	senaka, hedaka	
” 背丈”	setake Rtewa seRno takasa RnaR	
” 兄さん”	'aNcjaN	
” 姉さん”	neR'ja, neRcjaN, sono cugino neRcjaN'o neRcjaN te 'iQtaNda	
” 父さん”、” 奥さん”	toQcjaN, 'jomesaN	
風付き(” 様子”)	huRcuki, 'uno karadano 'are'o narihuri Rte huRcuki narihurjo heNna kaQkoR'jo site mikuto narihuri Rte 'iQta	
湯を	'ju	
魚	'jo	
” 縫う”	nuRkoto	
” あれ” 程	'arehodo Rtewa 'urehodo Rtemo 'joni 'arehodo Rtewa 'jazuN	
” お爺さん”	'oRsama	
” お婆さん”	kakaR	
子を	ko, kodomoga 'umareta	
” これ” 程	←これを指して「sokomo naNdaka niqamasi'i neR」。	
” 思う”、” 思う時”	'omaRrerowa, 'omaRrero tokini na Rte	
禪	huNdosi	
頬みて(” 口に含んで”)	kucini hukuNde to 'i'u koto'o	
飲めども	nomaredoRmo	
” 壊す”	buQcjakasu	
伏して	husite	
” 燃やす”	mu'jasu kotoR naR 'uN, mu'jasu kotowa mu'ja ... sogaNdaQkadara 'joR(そのままかもだよ)	
通して	toRsite, toRQte	
回して	maRsite	
明日葉	'asitabano kotoR 'eRtaba su'e'josiwa	
話して	hanasite	
干して	hosite	
飲ませて	nomasete	
” 飲んでいてと”	noQde 'arutowa	
出来て(” 来て”)	dekite	
” 飲んだ時”	noNda tokiniwa	
” しないんだ”	siNnaRdara	
” 啜る”	cuzuru, cuzukeru, 'ikjo sjowa Rte 'i'u kotokana, nomu kotoka, susuru	
塩	si'o, sjono sitara Rte 'i'u daRdaRzja(※文意不明)	
潮	si'oRmo 'joR hacizjoRdemo 'umino sobade nitara seNsoRzibuNniwa sjo 'uN si'odenakute sjo sjoR moQte ko Rte 'i'udaRzjaN	
庭	niwawa njaR	
庭へ	niwa'e derogaN te njaR'iR derogani Rte 'i'udaRzjaN njaR'iR derogaN hotoRrowa RteQte sogaN 'i'Qte 'i'udaR daRzjaN	
家	'uciN naka 'ucino kotowa 'jeno naka 'jeno nakawa hotoRrowa Rte	
木、木を	ki, kjo kiru Rte daRNte ki'o kiruto	
火	hi	「miRNnai」。
火を	hjo cukero Rte	
実	minoru Qte 'i'u ziwa zicu to 'i'u zi, mino 'irara Rte 'i'udaR daRzjaN	
miga taberareru 'joRni naQta koto'o miga 'iraRNte kamogani Rte 'uN		
マッチ、マッチを	maQci, maQcjo moQte ko Rte 'iQtari, maQciwa dokoda Rte 'iQtari site	
(訪問販売の人が要らない物を) kawaseRsjaRte(形態論不詳) 'uricukeni kuroNte 'oQkanakja Rte kowa'i koto'o 'oQkanakja 'uN kawaseRto(←kawase'joRto でなく) site kurunode kowa'i		

” 字を書く ”	zi'o kaku, zjo kaite RteQte naR	
” 字を書いた ”	kakaRzja Rte, zi'o kakaRzjani Rte	
” 字を書かない ”	zi'o kakiNnaRdara Rte	
” 字を書かなかった ”	zi'o kakiNzaraNte 'jo te, zi'o kakiNzarara Rte ※上記の za はほぼ完全に[da]に聴こえる。三根では zja が現れる箇所。	
” 字を書くだろう ”	zjo kakudaroR	
” 字を書くようだ ”	zi'o kaku'joR daRga Rte	
” 字が良い ”	ziga zjoRzu daRzja Rte, 'joQkja, zjoRzudaraR daRzja Rte	
” 字が良かった ”	'jokaraRzja Rte, 'jokaraRzjani Rte	
” 字が良くない ”	'jokunakute naR	
” 字が良くなかった ”	'jokunakaraRzjani Rte	
貧乏	biNboR	
頑丈	gaNzjoR	「goRzjoR は makegirai」。
買ひて	kaQte, ka'o daRzja RQ	
書いて	kaite	
病みて	'jami Rte 'jowa 'jo koQcidemo bjoRkino kotowa	
死にて	maruNde	
傾ぎて	kasjageru	
悲しみて	kanasimi, kanasikute	
konogoro 'jaQpasi hjoRzjuNgoru cuka'ukara 'uno hoRgeNga dowasureni naQcja'u 'jo hoRmu'e 'iQtari 'aQci koQciR de'aruki suru moNdakara sorede meNna 'aitega hjoRzjuNgodakara soreni 'awase'joRto site ma'jo'u ma'joQte		
住みて	suNde	
遊びて	'asuNde naR, 'asubi	
稼ぎて	kasegi, kaseQde kaseQde Rte hatarako hito'o	
叫びて	'sakebi Rte 'i'u kotoR hiRkuruQte hiRkurui	
富みて	'jutakana hito'o naR 'uN kanemocidara Rte 'jowa	
低ぎて	toQde	
勝ちて	kaQte Rte kacimakeno naR	
持ちて	moQte	
貸して	kasite	
刺して	sasite	
「(父親の職業は) humanusi, rjoRsjju」。		
boraRzaR[d'a:](洞輪沢) te 'ima 'iru tokoro 'omeRga boraRzaR[d'a:] te 'i'utoko 'uN ボラーザーて、今いるところあなたが。ボラーザーていうとこ、うん。 sorede 'u'eno 'jamakuzureRga 'aQtanode 'uci'o cubusaretanode mikono'o'e hiQkositaNda 'uN それで上の山崩れーがあったので、うちを潰されたので、神子尾へ引越したんだ、うん。 sorede sono sonotokini nakunaQta hitoga 'jamakuzuriRde nakunaQta hitoga zjuRsciniN それで、その、その時に、亡くなった人が、山崩れーで亡くなった人が 17 人。 tasoNno hito'jara kunino hito'jara tocino hito'jara naNde soNnani 'aredaka Rtetowa 他村の人やら国 (江戸・東京) の人やら土地 (地元) の人やら、なんでそんなにあれだかと言う と、 'ano 'ogasaRra'jukino hunega ciRhuRmaru Rte 'i'unoga 'ano su'e'josini cuita tameni あの、小笠原行きの、船がチーフー丸っていうのが、あの、末吉に着いたために、 'ano sokono 'jamakuzureRde soNna giseRsjaga 'jokeR detano 'uN sorede 'ano 'imadani あの、その山崩れーでそんな犠牲者が余計出たの、うん。それで、あの、いまだに、 'ano ciRhuRmarukara 'orite su'e'josi'o mi'joRtosite 'orita hitoga 'ano 'umoQ siNzjaQtawake あの、チーフー丸から降りて、末吉を見ようとして降りた人が、あの、埋もつ、死んじやったわ け。 soRsuruto sonohitowa wakaranaikara watasirano sumutokono mikono'ono hakabani そうするとその人は、分からないから、私らの住むとこの神子尾の墓場に、 'imadani 'uzumoQte 'iru'jo sonohitowa 'juku'ehumeRto fite kazokuwa 'irudaroRkeredo いまだにうずもっているよ。その人は行方不明として家族はいるだろうけれど、 'ano soRedakara watasiwa 'ikeba senkoR'o 'ageru'jo 'imademo sonohitoni 'otokono hitoga		

あの、それだから私は行けば線香をあげるよ今でも、その人に、男の人が。
'usimo 'usimo naNtoRka 'ogasaRra'e cumu'joRna cumu'joRni 'acumeta 'usimo cubusitasi
牛も、牛も何頭か、小笠原へ積むような、積むように集めた牛も潰したし、
niNgeNmo cubureQ soRsite koroQ zjuRsiciniNmo nakunaQta niNgeNmo soRnaQte
人間も潰れっ、そうして殺っ、17人も亡くなった、人間も。そうなって。
meNna ki'okurjokuwa watsiwa cjoRmeNni meNna cukerukara naNdemo kaNdemo
みんな、記憶力は私は帳面にみんな付けるからなんでもかんでも。

資料 10. 青ヶ島(2008b)

話者は標準語をほとんど発話できないが聞き取りはできる。従って調査者は標準語で質問し、話者は方言で回答している。但し、視力の問題からか、あまり調査票に沿った調査はできなかった。しかし、文字や標準語にまどわされないご高齢の方言話者による音声・語彙資料として、録音データは非常に貴重と思われる。

表 31. 筆者による調査データ；青ヶ島(2008b)

調査項目	回答内容	備考
1	'ici	
(数字の1はこちらでも1ですか?→)「suRzino 'ici?」。		
4	siR	
5	goR	
6	roku	
7	sici	
8	haci	
9	kuR	
10, 100, 1000	zjuR, hjaku, seN	
”一ヶ月の最初の日”	hitocuki, 'icini, cuitaci(※/ui/[uy])	
大声で歌お歌うわ	'uta'o 'utainagara	
なう皆でときあつてい ごごん	nau minade togi'aQte 'ikogoN	
「koreni kakeRte(書かれて) 'aruzjaN meNna(笑い声) 'uN」。		
やうらうれい見てある わ	↓意味：し、静かに、静かにで行って見ているよ、静かで(略)。	
'ja 'jauraN[jeo ^d ran] 'jau[r]aNde 'iQte mite 'a[r]jowa 'jau[r]ade 'iQte mite 'a[r]jowa ※語中にもかかわらず、[r]の閉鎖が上記の発話の最初のほうほど強く聞こえるが、語頭ほどじゃない。/r/の性質として閉鎖・弾きが強く、たとえ語中だろうと通常速度以下で発話すれば軽く閉鎖が出る様子。		
あうがしまのあおけう みだら	'augasimano 'a'oke 'uta 'uta mi darau[da ^d reu] 'utamida[r]au	
ほーごーていけーろわ	kerowa	←くれる、の意の語か。
ぶなりのきけいろわ(う なり?)	'unari	←うなり、だけちゃんと発音。
”道い”出たろわ	detarowa Rte na	
掬いながら	monau 'inagara ka	
”うきー”行ごごん	'ukiR 'ikogoni, 'ukiR 'ikogoni	
水神様	mizugamika kamisa ... kamsama, ... mizugamisamaka	
来年	raineNno koto'o raineNno koto'o reRneN[^d re:nen] te 'uN raineNno kotowa reRneN[^d re:nen] te	
来月、再来年	raigeçu, saraineN	
”川い”行こわ	kawa, 'ikowa[yqowa],	
発話：'ike Rtemo 'i'u'jo 'ike Rte 'uno kawano kotau ko ... koQcino 'ike'jo ... 意味：池っても言うよ、池って、あの、川の事をこ…こっちの池を…、 発話：'aberogoniR kosiriR kauruto kawa'i te 'abiR 'ikau 'ikei te 'i'uN'ja 意味：浴びようよ、腰へ(=腰まで)凍ると川へって。浴びへ(=浴びに)行こう池へって言うんだ。 ※金田(2001) pp.18, 47は青ヶ島におけるイー格膠着形が/riR/であると述べている。		
ふたつの足でえーもわ	hutacuno hutari hutacuno 'aside, "eRmu"ka, "eRmu"daroka	
”山え”行こわ	'jama'je 'ikowa Rte 'i'uzjaN,	
”店い”行こわ	korewa mise daQtaQke na	
島の”外い”行こわ	sima simano sotoni 'iku 'jo 'wa, 「行こわ」を指して発話↓	

kore miro koQcino koko koguN kotobaga heN (これ見ろこっちのここ、こんなに言葉が変)		
” 千葉県い” 行こわ	cibano	
” 血よ” あらうわ、ある ーろわ	'ara'owa	
” 水う” のもわ	mizuR nomarowa Rteka	
” 手い” あげろわ	tei 'agerowa	
うの” 鱈は” 大けじゃ	'uno ...wa baukezja	
この” 新聞は” ふるけじ や	kono ... hurukezja	
「'ikowa Rte 'iRNnai 'iku'joRte 'iQte kita Rte 'jowakezja」。		
今日、昨日	kei[ei], kinei[ei]	
明日	'asu, 'asita	
明後日	'asaQte, 'asaQteno hi	
” 明後日の次の日”	saNnasaQte	
” 明後日の次の次の日”	sono cuqja si'asaQte Rte 'i'uN'jo	
朝	'asa, toNmete, koQcino kotobazja toNmete Rni Qte 'i'uzjaN	
昼	hiru	
夕	baNgata	
夜、夕べ	'joru, 'joNbe	
朝飯	'asamesi	
昼飯	hiruno kotowa maR mukasino hitowa hjaura Rte 'iQtakeredo	
hiruR 'uN? 'imawa kodomoga meNna hjauzjuNgodakara hiru Rte 'i'u		
夕飯、晩飯	'jauke	
「mukasino kotau 'omairaga wakariNnoRte 'oseirowa RteQte 'i'ukara sorede kau naQte maNzai 'jaQte kite sorede warawasete maNzai 'jariR (cuQtariR)zja korega tosi'jorino mesi'o 'are tabesasero ... da sorega ... da 'oNnazi hitodoRgasa na korega kogoniR 'osewani naQteru Rte kau 'jaQte 'jokosuNda 'uno kokugaikaR kokomade ... goN naQte detara」。		
「mukasino kotoboR 'ureNseba wakaranaikara 'i'uNde warawasero maNzai 'jaQte kikase'o'u」。		
春が来たら	haruga kita	
梅雨の雨は強きや	'amewa	
夏はほたうってほたう って	nacuwa hotauru, hotauQte hotauQte	
秋が来たら、冬が来たら	'akiga kitara, hu'juga kitara	
冬は寒けじゃ、風にこげ いろわ	hu'juwa samukezja kazeni kokowa kogeirowa ※ 「kazeni」という助詞の使い方の正否については不明。	
meNna sa mukasino kotoba ... sorede maNzai 'jaQte ... sorekara 'ocjoR cuga'o moN 'ocjoR cugeba ... daidokorono ... bauzihira R 'ocjoR cuge RteQtara ... tosi'jorini hiruR tabesaseruda ... sorewa sore Qte ... wakaranai hitowa wakaranaida ha'ja kiQte suguwa basamaga 'i'u kotowa kikuNda'jo RteQte ... keQka 'obeite katicukete moQte 'aru		
” 陰い” なぶそわ	「kore 'ani Rte 'jomodoR」。kagei, meNna	
大賀郷、三根、中之郷	'oukagou, micune, nakanogou	
八丈島、青ヶ島	hacizjoRsima, 'augasima	
” へっつい様” (かまど のこと)	heQcjei temo 'i'uni heQcjeiwa kamadoto cigaQte kono	
heQcjei te 'jowa 'uno 'aresite kosireRte sorede suruto heQcjei te kamadowa kogoN kosireRte kokou ... gotoku RteQte cukaQta ... sorega kamado 'uN gotokuR nabei ... sorega kamado Rte ... kamado Rtewa maNwa daremo gasu cukaQte kamado Rtewa 'iRNnoRga sa heQcuiwa heQcui cukeRruN mukasiwa [g]lamado Rte 'iQtaNda gotokuR ... miQcu ... kokei nabei ... doRte kamadou gomi kubete no ... 'ucino nakade ... tabetoRdoRzja 'imawa gasudaNni ne sorega kamado		
屁	'aNno koto 'anjo, he, heQpiri	
kokou siQgeta Rte siQgeta kusou hiro siQgeta 'una kecu'acu hakarozja kecu'acu hakaro monowa moQte kitoRka Rte 'jazuni siQgetoRwa moQte kitoRka Rte 'iQtaNda siQgetoRwa moQte kitoRka Rte 'iQtara sorega maNzaini naruNda ... maNzai ... 'jaQteru Rte warawareru meNna		
西瓜おかもわ	suikoR kamowa	「meNna」。

'aredake 'u'eno hitowa daremo naikaR ... 'amerikakaRmo kuru kamisamano kotoRmo kikiR kuru sirabei ... meNna mukasino kotowa meNna siQde simaQte meNna 'arega 'icibaN 'u'ede sono cugi kikucisaNga sono cugi daQtaga kikucisaNmo 'ima siQde sorekara sono cugi 'josi'jukito 'arai 'arai 'josi'osaNto micikosaNto sono cugi 'jaNnaroga 'uno kaNnuso soreraga sineba tosima 'jera nai 'jo si goniN sineba no kjoneN 'uno kikucisaNga hacizjuR hacizjuRhadidakani naru no hadidaka kudakani naru 'jo no sorede siQde hacizjourI'R 'umeruzjanai maR ... kaR detemo minai sorega 'icibaN 'otokozja 'u'e meNna siNde saQte simaQta hara kamisama 'ogamu hitomo naki ... da 'oukina 'i'e 'iQpeR mitauriNmo 'jotauriNmo suwaQtoQte 'ogami 'aroga si goniN sika 'inai		
たうけ島がめいろわ	tauke simaga meirowa RteQte cikake simadoR ...	
へいるめのまこわ (飛ばわ?)	heirumeno makowa, tobowa	
白蟻め	「'jomeNnaka」。'arime, 'jei kuR me, siro'ari	
ほーき	hauki	←hoRki が期待された。
よーも	'joRmo, sorekara 'uno kanomi RteQte kuwanokini sorekara	
koQcino 'jamaN kini kogoNdoR momono ... 'urei momo Rte 'i'u ... 'uredoR momo Rdenaku 'jamaN kiwa ... 'uredara kiwa ... sorega no 'Nmakedara 'amaQtarakute kanomimo ... 'Nmakega sono momono maNkaR saQkatawa cjoQto ... momo Rte		
岩	'iwa[ywa], mama	
裸足	hadoRside, 'eRmowa	
'isa'o RteQte kokono 'uno 'juRbiNkjokuno ma'eni 'aro sorega 'osi'e'jakude meNna kono simakotoboR ... 'osi'e'jakude meNna keQka naraQte sjabero goN naQte ... sorega sinoRdara sorede soremo na huzjakemoNde na ... guN huzjakemoNde wazawaza sore'o hikidasodara mukasino kotoboR sau 'jaQte warawasetaNda doRga sorega siQde hara go rokuneN sicineNni naru no		
”兄弟姉妹”	kjaudai	以下に kjaudeR も出てくる。
sorekara sono 'otokonokau cjounaN'jo tarau zinaN'jo zjau saNnaN'jo sabau 'joNnaN'jo sjau gonaN'jo gorau [d'ro]kurau te 'jo mega 'aruzja sore ... no zjuNbaNde 'umarero soreimo meNna 'aga 'joboRrutoko wazawaza wakariNnoRdara mata 'oNnanokowa cjouzjono ... 'jo njoko Rte 'i'u no mukasino hitono no sorekara sono cugja naka Rte tego Rte kusu Rte ziRrau teQte zjuNbaNni mukasino kotobaga ... wakariNnoRdara mukasino kotobade na ... zjuRruRmademo zjuR'iciruRmademo 'oNnagowa 'otokowa siQcjau haQcjau teQte sicirau hacirau te wagaino mukasino 'ukuno 'ukuno 'jeni nikaN naraQda sorede zjuRniniN zjuRsaNniN neRte sorega meNna simani kau simazjuRni curete 'oru koQcini ... meNna hiroikedarau hiroike sorede kuRruR zjuRruRmademo ... 'otokomo sogoN meNna koQciR si'jaroN sorega 'ogasaRaN 'jamoR micuke simoR micukete haNbuNwa 'iQte simau no mukasi sjuQcjau site meNna sono 'jeno 'urega si goniN ... mukasino hitodaredou sorekara 'otautonoga kjaudeRga ... 'joQtari goniN 'ikoda 'ogasawareR cicizima hahazima [yweu]zima saN saNkasjei sorega meNna mukasino koto tarau zjau sabau sjau teQte sorekara njoko naka tego kusu ziRrau te ... sogoN ... 'joboRruto njoko naka teQte 'umarete sugudoR mei'jausini tarau te cukeru sogoNdoR waroRsete meNna maNzai 'jaru ... maNniwa hutarisika saNniNsika nasini koQcino hitowa meNna mukauni ... mukaukaR koQciR kite kau 'jomeni kuru koQcino hitowa 'jera koQciR ... naru naQkede ciQtomo 'aQciR dete simau 'aQciR dete koQcino hitowa 'jomeni kuru 'aQcino hitono koQciR kite 'jomeni kurono haNtai sorede mata koQcino ... wa naQke moNni naru kokoirano baQka koQcino ... wa ... gawano ... 'juRbiNkjokuno mototo kokono 'jasuNdowa nikaN ...		
”兄さん”、”弟”	'aNcjaN	←日露戦争までは使ってた言葉たち。
”姉さん”、”妹”	'iNne, neicjaN	「'otoRsaN te 'jowa mena」。
”父さん”、”お爺さん”	totau(父), ziRcjaN	
”奥さん”、”お婆さん”	'oQka(母), 'uNma(母), baRcjaN	
魚、飛び魚	'jo, sakana, tobi'jo	
おめーが裂こー服う縫うじゃ	'aga, 'uNga, 'omaiga, 'omeRga, 'ozjare, 'iki'jare	
こうどに子う思う親は 少なきや	meNna kodomowa (青ヶ島を)buQcjaQte simau	
道よ通してたまうれ	micjo 'osi'ete tamaure te 'jo wakezjaN	
明日葉	'eRtaba, 'asitaba	

塩、潮	sjo	「hakoQde」。
庭	na	「鶏は natorime」。
家	'je, waga'je, 'unaga'je, nau tatete(更に建てて)	
貧乏		「'uguNdoR, 'eRda(間)」。